

# 1. 京都第二外環状道路関係遺跡

## 平成20～22年度発掘調査報告

(調子地区 a)

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画された京都第二外環状道路敷設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局の依頼によって実施されたものである。道路は長岡京市域では長岡京市南部を東西に流れる小泉川にそって山間部に至るルートが予定されている。

このルートは桓武天皇によって造営された長岡京跡域南部に当たる地域を横切ることから、ほぼ全域にわたり発掘調査が必要であると考えられた。同時に小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが、本来は大きく蛇行しながら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も指摘できた。発掘調査の必要な所を特定することを目的に、平成15年から試掘調査を先行して、調査可能な地域から順次小面積の調査を行うと共に、面的な調査が必要な地域には本格的な発掘調査を実施してきた(岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008、中川・大本2009、中川・戸原・岡崎ほか2009、岡崎ほか2010)。

今回報告する発掘調査地は、長岡京市調子2丁目に所在する。調子地区の調査前は、水田として利用されていた。調査対象区域の中央部に里道があり、その北側を a・c 地区、南側を b 地区と名づけた。平成21年度調査は、現地調査については西日本高速道路株式会社(NEXCO)の依頼によって実施されたが、遺物整理については国土交通省が経費を負担し、20年度、22年度の発掘成果とあわせて今回報告する。

本報告書は中川・黒坪・奈良が執筆し、中川が取りまとめを行った。また、執筆か所については文末に明示した。

本報告書で使用した国土座標は、現地記録も含め第IV系(日本測地系)を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

発掘調査、報告に当たっては、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター職員のご指導と御助言をいただいた。また、現地調査については、地元調子地区自治会、調子地区農業組合、調子地区まちづくり協議会の皆様にご支援をいただいた。記してお礼申し上げます。

平成20年度(長岡京跡右京第938次・946次調査)

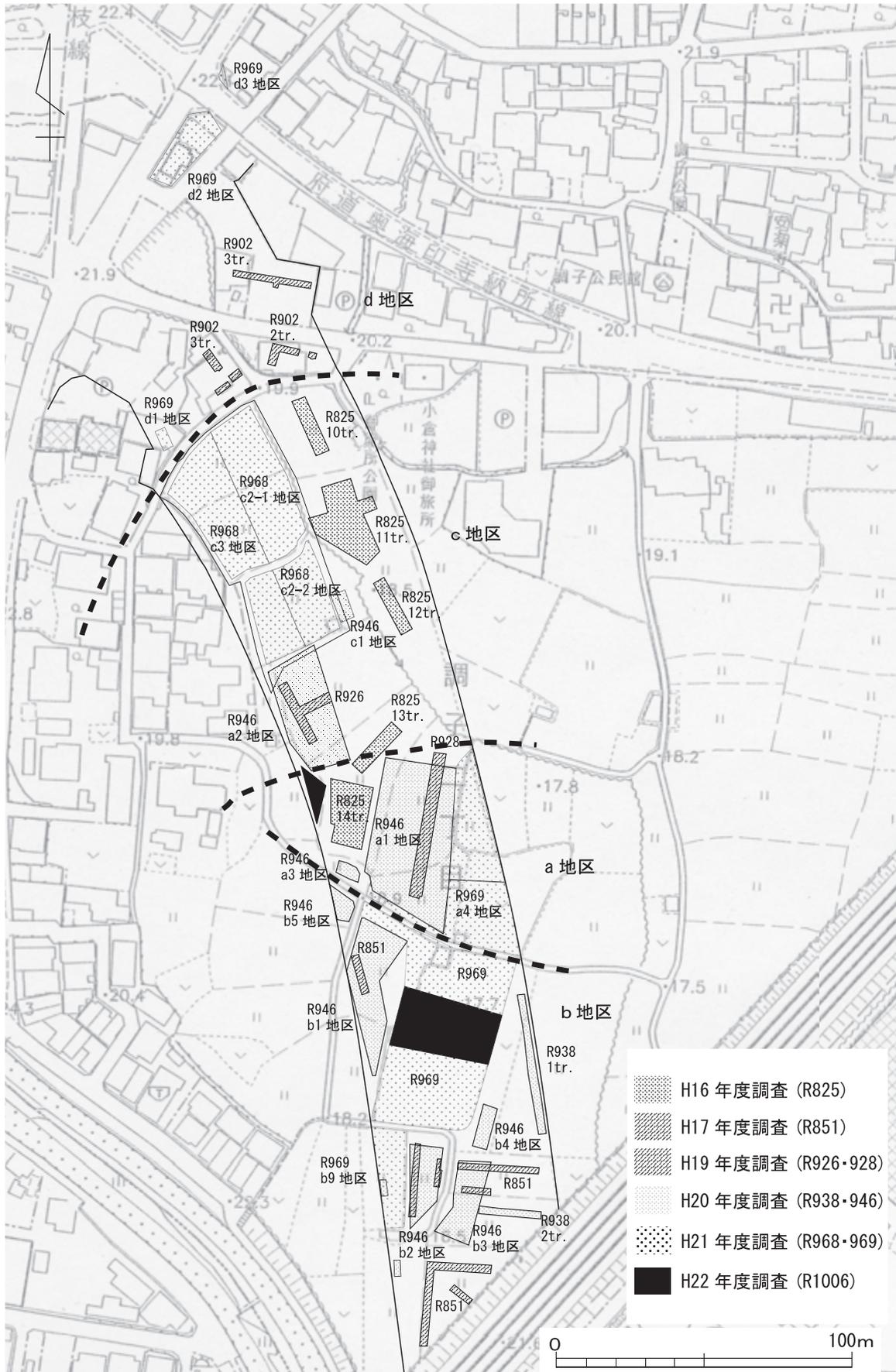
現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課第2係長 森 正

同 主任調査員 竹原一彦・中川和哉・森島康雄

同 専門調査員 黒坪一樹

調査場所 長岡京市調子2丁目



第1図 調子地区調査地配置図

現地調査期間 平成20年6月17日～平成21年2月17日

調査面積 3,220㎡（b地区も含む）

平成21年度（長岡京跡右京第968次・969次調査）

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課第2係長 森 正

同 主任調査員 引原茂治・戸原和人・竹原一彦

同 調査員 奈良康正

調査場所 長岡京市調子2丁目

現地調査期間 平成21年4月8日～12月22日

調査面積 2,230㎡（b地区も含む）

平成22年度（長岡京跡右京第1006次調査）

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 第2課主幹第2係長事務取扱 石井清司

同 次席総括調査員 田代 弘

同 主任調査員 竹原一彦・増田孝彦・中川和哉

調査場所 長岡京市調子2丁目

現地調査 平成22年8月23日～10月28日

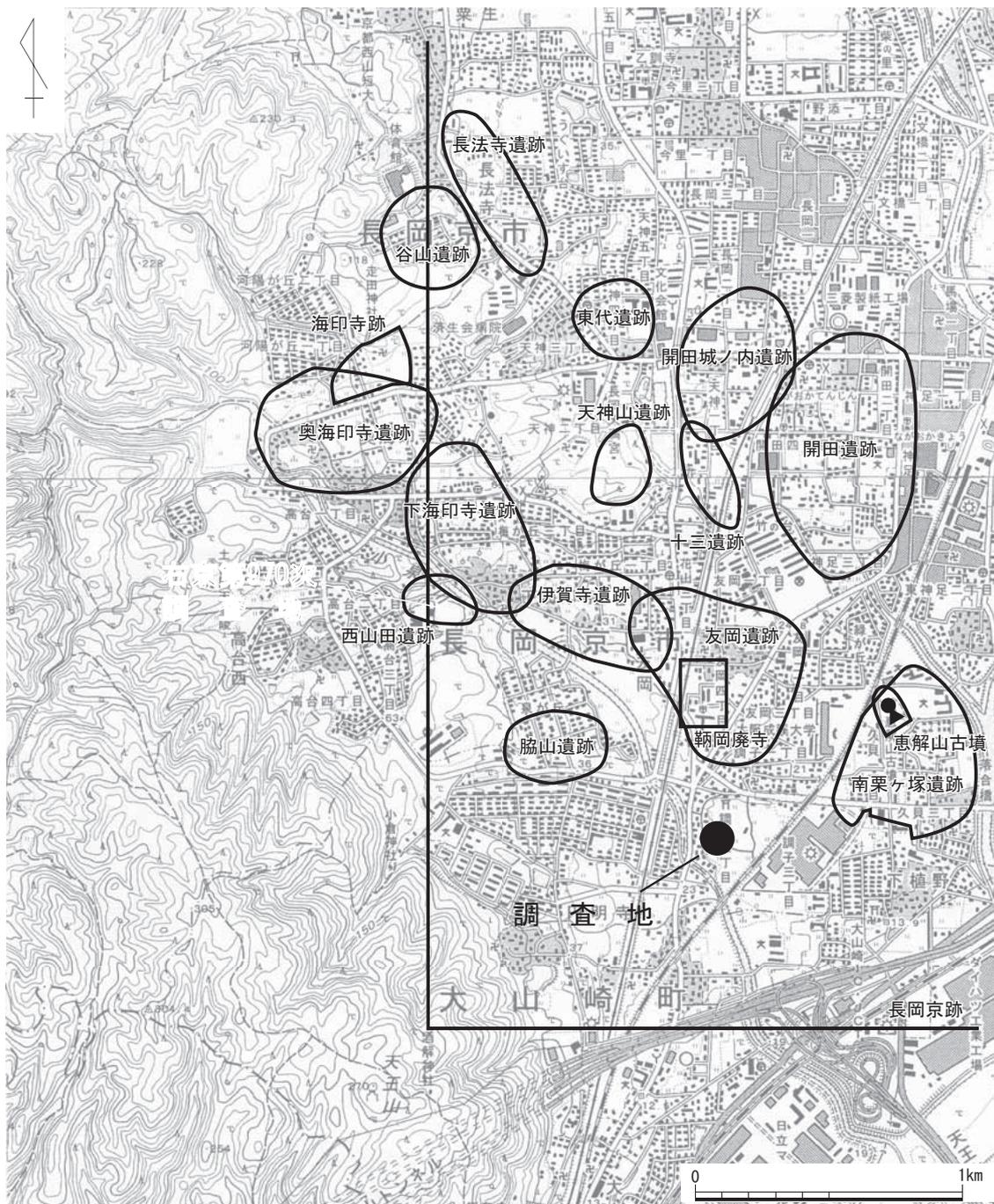
調査面積 750㎡（b地区も含む）

## 2. 自然と歴史

調査地は、京都盆地南西部に位置する長岡京市の南部にあたる地域にある。西側には、京都盆地を形成する山が迫り、この山は丹波方面へと連なる。この山塊は丹波帯と呼ばれる古生層からなりたっており、チャートや粘板岩などが分布している。この山塊に源を発する小泉川左岸に遺跡はある。現在の小泉川は、河川改修によって直線状に改修されているが、本来は大きく蛇行しており、それに対応するように川の両側に氾濫原も大きく広がっている。川は長岡京市域から大山崎町を経て、大阪湾に注ぐ淀川と合流する。

今回の調査区は、現在は小泉川の東側に位置しているが、調査地の西側にも河川状の堆積があり、ちょうど中洲状に残されていたと考えられる。この微高地については、沖積段丘面の削り残り、あるいは自然堤防の可能性が指摘できる。形成時期は出土遺物から縄文時代以前と考えられる。

小泉川流域では後期旧石器時代から遺跡が認められる。南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期に属するサヌカイト製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。この石器には、接合資料も認められ、この地域では珍しく本来の包含層が残されていた。



第2図 調査地及び周辺主要遺跡(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

縄文時代には小泉川流域で多くの遺跡が発見されている。最も古い時期の土器は、下海印寺遺跡から発見された早期のポジティブな押型文土器片である。早期に属するチャート製のトロトロ石器が裕遺跡から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から北白川下層式の縄文土器が住居跡に伴って出土している。

調査地の北にある友岡遺跡(右京第325次調査地点)から、段丘斜面に投棄された状態で、中期の船元式土器が大量に出土した。友岡遺跡の北西にある伊賀寺遺跡では、中期末の北白川C式の時期の竪穴式住居跡6棟および遺物が検出されている。また、大山崎町脇山遺跡(高野1997)でも

北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期初頭については、中津式土器は伊賀寺遺跡で、後期縁帯文期は伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡で遺構・遺物が発見されている。後期後葉の元住吉式土器を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認されている。また、同時期の墓壙も発見された。そのうち2か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器や玉が出土している。

縄文時代晩期に入ると、小泉川下流の大山崎町下植野南遺跡において凸帯文の甕棺が検出されている。

弥生時代前期の遺構は小泉川流域では発見されていないが、裕遺跡や調査地の南の松田遺跡で土器が出土している。弥生時代中期前葉には南栗ヶ塚遺跡や下植野南遺跡で方形周溝墓群が発見されている。両遺跡とも石製武器が出土した埋葬施設が確認された。中期後葉の土器は裕遺跡から発見されている。弥生時代末の竪穴式住居跡は伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡で発見されている。伊賀寺遺跡(右京第902次調査)ではベット状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡である。

古墳時代には下流に境野1号墳と呼ばれる全長約62mの前方後円墳が存在している。古墳時代前期に築造され、段築と埴輪列が確認されている。古墳時代後期に入ると多くの竪穴式住居跡が伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡内の随所で確認されている。同じように下植野南遺跡・松田遺跡においても5世紀後半から6世紀にかけての竪穴式住居跡が多数発見されている。

飛鳥時代の遺物が出土する靱岡廃寺の存在が古くから知られていた。正確な位置は確認されていないが、飛鳥時代から長岡京期に至る瓦が発見されている。出土瓦には「田辺史牟也毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

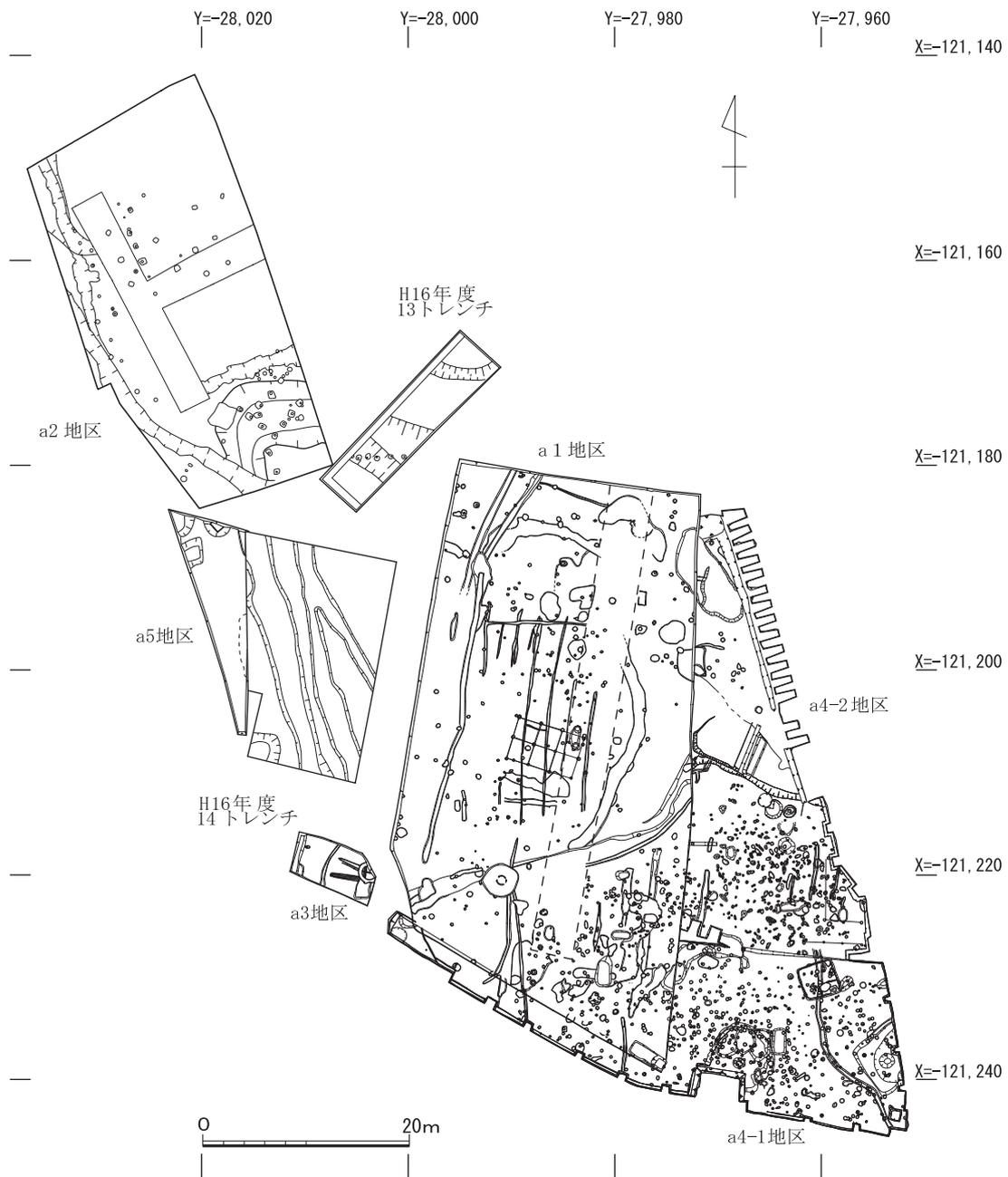
奈良時代の建物としては、掘立柱建物などが伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡、下植野南遺跡などで発見されている。

長岡京市の平野部の大部分を占める長岡京は、延暦3(784)年に桓武天皇によって平城京から遷都され、延暦13(794)年に平安京に遷るまで都として機能していた。長岡京の造営は10年と短く、七条より南の地域で明確な条坊は発見されていない。今回の発掘地域は、右京九条二坊一・二町にあたるため、条坊の発見が期待されたが、明確な長岡京期の遺構は検出できなかった。

中世に入ると今回の調査地は「調子荘」として登場する。この調子荘は調子氏の根本所領である。調子氏は本姓を下毛野氏と言い、東国の土豪を祖先とする奈良時代末以来の宮廷武官の家柄である。10世紀には近衛府の下級官人を世襲し、源頼光四天王の1人である坂田金時のモデルとなった「公時」を輩出した。後に院の隨身を務め、摂関家の隨身としても活躍する。調子氏がいつの時点で調子に住み着いたかは不明であるが、『近衛家所領目録』において建長5(1257)年に「普賢寺殿(近衛基通)の時、武守寄進する」とあり、13世紀前半に寄進されたことがわかる。

調査地域の旧小字名は「八角」と言い、地元では八角堂がかつて存在しその名にちなんだという話が語られている。しかしながら、至徳3(1386)年の『法皇寺知事某請文』に調子荘内の土地が法皇寺(乙訓寺)に寄進され、法皇寺にあった八角堂の下地とされていた。これにちなみ地名がつけられたものと考えられる。

この地域の所在する微高地上に古代から現代まで都から西国に通じる西国街道が通っている。交通の要衝となることから多くの歴史的事象の舞台になってきた。そのもっとも有名なものは山崎合戦である。天正十年六月二日、明智光秀が主君織田信長に対して京都本能寺において謀反を起こした。備中高松城において毛利軍と交戦中であった羽柴秀吉は講和し、六月十三日には山崎の合戦が行われる。後の世に言う「中国大返し」である。調子地区は明智側の陣が敷かれた場所である。『太閤記』に準拠した長岡京市史本文編では、諏訪飛驒守・御牧三左衛門尉が着陣した場所として復元されている。



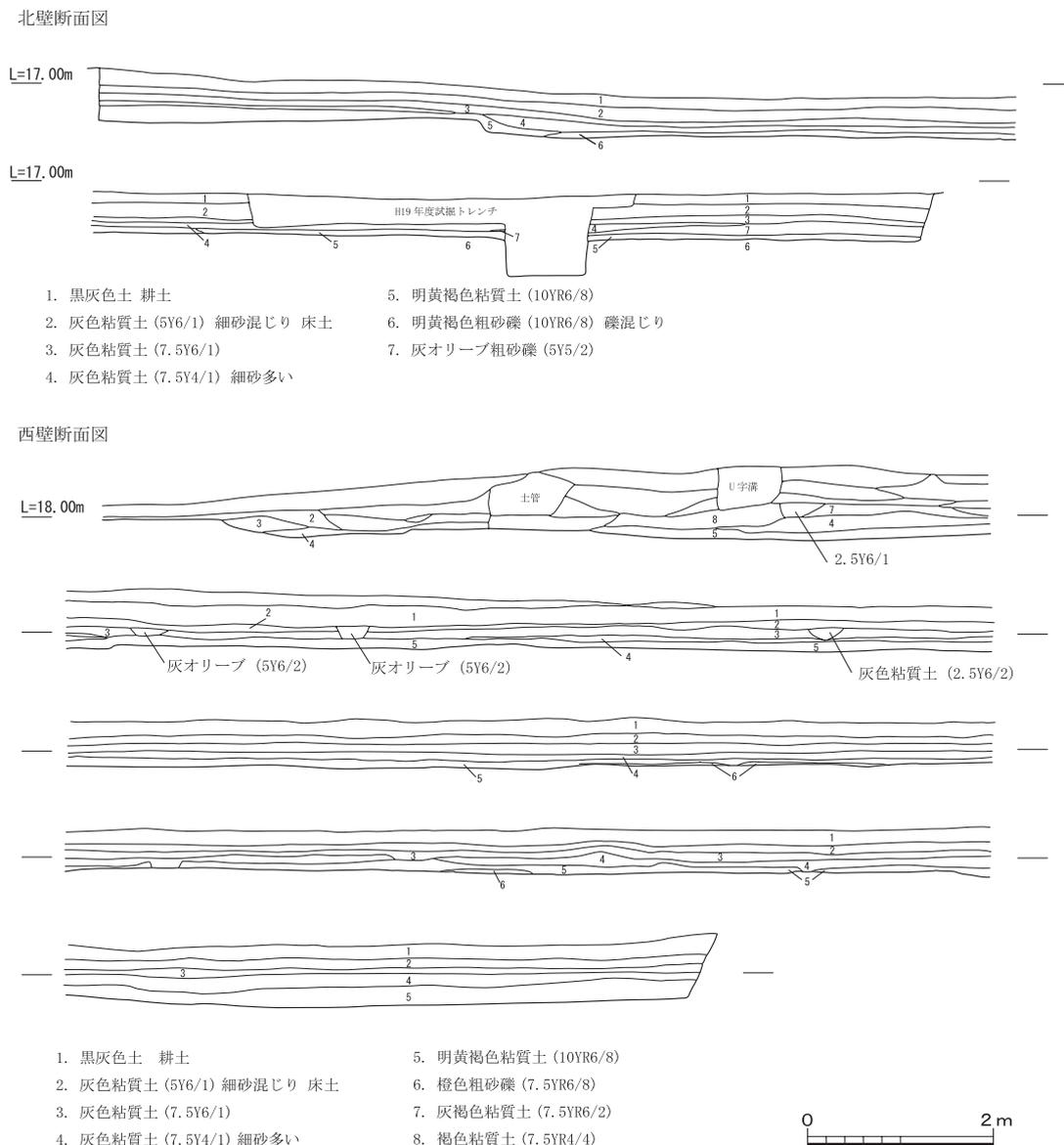
第3図 調子a地区遺構平面図

### 3. 各地区の検出遺構

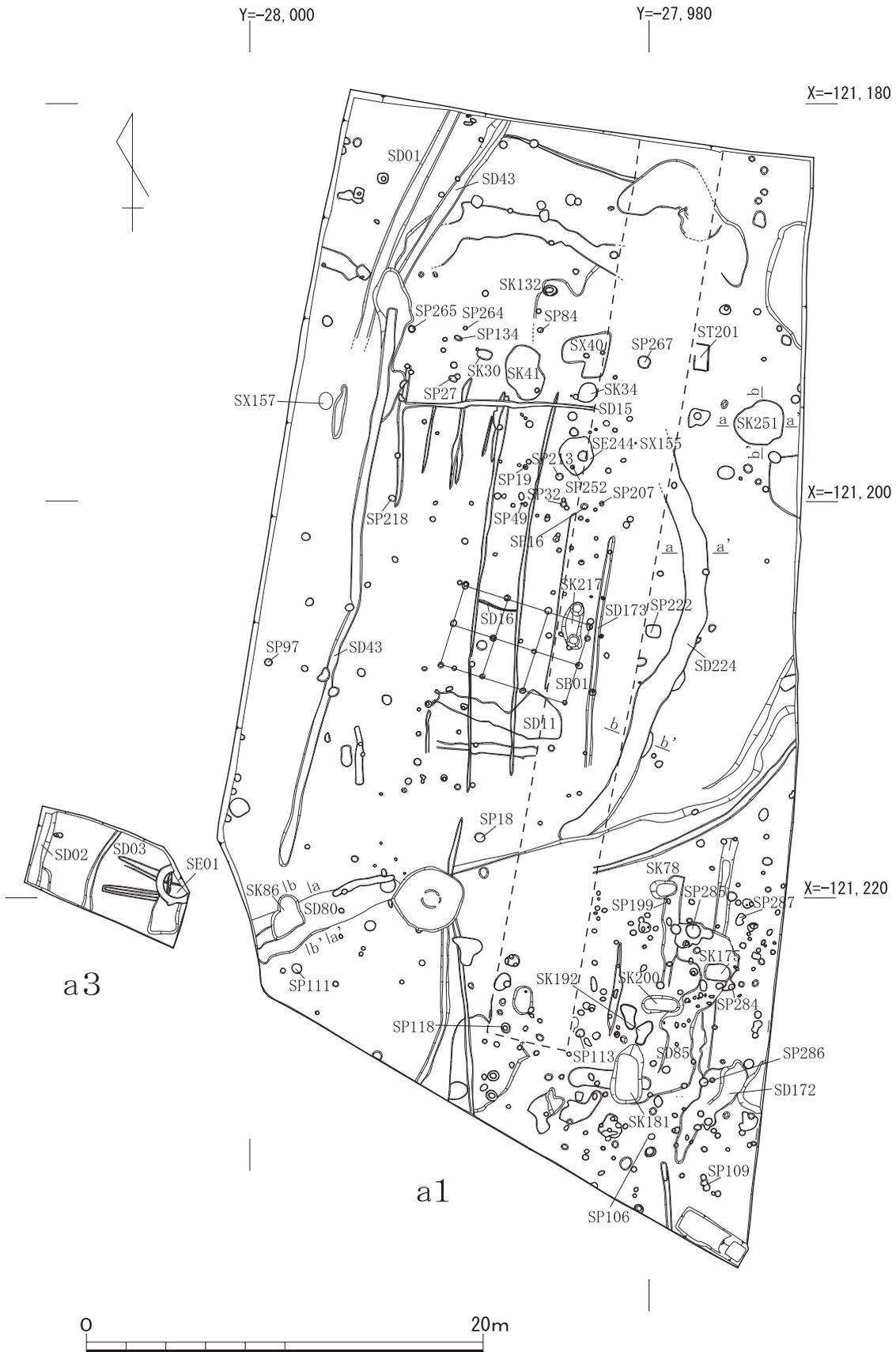
#### 1) 長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7) a1地区

##### (1) 調査概要

発掘調査の結果、若干の検出面の高さの違いによって上下2つの遺構面が確認できたが、上層での遺構検出作業が困難で、下層遺構面で発見されるものも少なくなかった。そのため第5図では、上下面での遺構を1枚の図面で表現した。上層で検出した顕著な遺構は、東西・南北に走る素掘りの溝である。染付などが出土することから江戸時代以降の耕作溝と考えられる。下層では、調査区南東部において弥生時代の遺構が検出できた。南東部以外では弥生時代の遺構はなく、平安時代末以後の遺構しか検出できなかった。これは、弥生時代以後、中世以前に河川の侵食によって南東部以外の遺構面が削られ、それ以後に堆積した地層によって中央部より北側の地層が構成されたためと推測される。



第4図 調子a1地区土層断面図



第5図 調子a地区遺構平面図

(2) 層位(第4図)

発掘調査前は、水田として利用されていた。耕作土が最上位にあり、その下に水平の薄い灰色粘質土層が数枚堆積している。この灰色粘質土(4層)の上面で溝等が検出されている。多くの遺構は5層上面で確認できた。部分的に5層のないところもあり、6層上面での検出になったところも少なくない。図化した断面では6層以下は弥生時代中期よりは古くならない河川堆積物によって構成されていた。

(3) 検出遺構(第5図)

① 中世

**木棺墓 S T 201(第6図)** 北東部で検出した長方形の掘形を持つ木棺直葬墓である。掘形の一部は長岡京跡右京第927次調査時の壁の崩落によって失われていたが、3か所の隅部から東西1m、南北1.7mの規模を持つことがわかる。側板、小口板は針葉樹の柾目の板を用い、板の上側は腐食のため欠損している。残存した部分から、角部は三枚組接によって作られていると考えられる。長側板底面近くの3か所に柄を穿ち、そこに針葉樹棒状の材を横棧として設け、その上に底板をのせていた。木棺の内法は南北1.25m、東西0.6mで、残存している高さは15cmである。出土遺物は土師器皿が北小口部分で出土している。土師器皿は棺内と棺外から出土している。棺外のほうが出土位置が高い。

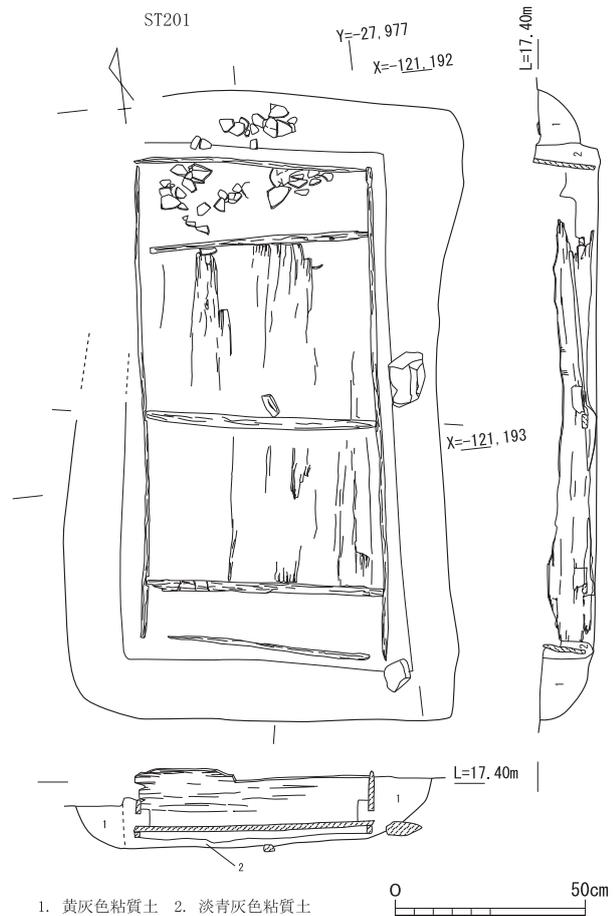
**井戸 S E 244(第7図)** 中央区北寄り検出した。円形の掘形を持っており、途中で段がつき径が小さくなる。

井戸の構造は縦板横棧留めである。縦板は広葉樹の板が用いられ、厚さ5cm前後で、1つの面が2枚ないしは3枚の板で構成されていた。板材の内側に設けられた横棧は、棒状の材の両端を加工し、組み合わされている。

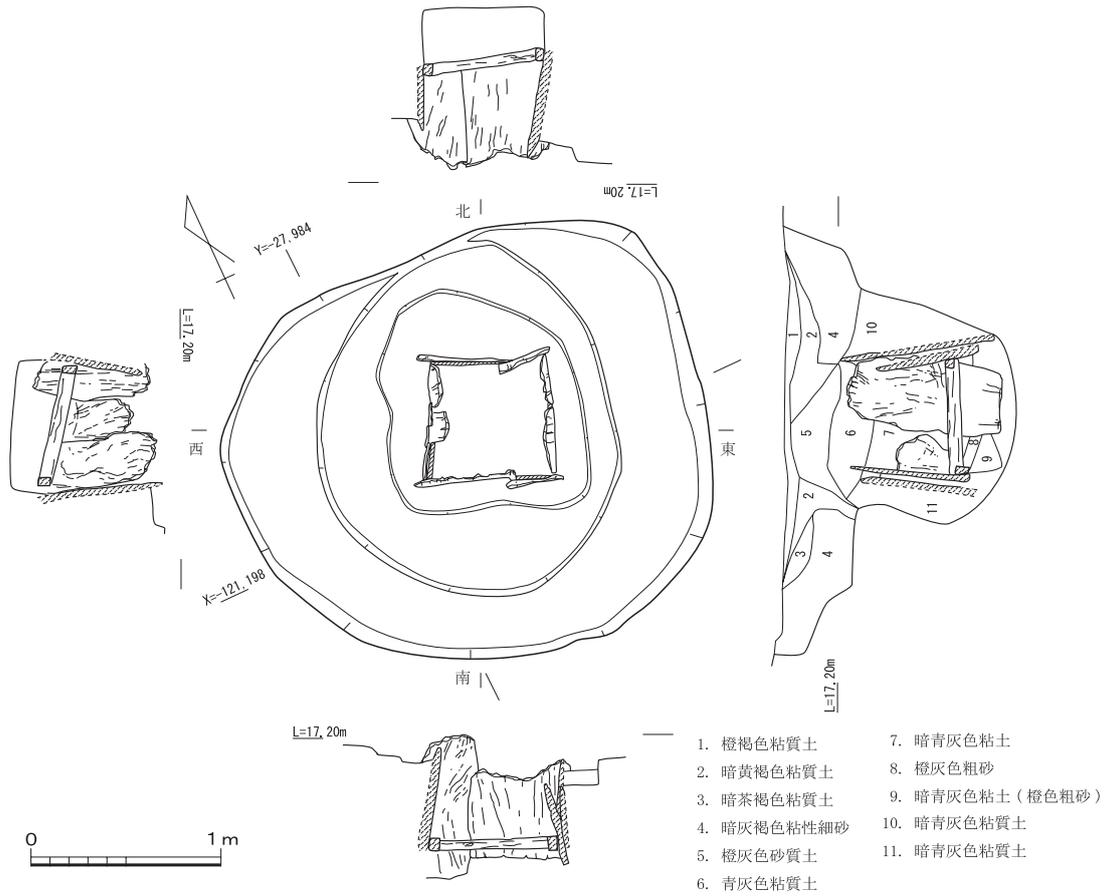
**掘立柱建物跡 S B 01(第8図)** 調査地中央部で検出した3間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間は東西約1.7～1.8m、南北約1.6～1.8m、建物主軸は北で約16度東に振る。出土遺物から12世紀の建物と考えられる。

**柱穴 S P 18** 中央南部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

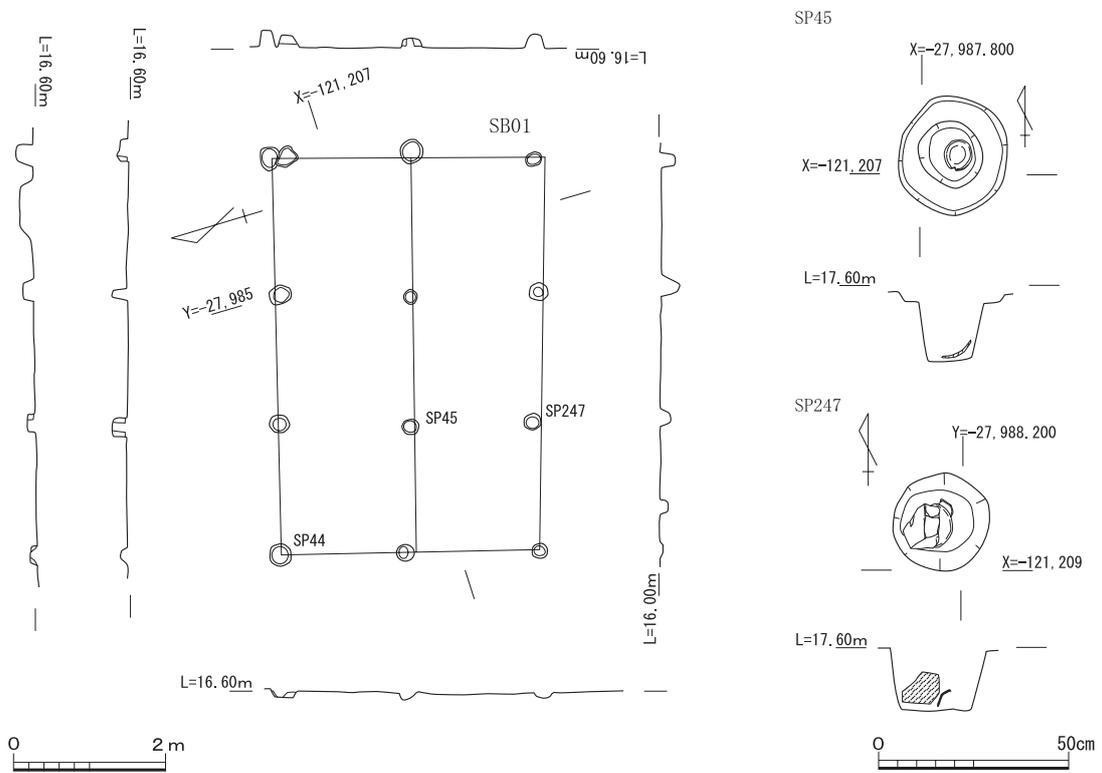
**柱穴 S P 19** 中央部で検出した。平面形



第6図 調子a1地区木棺墓 S T 201平・断面図



第7図 調子a1地区井戸 S E 244平・断面図



第8図 調子a1地区掘立柱建物 S B 01、柱穴 S P 45・247平・断面図

が円形で直径30cm、検出面からの深さ45cmの柱穴である。

柱穴 S P 27 (第 9 図) 北西部で検出した。平面形が楕円形で、長軸40cm、短軸30cmで検出面からの深さ10cmの柱穴である。内部から滑石製の紅皿が出土している。

柱穴 S P 32 S P 19の東側で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

柱穴 S P 84 (第 9 図) S P 32の北で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmのは柱穴である。

柱穴 S P 97 西端で検出した。平面形が円形で直径40cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴 S P 109 南東隅で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ30cmの柱穴である。

柱穴 S P 111 南西隅部で検出した。平面形が長方形で長辺45cm、短辺45cmで検出面からの深さは5cmである。柱痕が検出できないため土坑の可能性もある。

柱穴 S P 113 南端近くで検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ20cmの柱穴である。

柱穴 S P 134 北西部で検出した。平面形が楕円形で長軸30cm、短軸20cmで、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴 S P 199 S K 78の南で検出した。平面形が円形で直径20cm、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴 S P 207 S P 32の東で検出した。平面形が円形で規模30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴 S P 213 S P 19の北側で検出した。平面形が楕円形で長軸50cm、短軸30cmで検出面からの深さ5cmの柱穴である。

柱穴 S P 218 西部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴 S P 222 (第 9 図) 中央部東寄りで検出した。平面形が方形で一辺70cm、検出面からの深さ50cmの柱穴である。

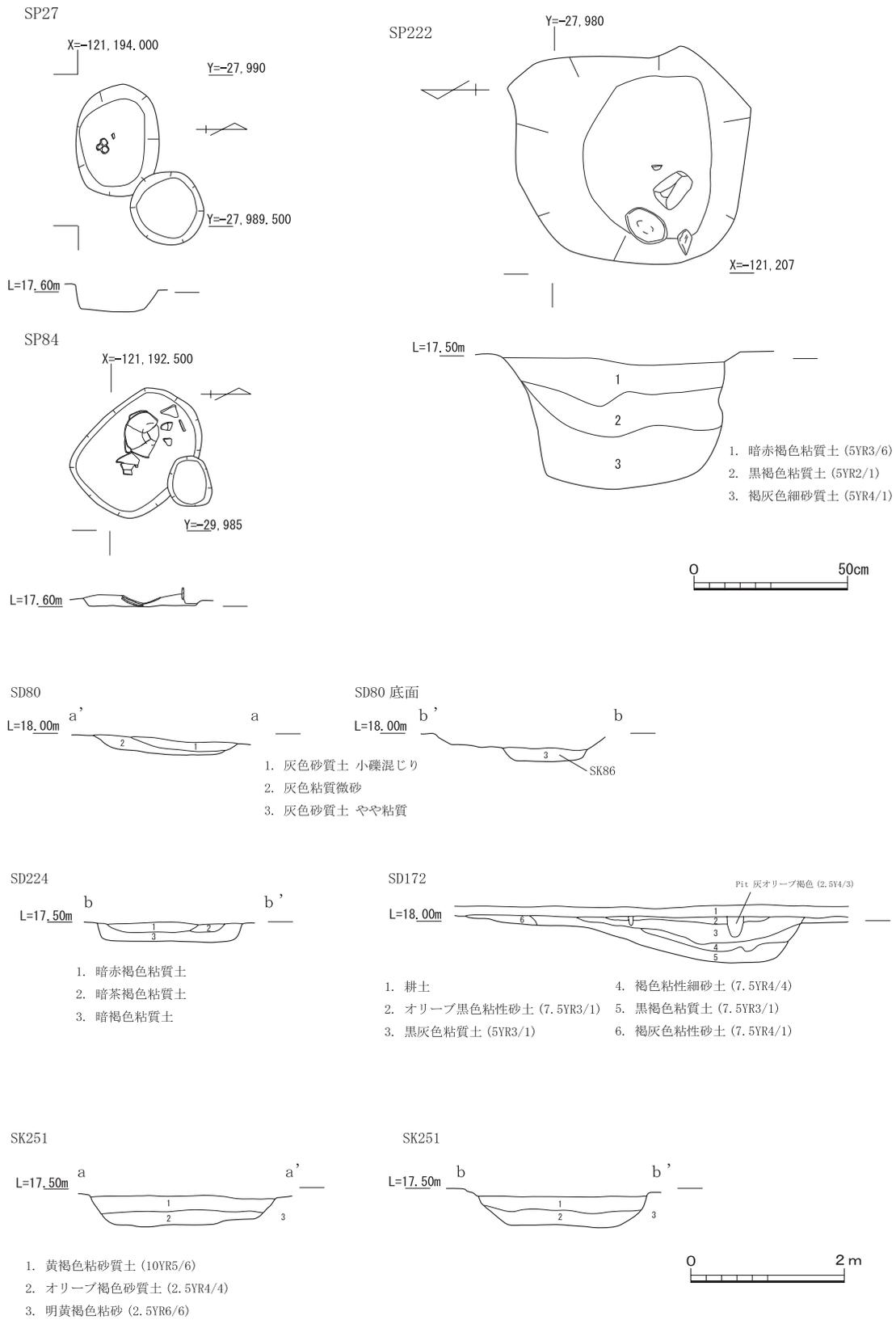
柱穴 S P 252 S E 244の埋土を切る柱穴で、直径30cm、深さ10cmの柱穴である。

柱穴 S P 264 北西部で検出した。平面形が円形で直径30cm、検出面からの深さ15cmの柱穴である。

柱穴 S P 265 S P 264の西にある。平面形が円形で直径25cm、検出面からの深さ10cmの柱穴である。

柱穴 S P 267 S T 201の西で検出した。平面形が円形で直径60cm、検出面からの深さ35cmの柱穴である。

柱穴 S P 287 東端で検出した。平面形が円形で直径25cm、検出面からの深さ15cmの柱穴で



第9図 調子a1地区柱穴S P 27・84・222、溝S D80・172・224、土坑S K251平・断面図

ある。

**土坑 S P 16** 中央部で検出した平面形が楕円形の土坑である。長軸0.3m、幅0.2m、検出面からの深さは10cmを測る。

**土坑 S K 30**(第10図) 北西部で検出した。隅丸長方形を呈した土坑で、長辺80cm、短辺50cm、検出面からの深さは10cmを測る。完形に近い土器が出土している。

**土坑 S K 34** S E 244の北で検出した。平面形が円形の土坑で、直径 1 m、深さ10cmを測る。

**土坑 S K 41** 中央北寄りで検出した。楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸2.6m、短軸 2 m、検出面からの深さ15cmを測る。

**土坑 S K 132** 北寄りで検出した。楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸70cm、短軸 50cm、検出面からの深さ15cmを測る。

**土坑 S K 200**(第10図) 南東部で検出した。長楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸 2 m、短軸80cm、検出面からの深さ20cmを測る。

**土坑 S K 217** ほぼ中央部で検出した。長楕円形の平面形を持つ土坑で、長軸2.5m、短軸 1 m、検出面からの深さ25cmを測る。

**土坑 S K 251**(第9図) 東端付近で検出した。平面形が円形の土坑で、直径2.3m、深さ50cmの規模を測る。

**窪み状の遺構 S X 40** S K 34の北で検出した不定形の浅い窪み状の遺構で、地形の落ち込んだ部分と考えられる。検出面からの深さは 5 cm程度で、輪郭ははっきりとしなかった。

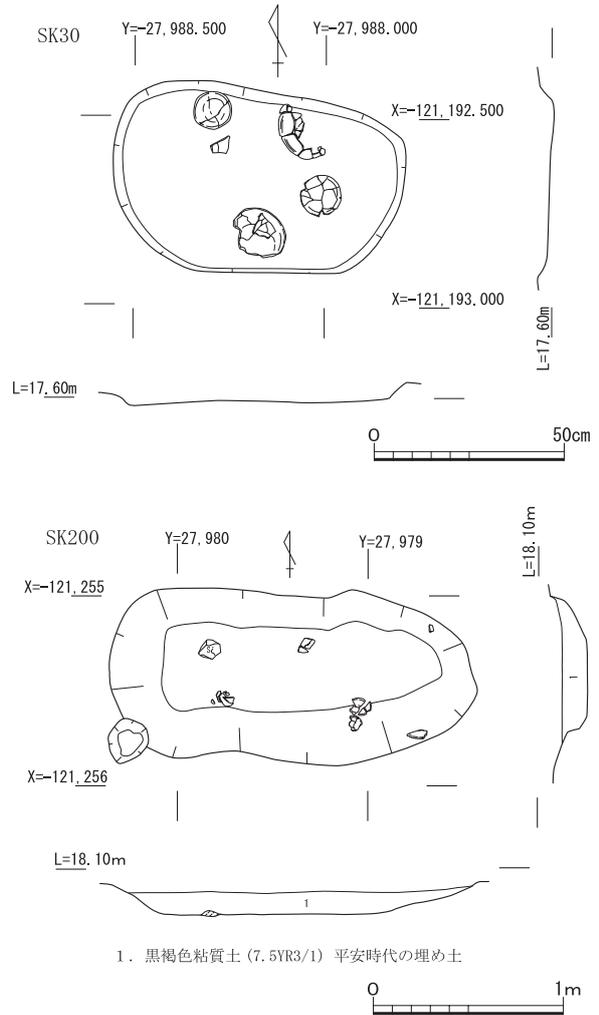
**窪み状の遺構 S X 155** 中央部やや北側の S E 244直上で検出した。S E 244検出以前に上層で検出した窪み状の遺構で、地形の落ち込みと考えられる。人為的な遺構である可能性は少ない。

**窪み状の遺構 S X 157** 中央部西辺で検出した。長楕円形の平面形を持つ浅い落ち込み状の遺構で、長軸1.5m、短軸 1 m、検出面からの深さ 5 cmを測る。

**溝 S D 01** 北端で検出した。S D 43の西側にほぼ平行する南北方向の溝で、検出長10m、幅 50cm、検出面からの深さ10cmを測る。

**溝 S D 11** S B 01南側にある「L」字状の溝である。東西 6 mの規模を測り、検出面からの深さは10cmである。

**溝 S D 15** 中央部北寄りで検出した。東西方向の溝で、耕作溝と考えられる南北方向の溝群



第10図 調子a1地区土坑 S K 30・200平・断面図

と直交することから、耕作に関連した溝と考えられる。検出長約18m、幅40cm、深さ5cmである。

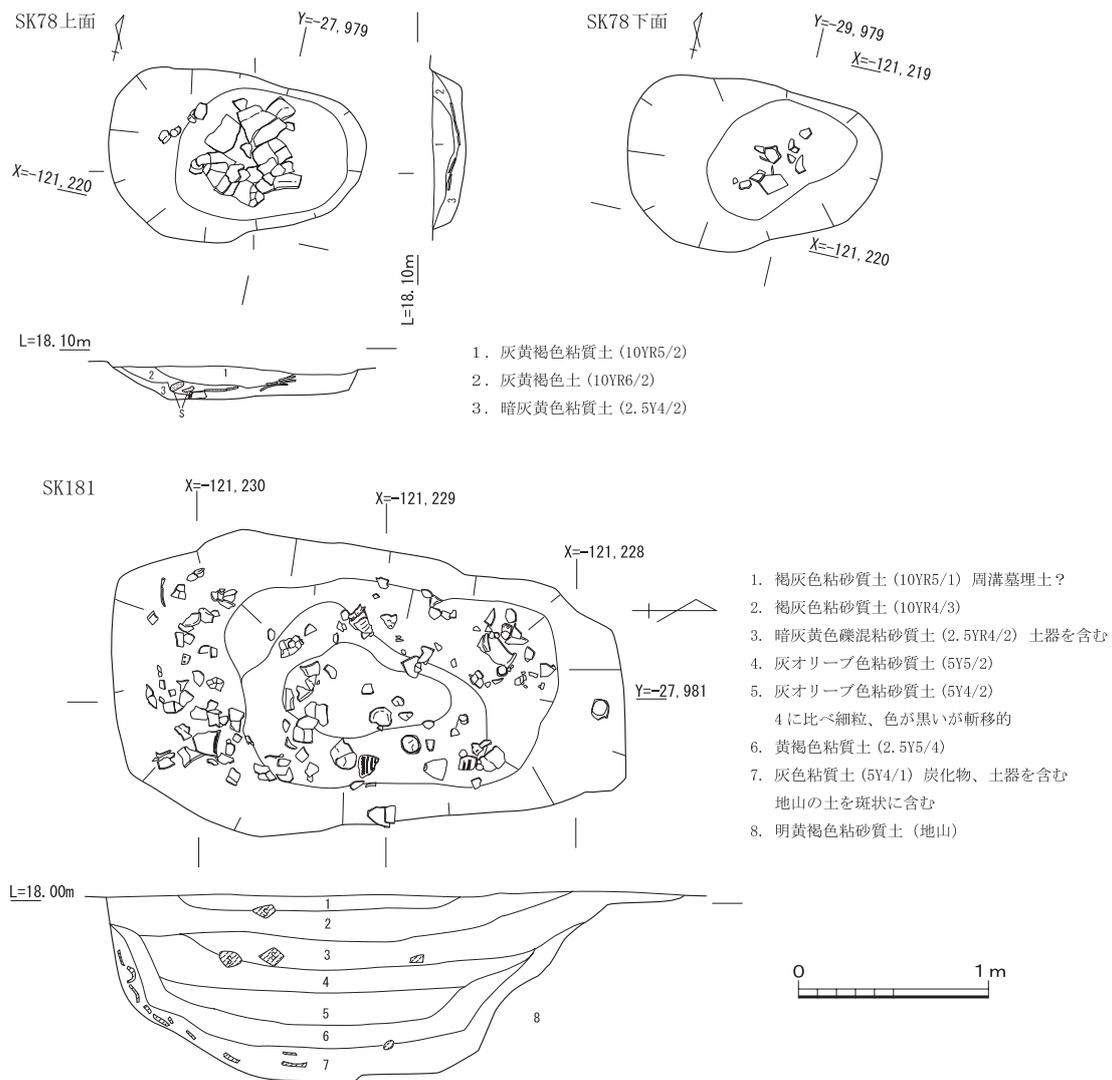
溝SD16 中央部で検出した。東西方向の溝で、耕作溝と考えられる南北方向の溝群と直交することから、耕作に関連した溝と考えられる。検出長約2m、幅40cm、深さ5cmである。

溝SD43 西端付近で検出した。南北方向の溝で、調査前の畦と重複する位置に存在する。検出長40m、幅40cm、深さ10cmを測る。

溝SD80(第9図) 古墳時代以前の遺構が残る調査区南東部と、古墳時代以後に安定した部分を区分する溝である。水田耕作以前は調査区南東部が高い地形であったと考えられる。幅1m、深さ10cmを測る。

溝SD173 ほぼ中央部で検出した。南北方向の溝で、この溝の西側には平行する数条の溝が存在することから耕作に伴う溝と考えられる。検出長は11m、幅30cm、深さ5cmを測る。

溝SD224(第9図) ほぼ中央部で検出した。調査区を南北方向に蛇行する溝で、検出長21m、幅1m深さ15cmを測る。



第11図 調子a1地区土坑SK78・181平・断面図

## ②弥生時代

溝 S D 85 南東部で検出した。北側で西に曲がる平面「L」字状の溝である。断面形は浅く立ちあがる皿状である。埋土内から弥生土器片が出土している。形状から見ると方形周溝墓の周溝の残欠である可能性が指摘できる。

溝 S D 172(第9図) 南東部で検出した。北側で東に曲がる溝である。検出面では溝状に見えたが、掘削を行うと、2つの土坑が連なる形状を呈するようになった。平面形からは方形周溝墓の周溝の可能性が指摘できるが、底面が凹凸のある形状で確定できない。その方向や位置関係から、S D 85と関連する遺構と推測される。

土坑 S K 78(第11図) 南東部で検出した。平面形が西側のほうがやや広い楕円形を呈する土坑である。断面の観察から、土坑が掘削された後に土の堆積が若干みられ、その後土器が土坑内に堆積している。土器はすべて平らな状態で出土している。

土坑 S K 175 S D 85の上面で検出した隅丸方形の土坑である。土坑内からは弥生土器が出土しているが、S K 175が掘り込まれたベース自体が弥生時代の遺構であるため、これらの土器がこの遺構に伴うものかどうかは不明である。しかし、他の時期の土器が出土していないので、弥生時代の遺構である可能性がある。短辺約0.9m、長辺約1.3m、検出面からの深さ約10cmを測る。

土坑 S K 181(第11図) 南東部で検出した。隅丸長方形の平面形を呈する大型の土坑である。一定期間、開口していたと考えられ、土坑南側では土坑壁の傾斜に沿って遺物が出土している。遺物の多くは土坑底に堆積した7層(灰色粘質土)から出土しており、同時に炭化物も出土している。遺物には弥生土器、石器、銅鐸形土製品がある。弥生土器の接合率は低く、埋納といった行為の結果とは考えられない。南短辺の長さ1.2m、北短辺の長さ1m、長辺2.6m、検出面からの深さ1mを測る。

土坑 S K 192 S K 181の北で検出した。不定形の土坑である。出土遺物から弥生時代のものと考えられる。長さ1.4m、最大幅は1.2m、検出面からの深さは20cmである。

柱穴 S P 199 調査地南東部の S K 78に隣接した場所で検出した円形の柱穴である。直径25cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴 S P 284 調査地南東部の S D 85に隣接した場所で検出した円形の柱穴である。直径25cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴 S P 285 弥生時代の溝である S D 85を切り込む状態で検出した柱穴である。直径70cm、検出面からの深さ25cmを測る。弥生の溝を切って掘削されていることから遺物が掘削時期と同じかは判断できない。

柱穴 S P 286 南東部で検出した柱穴で、直径30cm、検出面からの深さ20cmを測る。弥生時代の溝 S D 172に切り勝つ。

## 2)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7) a2地区

## (1)調査概要

本調査地は平成19年度に行った部分的な発掘調査によって、中世段階の遺構を確認し、周辺に遺構の広がりが見込まれた地点である。本調査は平成20年度に実施したが、本調査地北側に隣接して平成21年度に長岡京跡右京第968次調査を実施し、平成21年度に報告している。同報告では、調査地点西側の微高地上に平安時代の古代寺院が存在していた可能性が指摘されている。今回の調査地では、第968次調査地に続く溝のほか、掘立柱建物跡、柵列、土坑などを検出している。

## (2) 層位(第12図)

調査地は水田として利用されていた場所で、基本層序は上から1層の褐灰色土(耕作土)、2層の灰褐色粘質土(床土)、11層の灰色粘質土(上層遺構検出面)、9層の明褐色粗砂礫層(下層遺構検出面)、10層の明褐色礫層の順である。10層以下は遺構確認のため1mほど掘り下げたが、礫層が続くことを確認した。礫層中からは古墳時代の可能性がある須恵器片が出土した。10層より古墳時代の遺物が出土したこと、平安時代以降の遺構が検出されたことから、この調査地では古墳時代以後の河川堆積の後、平安時代までの間に陸化したと考えられる。また、a1地区の南東部では安定した弥生時代にさかのぼる地層が堆積していることから、本来、弥生時代及び古墳時代の遺構がこの地域にも広がっていたと考えられる。

## (3) 検出遺構

### ① 中・近世(第13図)

**上層溝群** 北で西に30度振る溝と、それと直交し北で東に60度振る溝の、大きく二群の溝が存在する。いずれも耕作土直下で検出したもので、現存の水田畦の方向と一致することから、耕作溝の類と考えられる。埋土の状況などから近世以降のものと考えられる。

**土坑 S K 21(第15図)** 長方形の平面形を持つ土坑で、長軸はほぼ真南北を向く。内部には比較的大きな礫(最大径25cm)がまばらに含まれていた。出土遺物は少なく、平安時代から中世までの遺物が確認できた。長辺約0.9m、短辺約0.7m、検出面からの深さ約5cmである。

**土坑 S K 16** 平面形が長楕円形の土坑である。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ5cmを測る。

**溝 S D 18** 南北方向の溝で、検出長5.5m、幅1m、検出面から深さ5cmである。

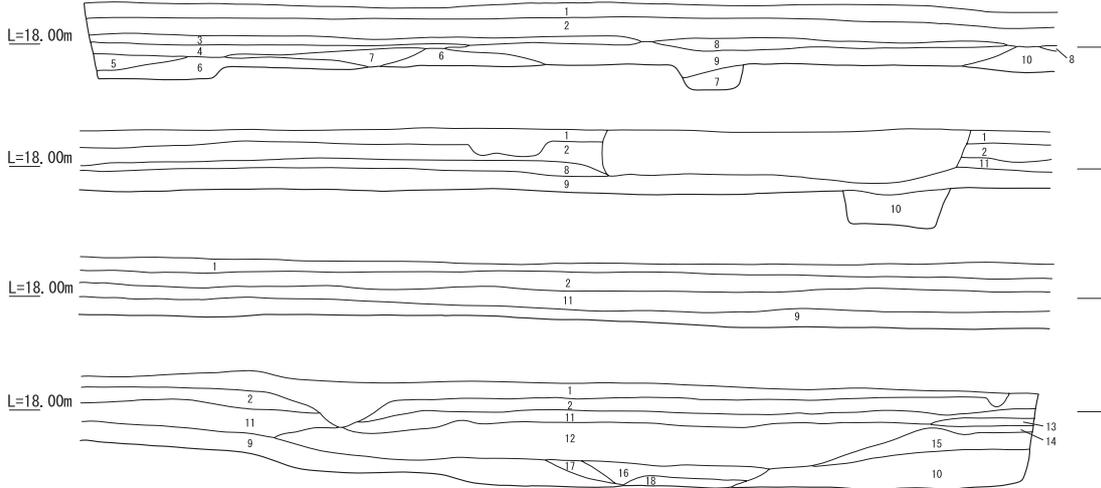
### ② 中世・平安時代(第14図)

**掘立柱建物跡 S B 01(第15図)** 梁行2間、桁行3間以上の方形の掘形を持つ掘立柱建物跡である。北で37度東に振る。方形掘形の軸は不揃いであるが、柱痕跡は直線状に並んでいる。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。梁行方向の柱間は1.4m等間で、P01・04・05・06からなる桁行きは約1.3mで、P03・07・08・10からなる桁の柱間は約1.5mで、寸法が異なっている。

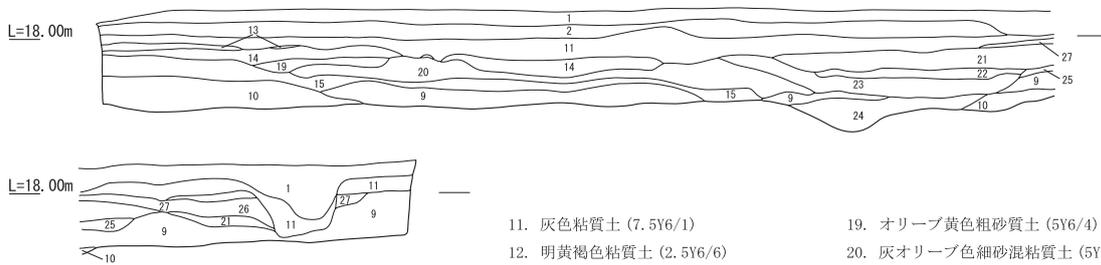
**柵列 SA 02(第15図)** 7つの柱穴を直線状に検出した。このうち方形掘形を持つものは4か所であるが、掘形の底はすべて浅く、柱当たり部分が下がっていた。以上のことから、P11・16・17の円形の柱穴は、掘形部分が削平され、柱当たりの底だけが残ったものと考えられる。柱間寸法は1.4～1.6mで微妙に長さが異なる。

**集石土坑 S X 31(第15図)** 隅丸長方形の大型の土坑である。内部には径30cmのものを最大とし、径15cm程度の大きさの礫が充填されていた。出土遺物に瓦器片が含まれていることから平

東壁断面図



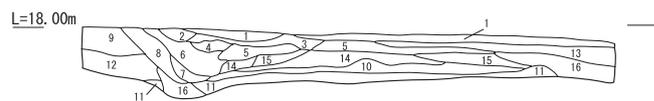
南壁断面図



- 1. 褐灰色土 (10YR5/1) 表土
- 2. 褐灰色粘質土 (10YR6/1)
- 3. 灰色粗砂混じり粘質土 (7.5Y6/1)
- 4. 黄褐色粘性細砂質土 (10YR5/6)
- 5. 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y4/2)
- 6. 灰色粗砂礫 (5Y6/1)
- 7. 暗灰色粗砂礫 (5Y6/1)
- 8. 灰オリーブ色粗砂礫 (5Y6/2)
- 9. 明褐色粗砂礫 (7.5YR5/6)
- 10. 明褐色礫 (7.5YR5/8) 大きい礫含む

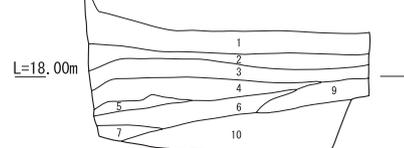
- 11. 灰色粘質土 (7.5Y6/1)
- 12. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6)
- 13. 灰オリーブ色粗砂礫混じり粘質土 (5Y6/2)
- 14. 明褐色細砂質土 (10YR6/6)
- 15. 明褐色粗砂礫 (7.5YR5/6)
- 16. 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)
- 17. 灰オリーブ色細砂礫 (7.5Y5/2)
- 18. 灰色細砂質土 (7.5Y6/1)
- 19. オリーブ黄色粗砂質土 (5Y6/4)
- 20. 灰オリーブ色細砂混粘質土 (5Y6/2)
- 21. 明黄褐色細砂質土 (2.5Y6/6)
- 22. 黄褐色粗砂質土 (2.5Y5/4)
- 23. 黄褐色細砂質土 (2.5Y5/6)
- 24. 灰オリーブ色細砂 (7.5Y5/2)
- 25. 黄褐色粗砂混じり土 (2.5Y5/3)
- 26. 灰オリーブ色粘土 (7.5Y6/2)
- 27. 黄褐色粘質土 (10YR5/6)

SD30 第5区北畔セクション



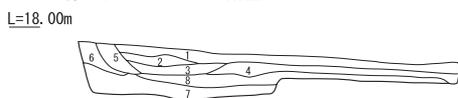
- 1. 黄褐色土 (10YR5/6) 小礫混じり
- 2. 暗茶褐色土 (2.5Y3/3) 小礫混じり
- 3. 灰茶色砂質土 (10YR6/1) 小礫混じり
- 4. 灰色粗砂 (7.5Y6/1)
- 5. 灰色砂礫 (7.5Y6/1) 1～3cm 礫混じり
- 6. 暗茶褐色粘質土 (2.5Y3/3)
- 7. 暗茶灰色砂質土 (7.5Y3/1)
- 8. 暗黄茶色土 (5Y6/3)
- 9. 黄褐色土 (2.5Y7/3) と淡灰色砂質土 (2.5Y7/2) モザイク状に混じる
- 10. 暗灰茶色砂 (2.5Y5/2) こげ茶色酸化マンガンを多く含む
- 11. 暗灰色砂礫 (N3/)
- 12. 暗黄灰色砂質土 (2.5Y5/1・5/2) こげ茶色酸化マンガン多く含む
- 13. 黄褐色土 (2.5Y5/3)
- 14. 灰色砂質土 (5Y5/1)
- 15. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)
- 16. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2)

北壁 西側



- 1. 褐灰色土 (10YR5/1) 表土
- 2. 褐灰色粘質土 (10YR6/1)
- 3. 灰色粗砂混じり粘質土 (7.5Y6/1)
- 4. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 砂礫多い
- 5. 暗灰黄色粗砂 (2.5Y5/2)
- 6. 灰色細砂質土 (2.5Y5/1)
- 7. 淡青灰色粗砂層
- 9. 明褐色粗砂礫 (7.5YR5/6)
- 10. 明褐色礫 (7.5YR5/8) 大きい礫含む

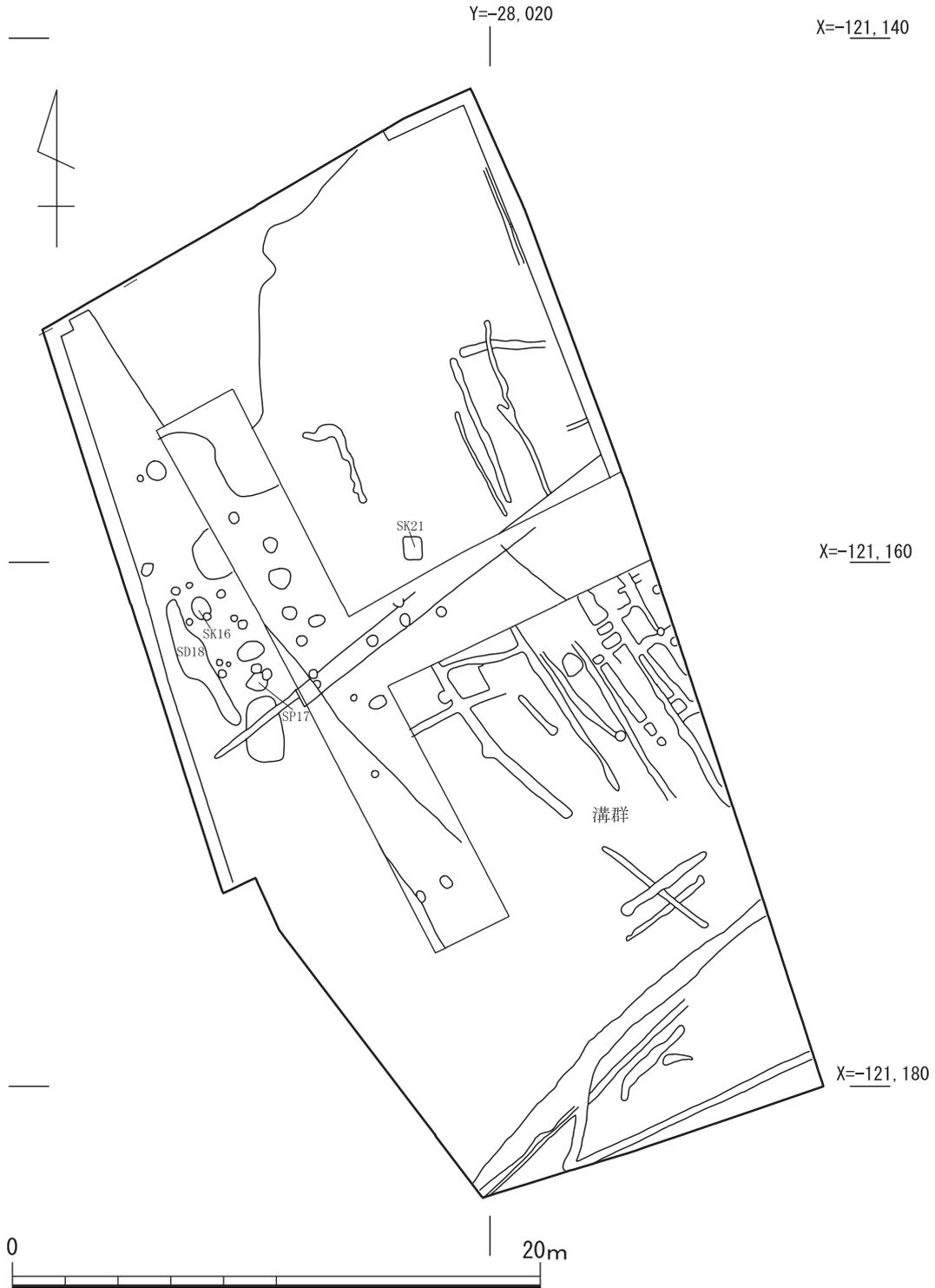
SD30 第2区セクション 南壁



- 1. 灰黄色粘質土 (2.5Y7/2)
- 2. 浅黄色粘質土 (2.5Y7/3)
- 3. 褐灰色細砂質土 (10YR4/1)
- 4. 明黄褐色細砂質土 (2.5Y6/6)
- 5. 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 粗砂・細砂混じり
- 6. 褐灰色粗砂質土 (10YR6/1)
- 7. 黒褐色粗砂礫 (10YR3/1)
- 8. 褐色細砂混じり粘質土 (10YR4/4)



第12図 調子a2地区土層断面図



第13図 調子a2地区上層遺構(中近世)平面図

安時代後期以後の遺構である。遺構の長軸は北で27°東に振る。長辺約2.4m、短辺約2.2m、検出面からの深さ14cmを測る。

溝SD30(第12図) 調査区西側で検出した溝で、この溝の西側で地盤が高くなる。遺物は本調査地で検出した遺構の中で最も多く出土し、平安時代前期から中期のものである。調査地北側で隣接して行われた右京第968次調査(森島2010)時に検出されたSD36の南延長部分に当たると

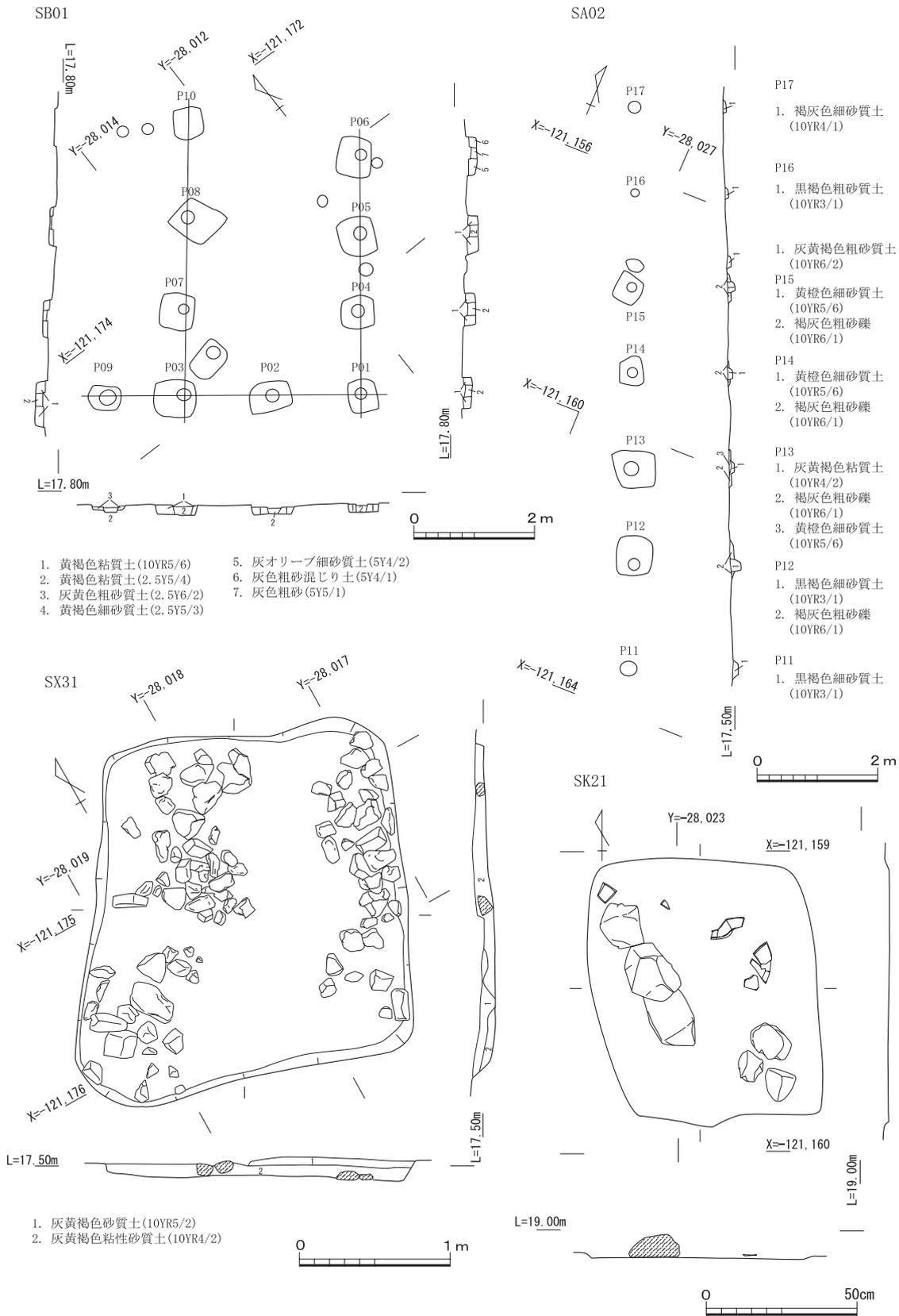


第14図 調子a2地区下層遺構(中世・平安時代)平面図

考えられる。流水によって蛇行し、底面も抉られている。この溝は西側の高い地形と東側の低い部分を区画する目的で掘られたと推測される。幅1～2.2m、検出面からの深さ約10cmである。

### 3)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7) a3地区

#### (1)調査概要と層序



第15図 調子a2地区掘立柱建物跡S B01、柵列S A02、土坑S K21、集石土坑S X31平・断面図

a1地区と水路を挟み、西側に位置する調査区である。調査前は草地であったが本来は水田として機能していたと考えられる。土層図については、a1地区の西壁と基本的に同じである。耕作土の下に水平の灰色の粘質土が数枚堆積し、遺構検出面(第4図第5層下面)まで水平層が連続する。遺構検出面の下には礫層が続き、a2地区の土層観察の成果から、平安時代より古い流路となる。

(2) 検出遺構(第5図)

井戸 S E 01 埋土の状況や形状から近世以降の井戸跡である。底部には木製の底板が認められ、保水層にも達していないことから溜井戸として利用されていたものと考えられる。直径2m、検出面からの深さ40cmを測る。

溝 S D 02 調査地西側で東側肩部のみが検出できた溝である。第3図で示した平成16年度調査14トレンチの溝とつながるものと考えられる。

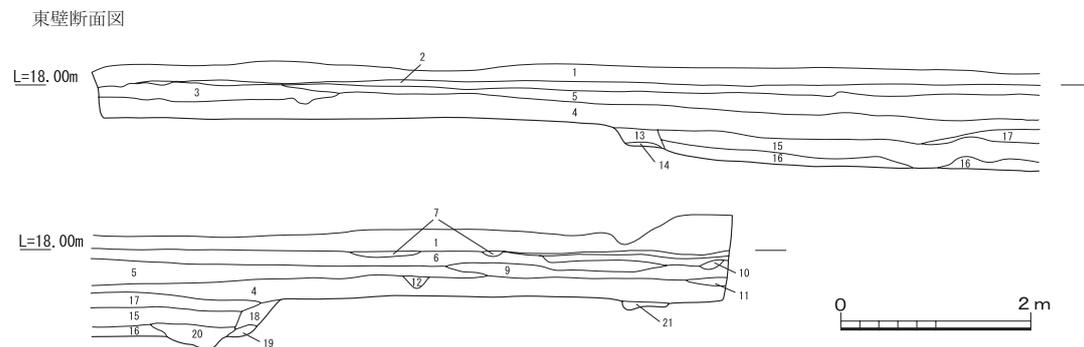
溝 S D 03 調査区中央部を南北方向に貫く溝である。その形状と規模から耕作に伴う溝と考えられる。検出面からの深さは約15cmである。

4) 長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8) a4-1地区

(1) 調査概要

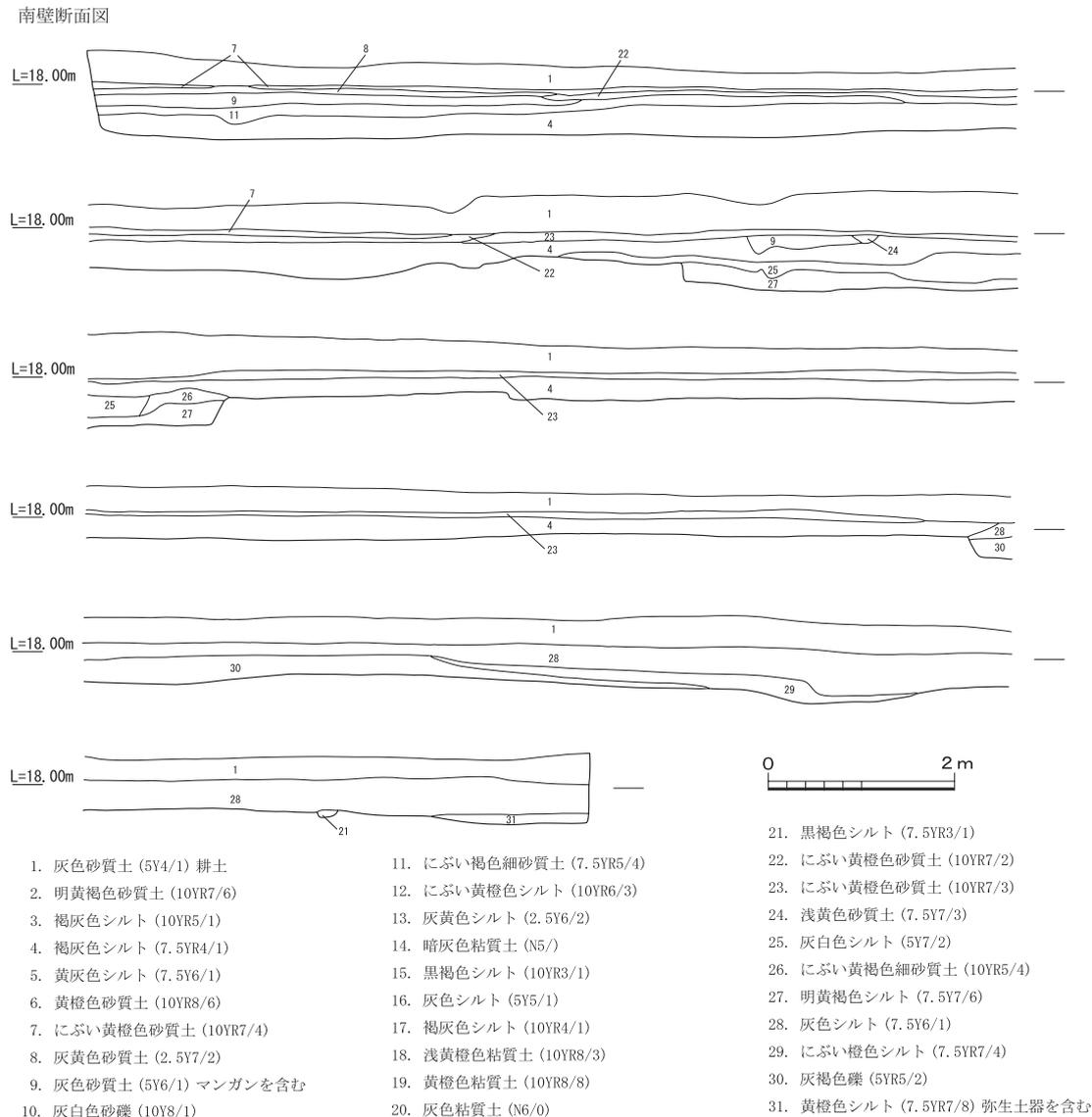
平成20年度に調査したa1地区の東側及び南側に隣接した調査区である。平成20年度の調査の結果、この地区では弥生時代の遺構が検出できるものと期待された。一方、a4-1地区の東側は大きく地形が落ち込んでいくことから、遺構が削平されている可能性も想定された。調査の結果、弥生時代の遺構面は調査区の全区域に及んでいることが判明した。それ以外にも、これまで周辺の調査区では検出されていなかった古墳時代前期、庄内期の竪穴式住居跡を検出した。また中世の建物跡もこの調査区で確認できたことから、前年度の調査成果とあわせて、中世集落関係の遺構がかなりの広がりを持っていることが判明した。

(2) 層位(第16・17図)



- |                        |                          |                       |
|------------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1. 灰色砂質土 (5Y4/1) 耕土    | 8. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2)      | 15. 黒褐色シルト (10YR3/1)  |
| 2. 明黄褐色砂質土 (10YR7/6)   | 9. 灰色砂質土 (5Y6/1) マンガンを含む | 16. 灰色シルト (5Y5/1)     |
| 3. 褐灰色シルト (10YR5/1)    | 10. 灰白色砂礫 (10Y8/1)       | 17. 褐灰色シルト (10YR4/1)  |
| 4. 褐灰色シルト (7.5YR4/1)   | 11. にぶい褐色細砂質土 (7.5YR5/4) | 18. 浅黄褐色粘質土 (10YR8/3) |
| 5. 黄灰色シルト (7.5Y6/1)    | 12. にぶい黄褐色シルト (10YR6/3)  | 19. 黄褐色粘質土 (10YR8/8)  |
| 6. 黄褐色砂質土 (10YR8/6)    | 13. 灰黄色シルト (2.5Y6/2)     | 20. 灰色粘質土 (N6/0)      |
| 7. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) | 14. 暗灰色粘質土 (N5/0)        | 21. 黒褐色シルト (7.5YR3/1) |

第16図 調子a4-1地区土層断面図(1)



第17図 調子a4-1地区土層断面図(2)

他の調査区同様、この地区も水田として利用されていたため平坦な地形であった。層序は上から耕作土、数枚の水平な堆積物の後、第4層の褐灰色シルト層になる。この層の上面が中世以後の遺構検出面であり、第4層を取り除くと下層の遺構面となる。下層の遺構面では弥生時代の遺構の検出が難しく、遺構の輪郭を把握することが難しかった。

### (3) 検出遺構

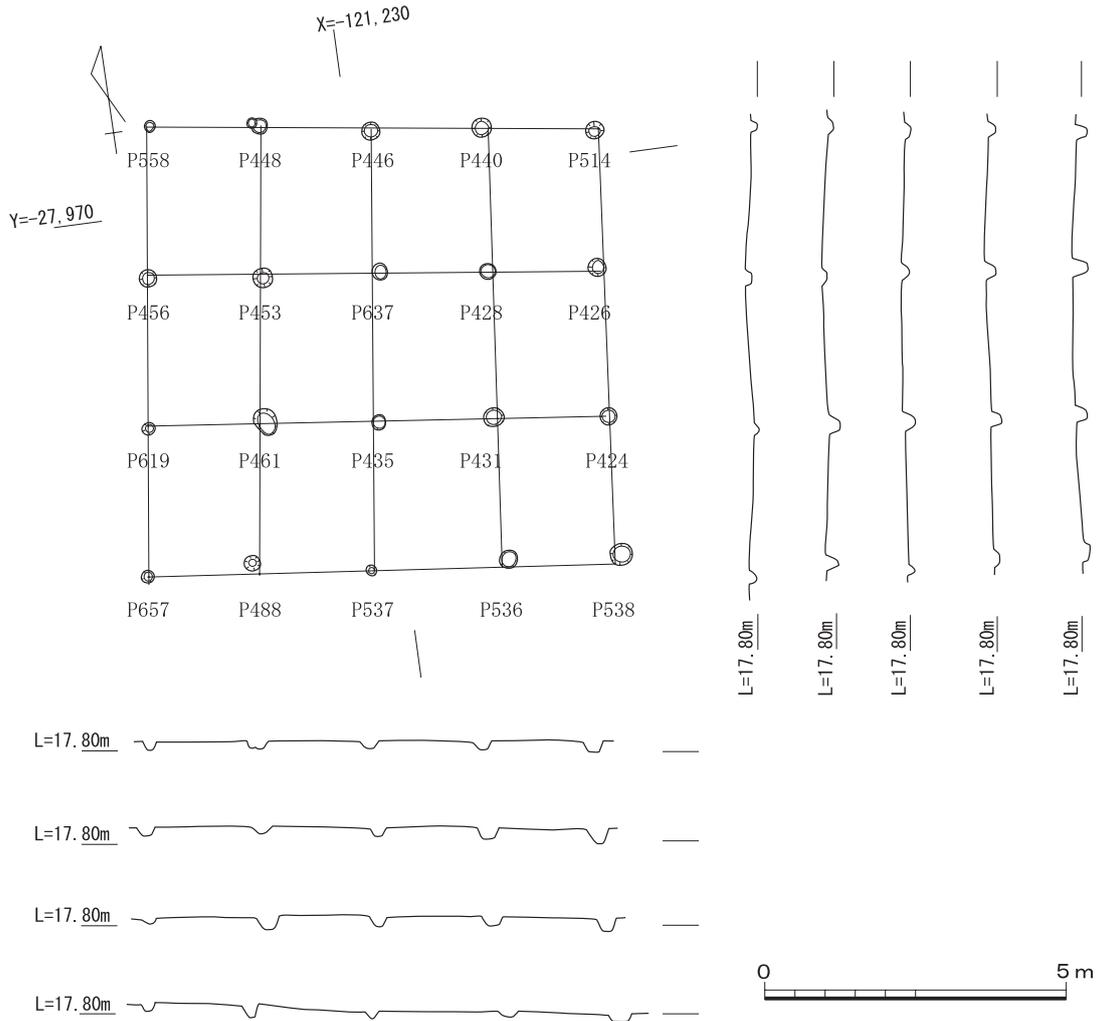
#### ①中世(第18図)

**掘立柱建物跡 S B01(第19図)** 4間×3間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間は南北約2.4m、東西約1.8mの寸法を持つ。建物は北で約5度東に振る。柱穴はいずれも円形で、直径30cm程度で、深さ25cmを測る。

**柱穴 S P 351(第20図)** 調査地中央部南辺付近で検出した。直径25cmの円形掘形を持つ柱穴で、柱痕は15cm、検出面からの深さは10cmである。柱痕跡の底部には礎板状の自然石が置かれていた。また、柱痕跡部分から瓦器碗が出土している。



第18図 調子a4-1地区上層遺構(中世)平面図



第19図 調子a4-1地区掘立柱建物跡 S B01平・断面図

柱穴 S P 352(第20図) 調査地中央部、S K 356の北側で検出した。平面形が不整形な柱穴で、柱痕跡部分から遺物が出土している。南北方向30cm、東西40cm、検出面からの深さ10cmを測る。

柱穴 S P 353(第20図) 調査地中央部、S K 357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の下面には板状の石が置かれていた。直径30cm、検出面からの深さは20cmを測る。

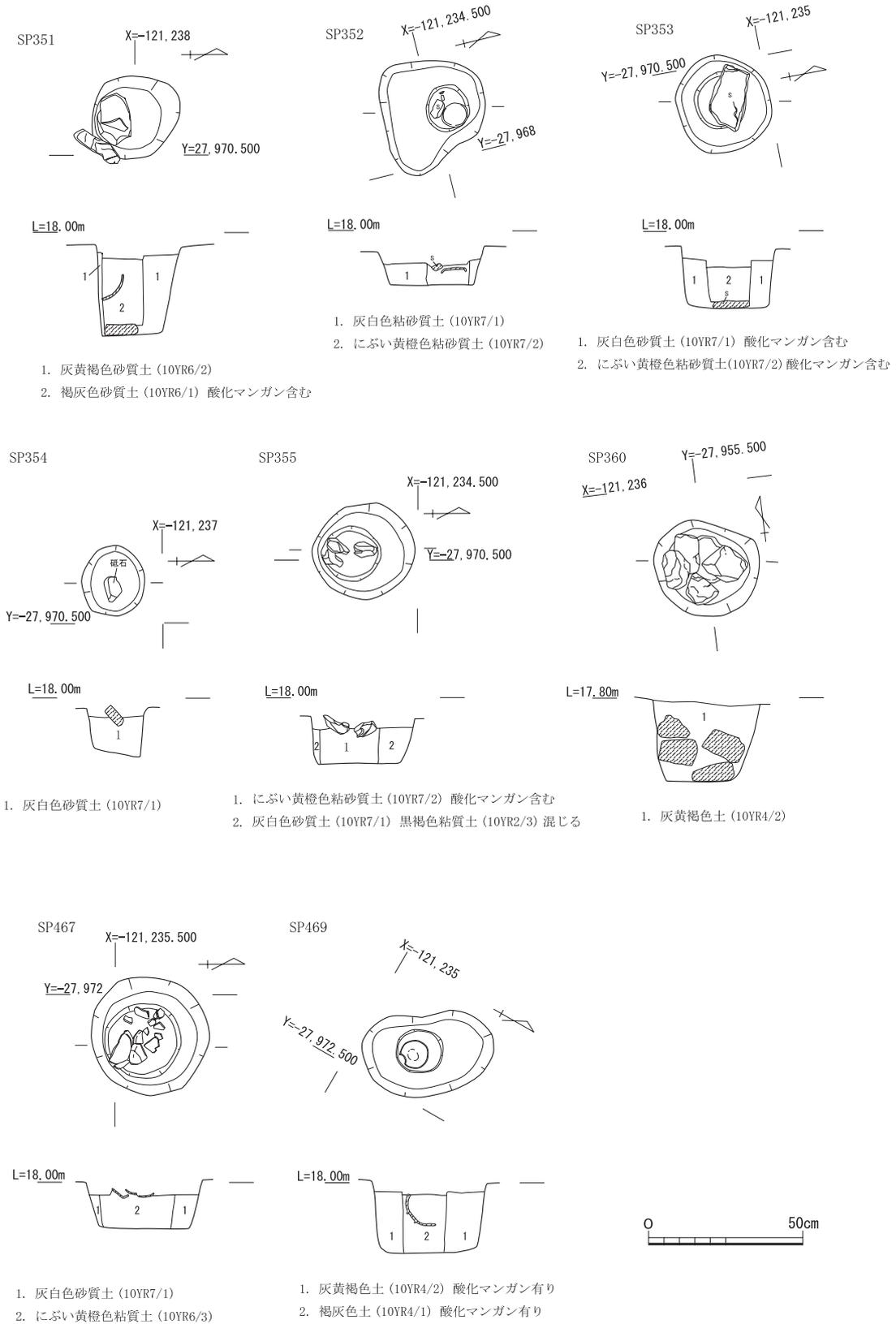
柱穴 S P 354(第20図) 調査地中央部、S K 357の南西側で検出した。平面形が円形の柱穴で、砂岩製の砥石が出土している。直径20cm、深さ15cmを測る。

柱穴 S P 355(第20図) 調査地中央部、S K 357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の礫が出土している。直径30cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴 S P 360(第20図) 調査地の東辺近くで検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分の礫が出土している。直径35cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴 S P 420 調査地中央部、S K 358の南側で検出した円形の掘形を持つ柱穴で、直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴 S P 425 調査地中央部、S K 358の北側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径



第20図 調子a4-1地区柱穴平・断面図

40cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴 S P 437 調査地中央部、S K 357の北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径25cm、検出面からの深さは10cmを測る。

柱穴 S P 458 調査地中央部、やや北西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴 S P 467(第20図) 調査地中央部、S K 357の西側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で柱痕跡部分で遺物が出土している。直径40cm、検出面からの深さは20cmを測る。

柱穴 S P 469(第20図) 調査地西寄りで検出した。長楕円形の平面形を持つ柱穴で、柱痕跡部分から遺物が出土している。長軸40cm、短軸25cm、検出面からの深さ25cmを測る。

柱穴 S P 487 調査地のやや西寄りで検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径30cm、検出面からの深さは25cmを測る。

柱穴 S P 499 調査地中央部の南辺付近で検出した。長楕円形の平面形を持つ柱穴で、柱痕跡部分が認められる。長軸40cm、短軸30cm、検出面からの深さ15cmを測る。

柱穴 S P 644 調査地西寄りの下層面で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは10cmを測る。

柱穴 S P 686 調査地中央部で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは15cmを測る。

柱穴 S P 691 調査地のほぼ中央、S K 358の北側で検出した。円形の柱掘形を持つ柱穴で、直径20cm、検出面からの深さは10cmを測る。

井戸 S E 553 調査地の西端で検出した。円形の掘形を持つ井戸で、直径1.5m、検出面からの深さは30cmを測る。井戸内には使用された材が存在し、溜井戸として機能していたことがわかる。遺構内からは中世の遺物が出土しているが、井戸の状況をこれまでの発掘調査とあわせ考えると近代以後のものと考えられる。

土坑 S K 356(第24図) 調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ。平面形が楕円形を呈する浅い土坑である。S K 357～359と軸をそろえ、近接して検出できた。遺構の先後関係から、S K 357・358より新しく掘削されたことがわかる。長軸2.8m、短軸2m、検出面からの深さ5cmを測る。

土坑 S K 357 調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ楕円形の平面形を持つ土坑である。S K 356に先行する。長軸3m、短軸2.2m、検出面からの深さ10cmを測る。

土坑 S K 358 調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ楕円形の平面形を持つ土坑である。S K 356に先行する。長軸3.2m、短軸2.2m、検出面からの深さ5cmを測る。

土坑 S K 359 調査地のほぼ中央で検出した。南北方向に長軸を持つ長方形の平面形を持つ土坑である。長軸2.6m、短軸1.4m、検出面からの深さ10cmを測る。

溝跡 S D 554 調査地の西端で検出した。平成16年度調査の16トレンチから続く溝跡である。調査区内で幅等の規模は確認できなかった。検出面からの深さは30cmである。



第21図 調子a4-1地区下層遺構(古墳・弥生時代)平面図

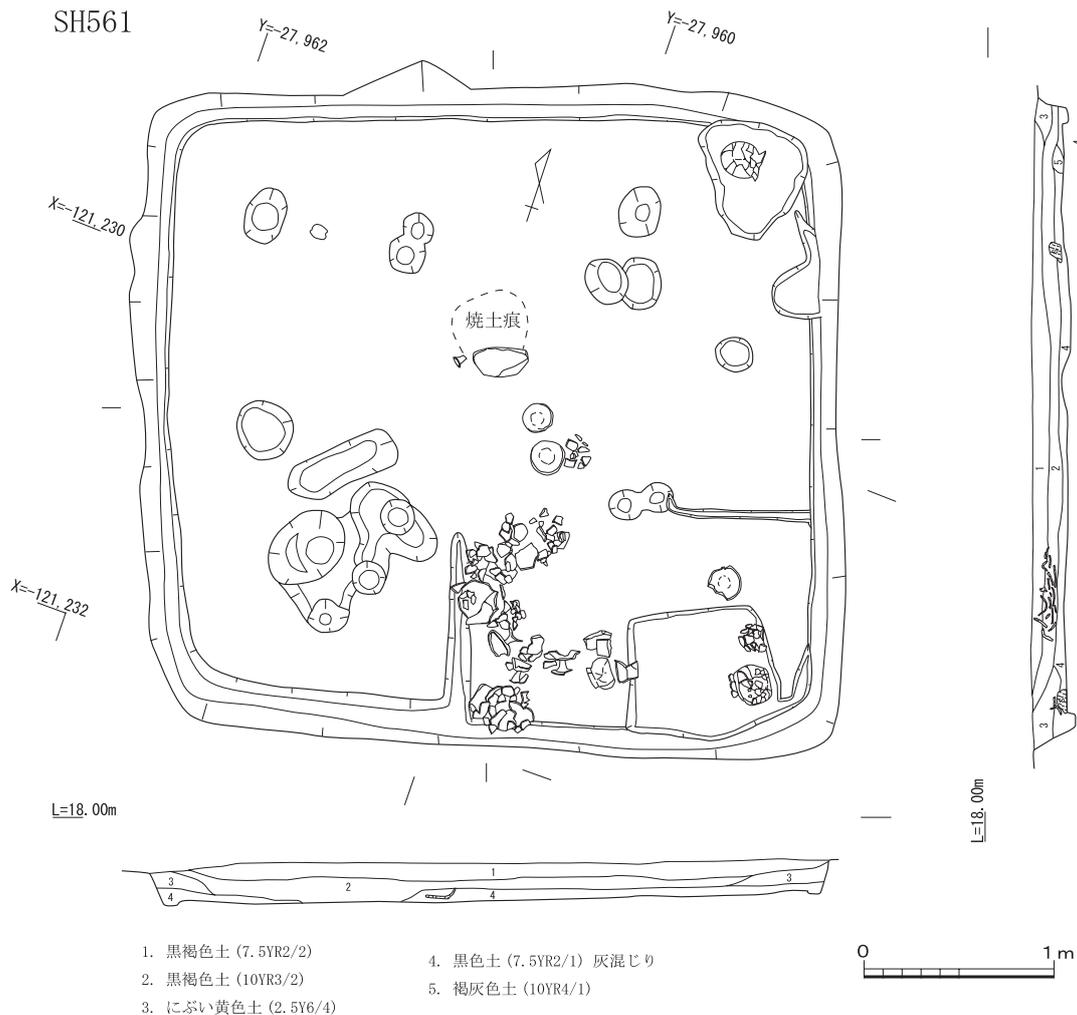
②古墳・弥生時代(第21図)

竪穴式住居跡 S H561(第22図) 古墳時代前期の周壁溝を持つ方形の竪穴式住居跡である。住居床面南東部には2本の浅い溝によって区画された部分が存在し、その中に方形の土坑が掘り込まれている。第45図で示した土器の多くはこの区画内から出土しており、出土状況も良好であった。南北3.4m、東西3.7m、検出面からの深さ20cmの規模を持つ。主柱穴は判断できなかった。

竪穴式住居跡 S H562(第23図) 方形の古墳時代初頭の竪穴式住居跡である。床面で竪穴式住居跡 S H568を検出した。出土遺物は下層の住居跡のものと混在し、この地域の竪穴式住居の平面形の変遷から S H562を庄内期に、S H563を弥生時代中期に位置付けた。北東辺5m以上、北西辺5.4m、検出面からの深さ25cmを測る。主柱穴は4本(1本は調査区外)と考えられる。

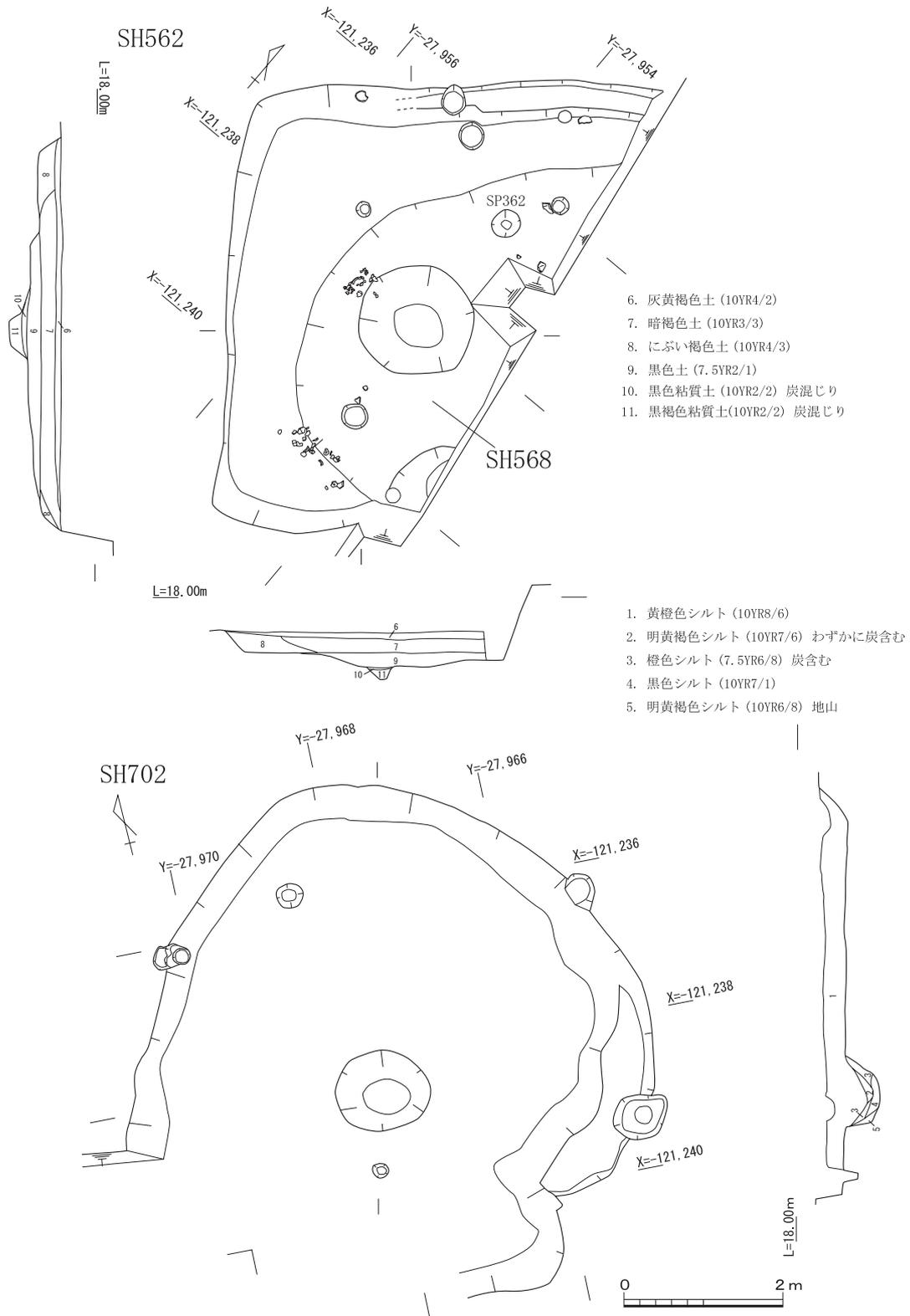
③弥生時代

竪穴式住居跡 S H568(第23図) S H562床面で検出した竪穴式住居跡で、輪郭は S H562によって不明であるが、灰と炭が堆積した中央土坑と考えられる大型の土坑が存在し、竪穴の掘形が S H562の内部で収まっていることから直径4m以下の竪穴式住居跡が存在したと判断した。主柱穴は不明である。



第22図 調子a4-1地区竪穴式住居跡 S H561平・断面図

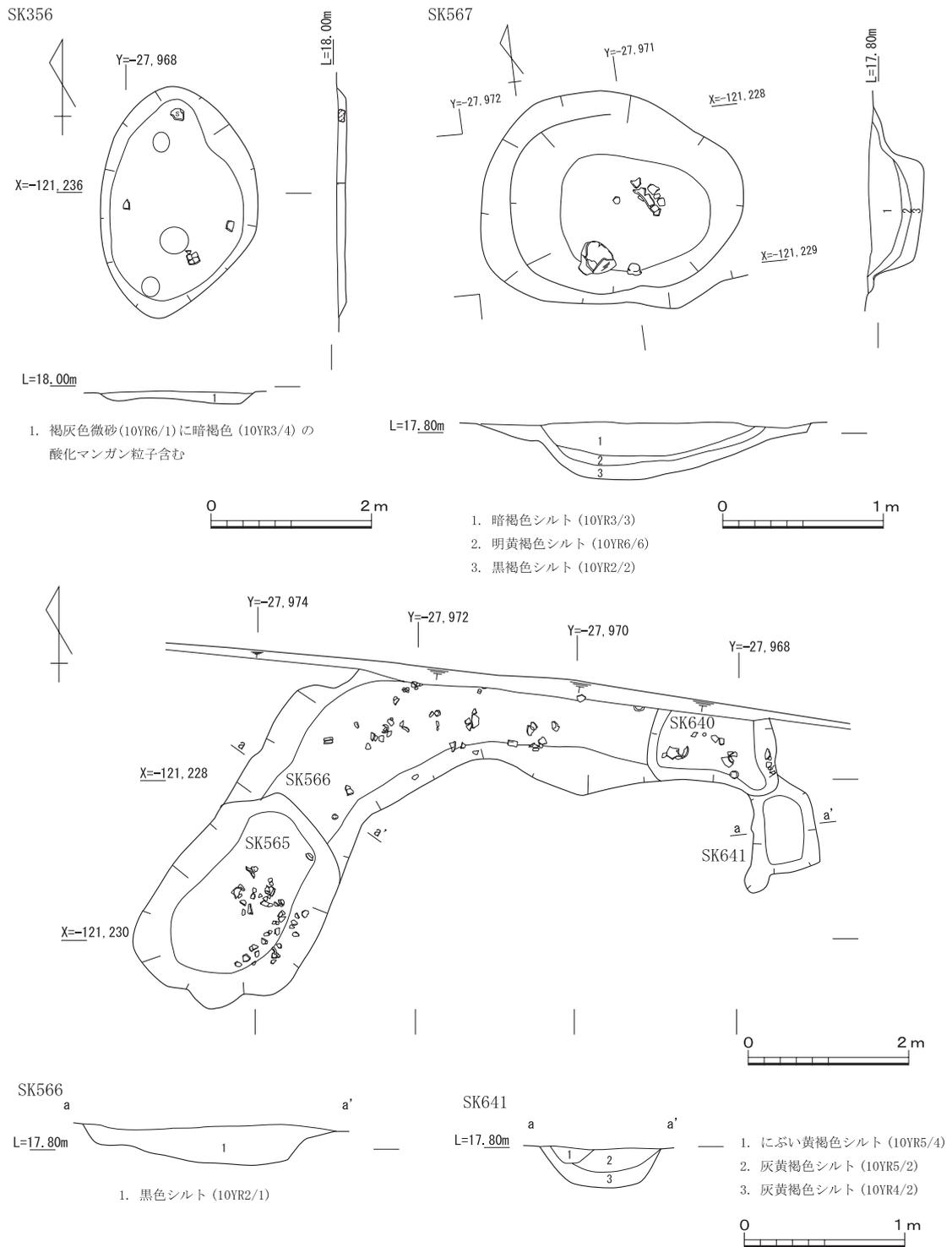
竪穴式住居跡 S H702(第23図) 不正形な円状の平面形を持つ竪穴式住居跡である。床面中央部には土坑があり、炭化物が出土している。屋根を支えた明確な支柱穴は検出できなかった。竪穴式住居の壁はゆるく立ち上がることと形状が不整形であることから、廃絶後に埋没するまで、



第23図 調子a4-1地区竪穴式住居跡 S H562・568・702平・断面図

長期間経過していた可能性が指摘できる。出土遺物はほとんどなく、住居跡の形状や周辺の遺構から時期を決定した。

土坑 S K 566 (第24図) 調査地の北西部で検出した「く」字状に屈曲する溝状の遺構である。遺構内を掘り下げると溝底で土坑状の掘り込みを両端で確認した。東側を S K 640、西側を S K 565としたが、S K 566との前後関係を明確にできなかった。溝状の遺構も、a1地区やb地区で検



第24図 調子a4-1地区土坑 S K 356・565～567・640・641平・断面図

出されている例と同様、土坑が連なっているかのように掘られていることがわかった。長さ8.5m、幅1.8mで、検出面からの深さは40cmである。第24図で示した検出状況は S K 566掘削時のもので、底面で落ち込みを発見したため、S K 565・640部分と分けて報告した。

**土坑 S K 565**(第24図) 調査地の北西部、S K 566西側底面で検出した平面が楕円形の土坑で、長軸2.9m、短軸2m、検出面からの深さは20cmである。

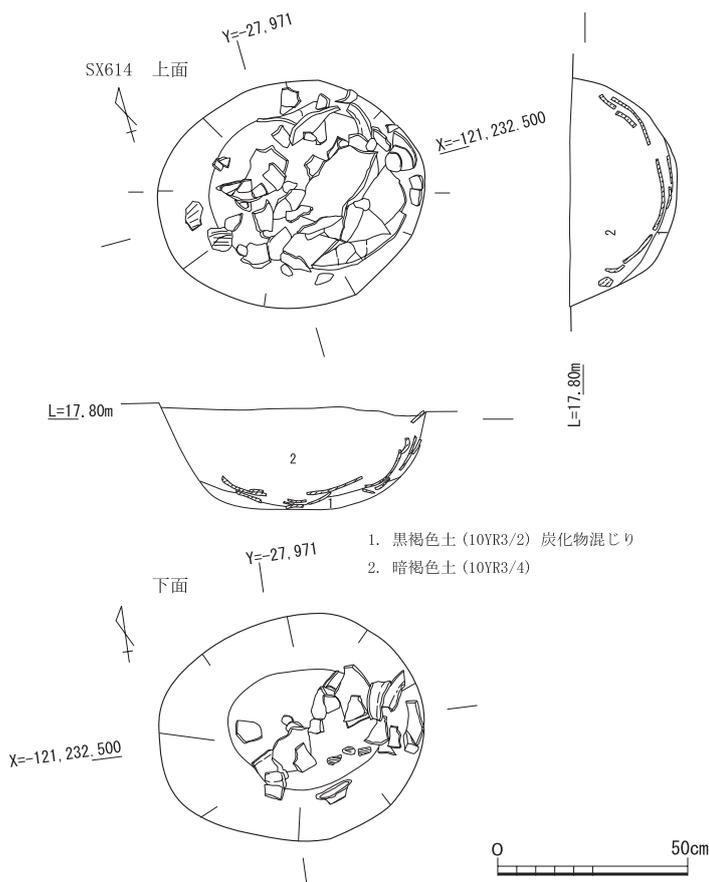
**土坑 S K 640**(第24図) S K 566の東端の底面で確認した土坑で、長軸1.6m、短軸1mの方形を呈し、検出面からの深さは10cmである。

**土坑 S K 567**(第24図) 調査地の北西部、S K 566の南側に隣接して検出した。楕円形の平面を持つ土坑である。長軸2m、短軸1.3m、検出面からの深さ40cmを測る。

**土坑 S K 641**(第24図) 調査地中央部の北辺に近接して、S K 640と接した状態で検出した土坑である。南北1.2m、東西0.8m、検出面からの深さ40cmを測る。

**土器溜り S X 556** 調査区西端で検出した。中世の溝 S D 554の底面で検出した土器溜りである。1.5m程度の範囲に土器が確認できた。

**土器埋納遺構 S X 614**(第25図) 調査地中央部やや北西側で検出した。弥生土器の甕を埋納した土坑で土器棺の可能性もある。掘形の平面形は楕円で長軸0.7m、短軸0.5m、検出面からの深さ25cmを測る。

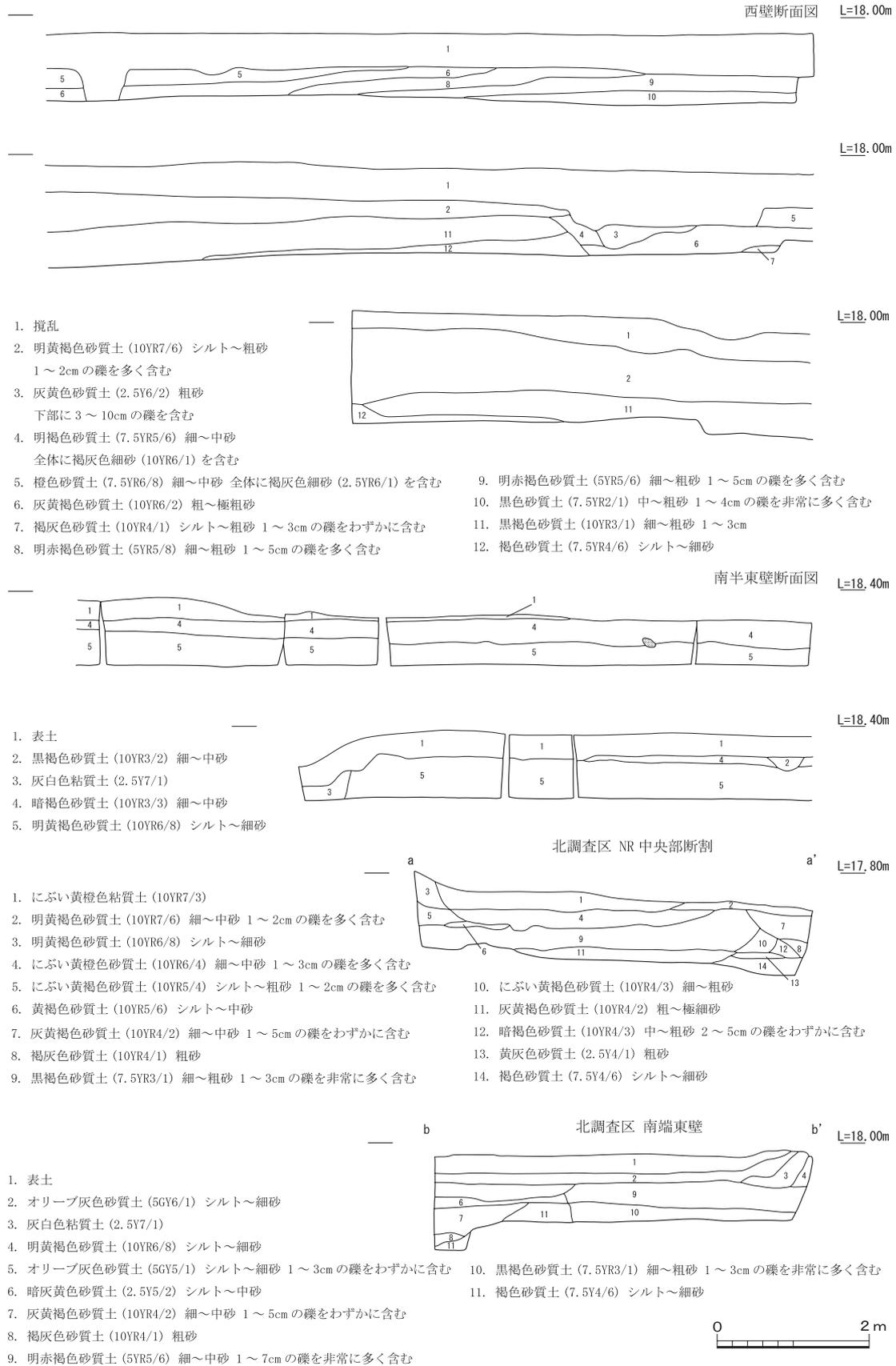


第25図 調子a4-1地区土器埋納遺構 S X 614平・断面図

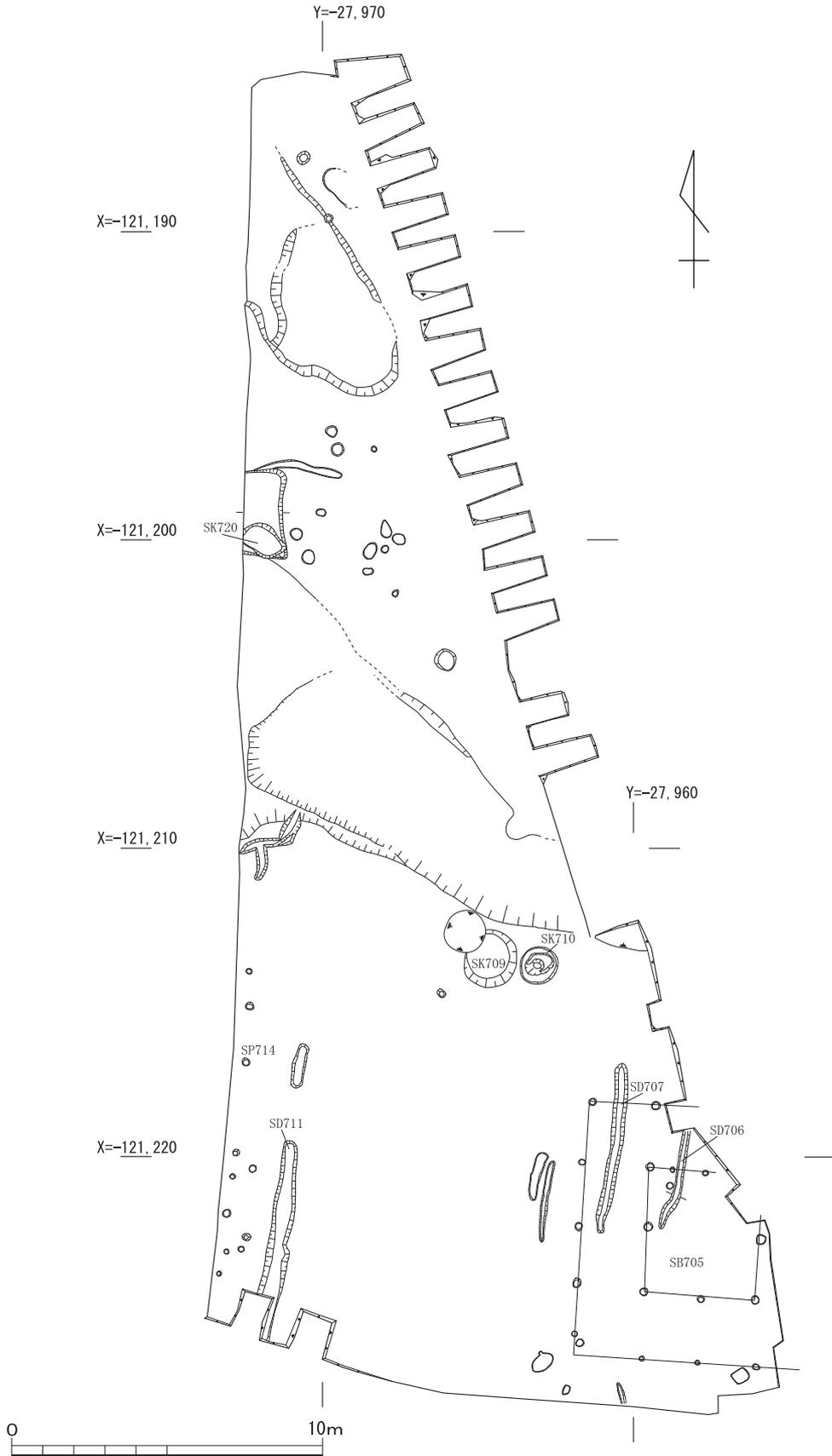
## 5)長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8) a4-2地区

### (1)調査概要と層位(第26図)

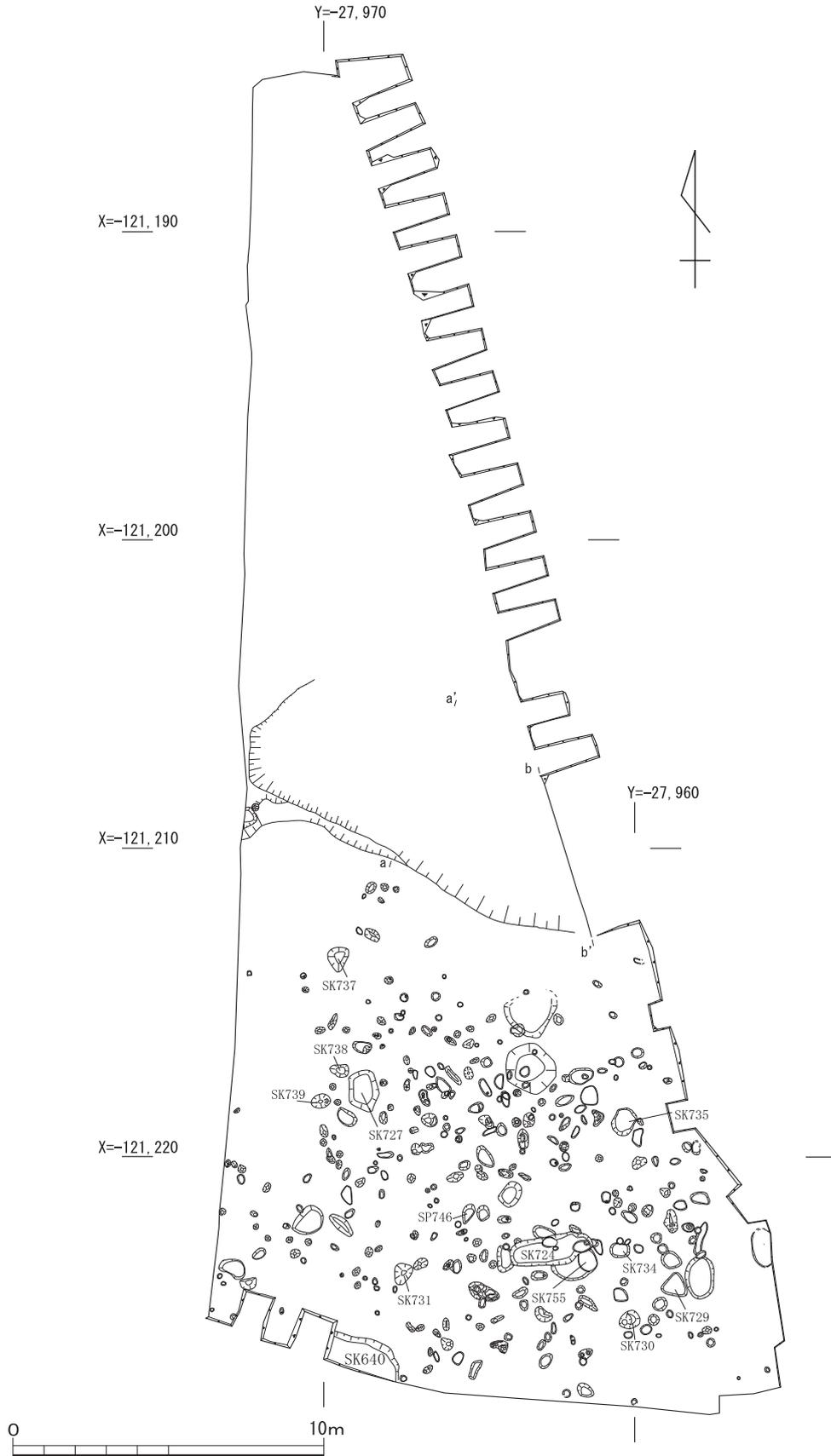
右京第946次調査(a1地区)の東隣接地において実施した。調査面積は462㎡である。調査地は標高の異なる2枚の水田にわたっており、調査区の北側3/5程(北調査区)は南側(南調査区)に比して0.3m程低位となっていた。調査の結果、削平による影響を受けたものと考えられ、遺構の存在も希薄であった。



第26図 調子a4-2地区土層断面図



第27図 調子a4-2地区上層遺構(中世)平面図



第28図 調子a4-2地区下層遺構(弥生時代)平面図

層序は南調査区では耕作土の下に暗褐色砂質土(第4層)、明黄褐色砂質土(第5層)が堆積しており、暗褐色砂質土(第4層)の上面が中世段階、明黄褐色砂質土(第5層)の上面が弥生時代の遺構面となっていた。北調査区では1面の遺構面を検出した。また、南調査区では2面の遺構面を検出したが、上層の遺構面は大きく削平を受けており、残存状況も不良であった。以下、主要な遺構に関して記述する。

(2) 検出遺構

① 中世(第27図)

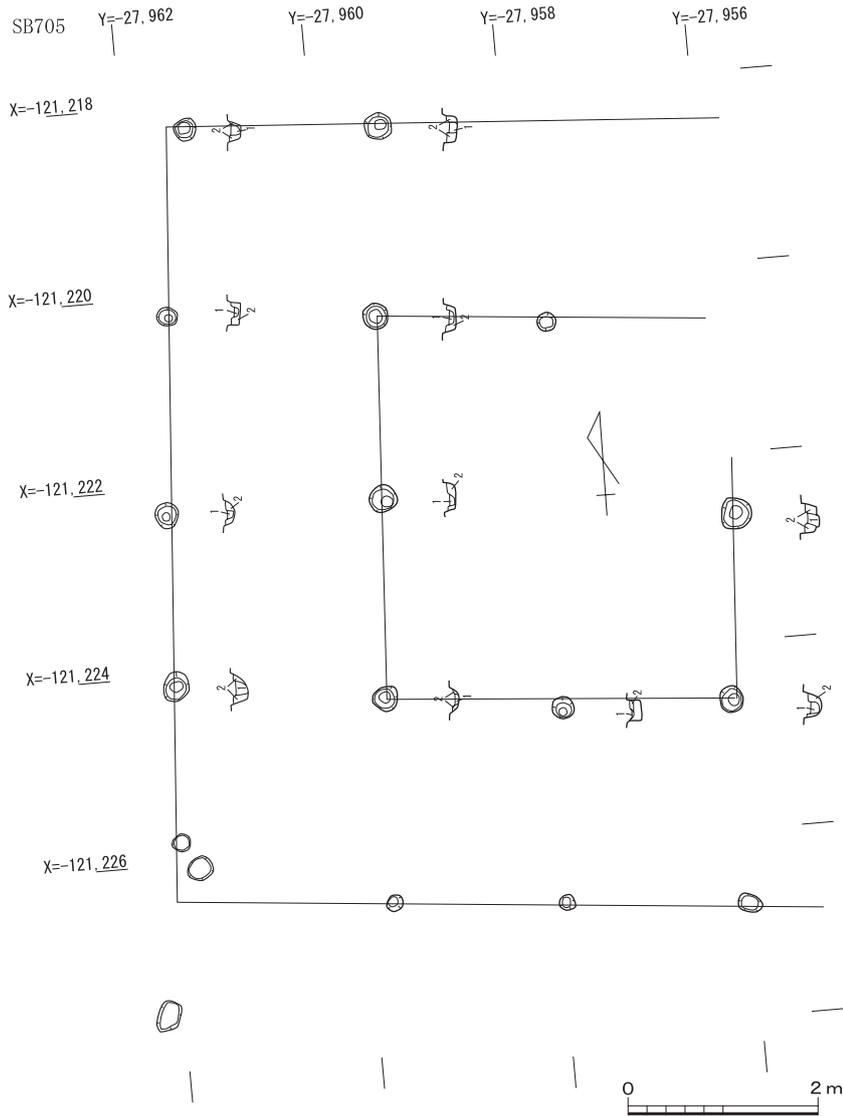
掘立柱建物跡 S B 705

(第29図) 南調査地南東部で検出した。東側が調査区外へと広がるため、

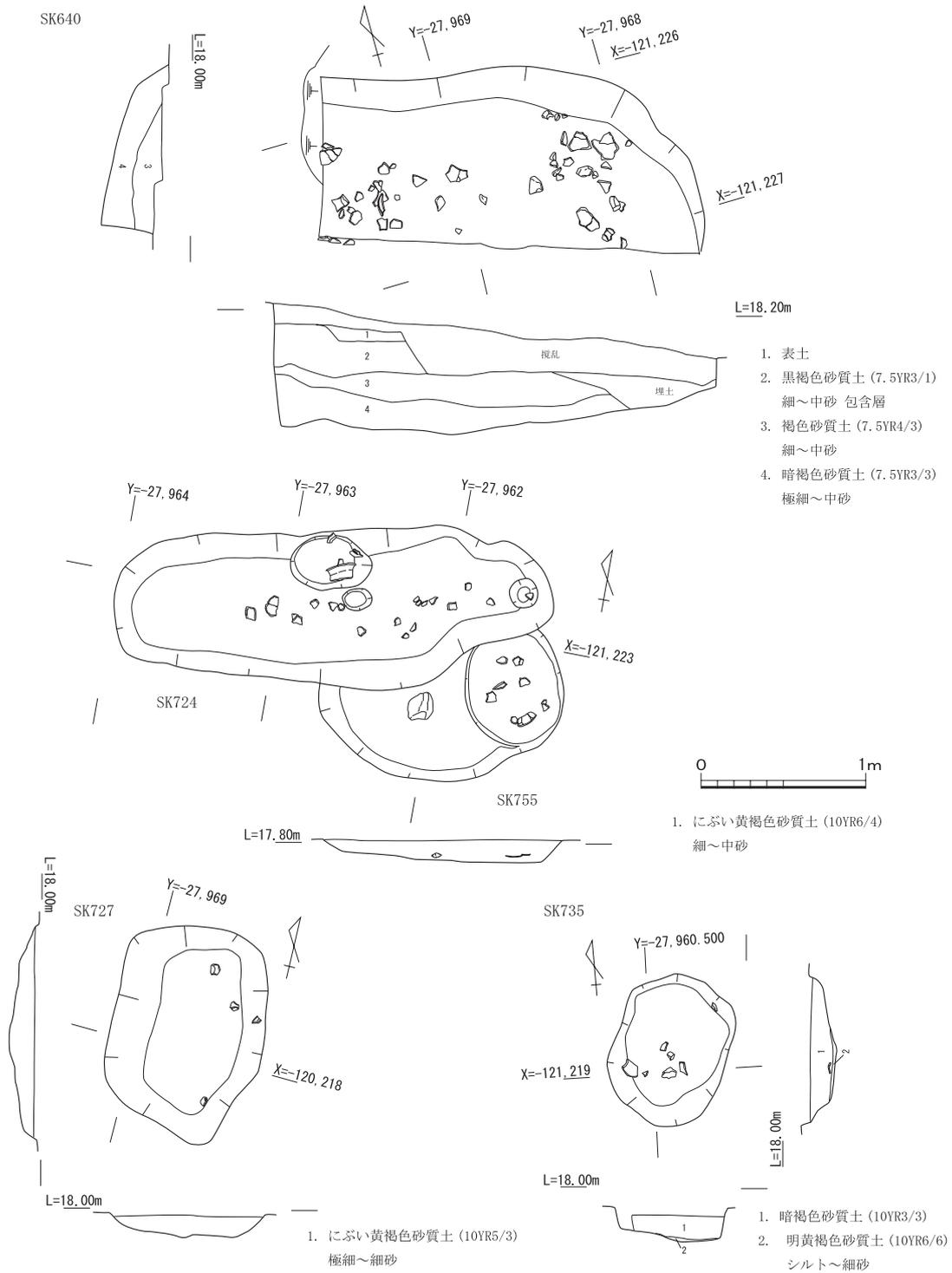
全容は不明であるが、2間×2間の身舎に、三もしくは四面に庇を伴うものと考えられる。身舎部分の柱間は1.8～2.1m、柱掘形はおよそ0.3mを測る。概ね0.2mの深さを残すのみであるが、多くは径0.1m前後の柱痕跡が良好に残存していた。周囲の庇に伴う柱穴も、身舎と柱筋を概ね揃えている。各柱間は1.8～2.1mを測り、南西隅部の1基に関しては、精査を繰り返したが検出できなかった。すでに削平を受け、消失したものと判断した。この建物跡は、北で東へ3度主軸が振れている。

柱穴 S P 714 南調査区西端で検出した。直径0.3mの円形を呈する。深さは5cmほどを残すのみである。

土坑 S K 720(第27図) 北調査区中央西端で検出した。東西方向に主軸をとる不整形な楕円形を呈し、西端が調査区へと広がるため全容は不明である。南北1.1m、東西1.5m以上、検出面からの深さはおよそ0.2mを測る。埋土は2層で、上層は橙色砂質土に灰白色細砂の混入がみられ、下層は褐色砂質土の堆積であった。



第29図 調子a4-2地区掘立柱建物跡 S B 705平・断面図



第30図 調子a4-2地区土坑S K640・724・727・735平・断面図

この他に、上層の遺構としては溝S D706・707・711、土坑S K709・710等を検出した。

②弥生時代(第28図)

土坑S K640(第30図) 調査区南端やや西寄りで検出した。南半はa4-1地区へと続いている。調査区内では東西2.3m、南北1.1mにわたって検出した。深さは0.6m程を残しており、下層の褐

色砂質土・暗褐色砂質土から弥生土器がまとまって出土している。

土坑 S K 724(第30図) 南調査区南東隅部付近で検出した。長軸2.7m、短軸1.0mを測る長楕円形を呈し、深さは0.3m程を残す。北寄りの中央付近に長軸0.5m、短軸0.3mを測る楕円形を呈する土坑が穿たれる。また、土坑の中軸に沿う形で、直径0.2m程のピットが、中央付近と東端で検出された。

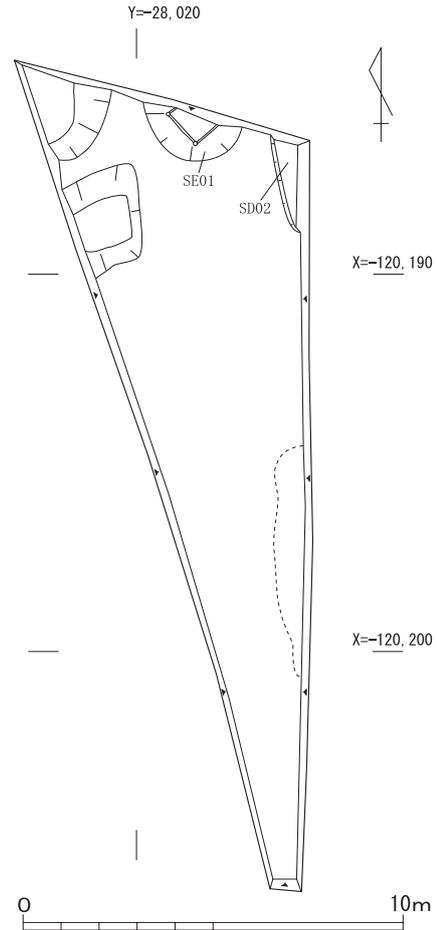
土坑 S K 727(第30図) 南調査区中央やや西寄りで検出した。不整形な五角形を呈し、南北1.3m、東西1.0mを測る。深さは0.15m程を残し、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層である。

土坑 S K 735(第30図) 南調査区北東部で検出した。南北0.9m、東西0.7mを測る。深さは0.25m程を残し、埋土は最下層に薄く明黄褐色砂質土、その上層には暗褐色砂質土が堆積していた。

土坑 S K 737 南調査区北西隅部付近で検出した。南北0.8m、東西0.7mを測る。深さは0.2m程を残し、埋土はにぶい黄褐色砂質土、褐色砂質土の2層が堆積していた。

土坑 S K 755(第30図) 南調査区南東隅部付近で検出した。北半部を S K 724によって切られている。長軸1.5m、短軸0.8m以上の楕円形を呈すると思われる。最深部で0.15m程を残すのみであり、埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層である。

この他、土坑 S K 722・729・730・731・734・738・739・746等で遺物が出土している。



第31図 調子a5地区平面図

## 6)長岡京跡右京第1006次(7ANRHK-8) a5地区

### (1)調査概要と層位

発掘調査地点では、遺構検出面直上まで盛土が堆積していた。調査地点内では褐灰色砂礫層が遺構検出面となり、近世以後の井戸と平成16年度のトレンチで検出した溝の肩部をわずかに検出ただけである。遺構に関連した遺物の出土は認められなかった。

## 4. 出土遺物

出土遺物の総量は、整理箱にして79箱である。その内訳は、長岡京跡右京第946次調査が38箱、同969次調査が40箱、同1006次調査が1箱である。

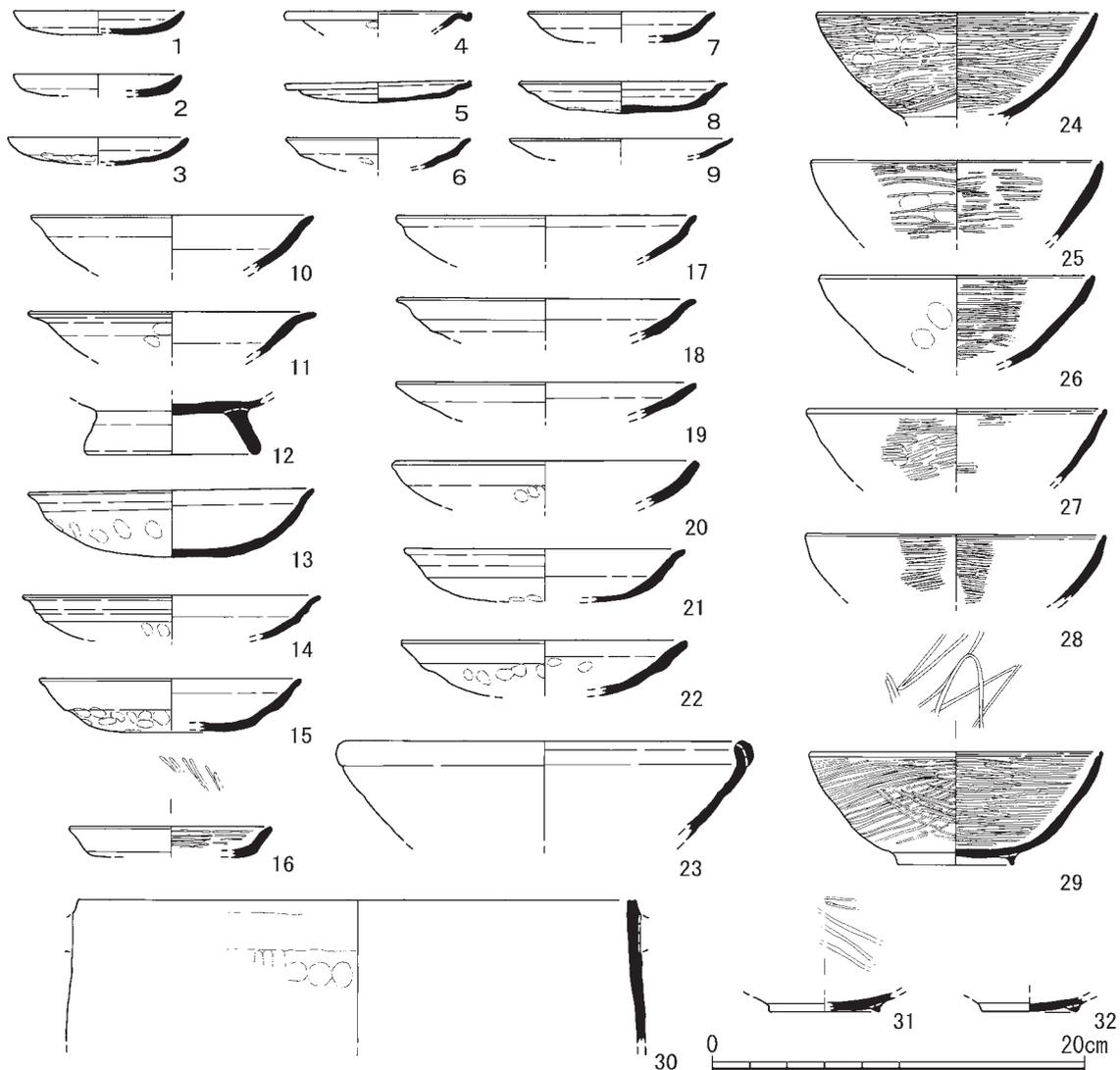
### 1)土器・土製品

#### (1)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7) a1地区

①古代・中世

木棺墓 S T 201 (第32図) 1～3は土師器皿で、口縁部残存率はそれぞれ1/4、1/2、1/3、調整は内外面ナデである。1・2は掘形内出土で、3は棺内で出土した。色調は1・2の外浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)、3の内外面は黄橙色(10YR8/4)である。

井戸 S E 244 (第32図) 4・9・10・12・14・15・19・26が井戸掘形内出土である。5・6・7・21・22が井戸枠内出土遺物である。8・11・16～18・20・23～25・27～32は井戸枠検出までの埋土中から出土した。4～15・17～22・30は土師器である。16・24～29・31・32は瓦器である。23は須恵器である。4～9は土師器皿である。4～9の口縁残存率はそれぞれ1/5、9/10、1/10以下、1/8、6/7、1/8である。調整は内外面ナデである。色調は4が内外面浅黄橙色(10YR8/3)、5が外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)、6が内外面灰白色(10YR8/2)、7が内外面灰白色(10YR8/2)、8が内外面灰白色(2.5Y8/1)、9が内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。10・11は土師器碗で、口縁残存率は1/10で内外面の調整はナデである。10の色調は内外面共に浅



第32図 調子a1地区出土土器(1) 木棺墓 S T 201、井戸 S E 244

黄橙色(10YR8/3)、11は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。12は台付皿の高台部分で残存率1/2、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。13～15は土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/2、1/4、1/6、調整は内外面ナデ、色調は13の外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)、14は内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、15は内外面灰白色(5Y8/1)である。16は小皿で、口縁残存率1/5、調整は外面ミガキ及びナデ、内面ミガキ、色調は内外面共に暗灰色(N3/0)である。17から22は土師器椀で、口縁残存率はそれぞれ17～19が1/10以下、20が1/2、21が1/5、22が1/8で、内外面共にナデ調整である。色調は17・18・19が内外面浅黄橙色(10YR8/3)、20・21が内外面灰白色(10YR8/2)、22が外面灰白色(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。23は須恵器鉢で、口縁残存率は1/10以下で、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。24～29は瓦器椀で、口縁残存率は24が1/4、25～28は1/10以下、29は2/5である。調整は内外面ミガキである。色調は24・25・26・29・30の内外面暗灰色(N3/0)、27は内外面黒色(N2/0)である。30は瓦質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下、鏝の部分は剥落している。調整は外面不明、内面はナデで、色調は外面灰黄褐色(10YR5/3)、内面は灰白色(10YR8/1)である。31・32は椀の底部で、底部残存率はいずれも1/5である。31の調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。32の調整は外面ナデ、内面不明、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。

**掘立柱建物跡 S B01(第33図)** 柱穴 S P 44・45・247内から土器が出土している。41は P 44出土の土師器皿で、口縁部完存率1/4、調整不明。色調は外面明黄橙色(10YR7/6)、内面灰白色(2.5YR8/2)である。68は S P 44出土の須恵器の小型壺で底部残存率は1/2で、糸切り痕が残る。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。33～35は S P 45出土の土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ5/6、9/10、1/4である。調整は内外面ナデで、色調は33・34の外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)、35の内外面はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。36・37は S P 247出土の土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/4、1/2である。調整は内外面ナデで、色調は36の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)、37の内外面灰白色(10YR8/2)である。

**柱穴 S P 19(第33図)** 38・39は土師器の皿で調整は内外面ナデである。38の口縁残存率は1/3、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。39の口縁残存率は1/4、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。47・48は S P 19の残存部部分を S P 269として取り上げた遺物である。47は瓦器椀で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面不明、内面ミガキ、色調は外面灰白色(5Y7/1)、内面暗灰色(N3/0)である。48は土師器の皿で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ナデで、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面淡橙色(5YR8/4)である。

**柱穴 S P 32(第33図)** 50は瓦器椀底部片で、底部残存率は1/7である。調整は外面不明、内面ミガキ、色調は外面灰白色(5Y8/1)、内面暗灰色(N3/0)である。

**柱穴 S P 49(第33図)** 40は土師器底部片で、底部残存率は1/10以下である。内外面は著しく摩滅しているため軟質の緑釉陶器であった可能性もある。色調は灰白色(10YR8/2)である。

**柱穴 S P 84(第33図)** 51～53は瓦器椀である。口縁部残存率はそれぞれ1/5、1/3、1/2である。



第33図 調子a1地区出土土器(2) 柱穴

51の調整は内外面不明であるが、ミガキの痕跡が内面にわずかに認められる。色調は内外面共にオリーブ黒色(7.5Y3/1)または灰白色(N8/0)である。52は内外面の調整は不明、色調は内外面共にオリーブ黒色(5Y3/1)または灰白色(N8/1)である。53は調整が外面ミガキ及びナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰色(N6/0)、内面が灰色(N4/0)である。

柱穴 S P 97(第33図) 54・55は共に無釉陶器の底部で、底部残存率は1/3、5/6である。54の調整は外面ナデ後ケズリ、内面ナデ調整で、色調は内外面共に灰白色(7.5Y8/1)である。55は内外面ナデ調整、色調は内外面青灰色(5PB6/1)である。

柱穴 S P 109(第33図) 56は土師器皿で口縁残存率は1/3である。調整は内外面共にナデで、

色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴 S P 111(第33図) 57は土師器皿で、口縁残存率は1/2である。調整は内外面共にナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR5/1)である。

柱穴 S P 113(第33図) 42・43は土師器皿で口縁部残存率は順に1/8、1/10以下で、調整は不明である。色調は42の内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)で、43は外面淡橙色(5YR8/4)、内面橙色(2.5YR7/6)である。44は瓦器椀で口縁部の残存率は1/7で、調整は外面ミガキ及びナデ、内面不明である。色調は外面灰白色(5Y8/1)、内面灰白色(5Y7/1)である。45は黒色土器の椀で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面がミガキ、色調は内外面とも黒色(2.5Y2/1)である。

柱穴 S P 134(第33図) 58は土師器の皿で、口縁残存率は1/3である。調整は内外面ともナデで、色調は外面が浅黄橙色(10YR8/3)、内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴 S P 195(第33図) 59は瓦器椀片で、口縁部残存率1/10以下である。調整は内外面不明、色調は外面灰色(N4/0)、内面灰色(N5/0)である。

柱穴 S P 207(第33図) 60は瓦器椀で口縁残存率は1/6である。調整は内外面ミガキで、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。

柱穴 S P 213(第33図) 61は土師器皿で、口縁の残存率1/6である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が橙色(2.5YR5/4)、内面がにぶい褐色(7.5YR5/4)である。

柱穴 S P 218(第33図) 67は須恵器の底部で、底部の残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が明青灰色(5PB7/1)、内面が灰白色(N7/0)である。

柱穴 S P 222(第33図) 62・63・66は瓦器椀である。62・63の口縁残存率は順に3/5、1/9である。62の調整は内外面共にミガキ、色調は暗灰色(N3/0)である。63の調整は外面がミガキ、内面は不明である。色調は内外面共に灰色(N5/0)である。66の底部残存率は1/6で、調整は外面ナデ、内面は不明、色調は内外面共に灰色(N5/0)である。64は土師器で椀状に復元できるが歪が大きく皿であった可能性もある。口縁残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面がにぶい橙色(5YR7/3)、内面はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。

柱穴 S P 252(第33図) 69は土師器で反転復元によって椀状の深さを持つ形態となったが、高杯の口縁部である可能性がある。口縁残存率は1/10以下で、調整は外面がナデ、内面は不明、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4)である。

柱穴 S P 264(第33図) 70は土師器の皿で、口縁残存率は1/8である。調整は内外面共にナデ、色調は外面が橙色(5YR7/4)、内面はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

柱穴 S P 265(第33図) 46は土師器の皿で、口縁の残存率は1/3である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)である。

柱穴 S P 267(第33図) 71は瓦器椀で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にミガキ、色調は内外面共に橙色(N6/0)である。72は須恵器の耳壺である。調整は外面ナデ及びケズリ、内面ナデで、色調は外面灰黄色(2.5YR6/2)、内面灰白色(N7/0)である。

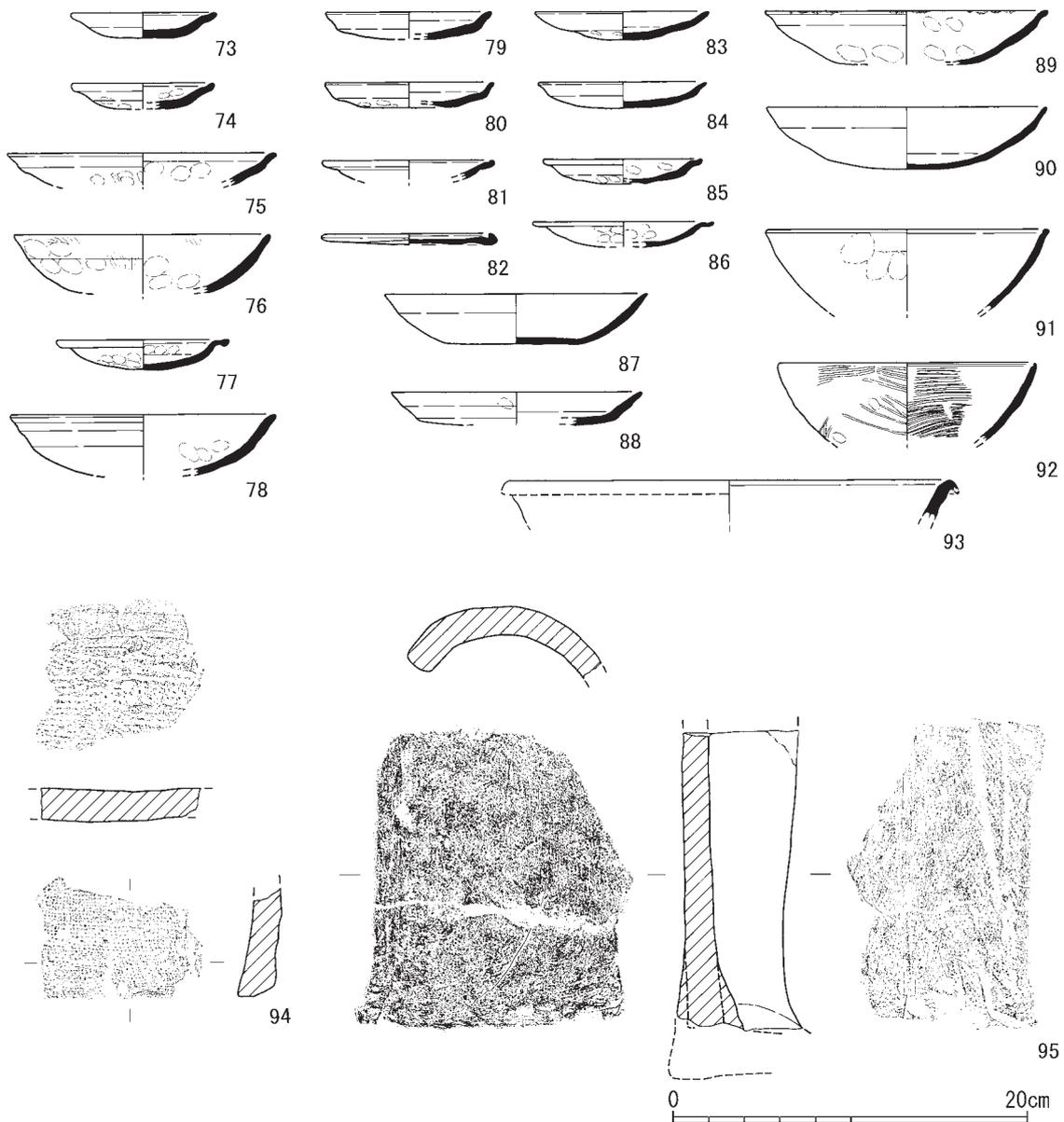
柱穴 S P 287(第33図) 65は土師器の皿で、口縁残存率は1/7である。調整は内外面共にナデ、

色調は外面が浅黄色(10YR8/3)、内面は灰白色(2.5Y8/2)である。

柱穴 S P 299(第33図) 49は土師器の皿で、口縁の残存率は1/6である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に灰白色(7.5YR8/2)である。

土坑 S K 34(第34図) 73～75は土師器皿で、76は土師器椀である。73・74の口縁残存率はそれぞれ1/6、1/4で、調整は内外面共にナデである。色調は、73の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)、74は外面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面がにぶい黄橙色(7.5YR7/4)である。75・76の口縁残存率はそれぞれ1/10、1/4である。75の調整は、内外面共にナデ、色調は外面が灰白色(10YR8/2)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)である。76の調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/2)である。

土坑 S K 30(第34図) 77は土師器皿で、78は土師器椀で、口縁の残存率は、77が完形、78は



第34図 調子a1地区出土土器(3) 土坑

1/4で、内外面共にナデ、色調は77の外表面が灰黄色(2.5Y7/2)、内表面が浅黄橙色(10YR8/3)、78は外表面が灰白色(10YR8/2)、内表面が浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑 S K 41(第34図) 79～81・83・84は土師器皿で、口縁残存率は1/5、1/4、1/9、1/3、2/3、内外面の調整は共にナデである。色調は、79が内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4)、80は外表面が黄灰色(2.5Y6/1)、内表面が黒褐色(2.5Y3/1)、81は内外面共に灰白色(10YR8/2)、83は内外面共に浅黄橙色(10YR7/3)、84は外表面が浅黄橙色(10YR7/4)、内表面が浅黄橙色(10YR7/3)である。87は土師器杯で、口縁残存率1/3である。調整は内外面ナデ、色調は外表面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内表面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。88は土師器皿で口縁残存率1/7である。調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。95は丸瓦で、色調は暗灰色(N3/0)である。

土坑 S K 132(第34図) 82は土師器皿で口縁残存率5/6、調整は内外面共にナデ、色調は外表面が赤橙色(10YR6/6)、内表面が灰白色(7.5YR8/2)である。

土坑 S K 200(第34図) 85・86は土師器の皿で、調整は内外面共にナデである。85の口縁残存率1/2、色調は内外面黄灰色(2.5YR7/2)である。86は口縁の残存率1/2、色調は内外面共に黄灰色(2.5YR7/2)である。89・90は土師器の椀で、内外面の調整はナデである。口縁残存率はそれぞれ1/2、1/4で内外面の調整はナデである。色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。91は黒色土器の椀で、口縁残存率1/10以下で、調整は外表面がミガキ、内表面は不明である。内外面共に黒色(2.5Y2/1)である。93は須恵器甕口縁部で、残存率は1/10以下である。内外面の調整は不明、色調は外表面が黒褐色(10YR3/1)、内表面が灰色(N6/0)である。

土坑 S K 217(第34図) 92は瓦器椀で、口縁残存率1/6である。調整は内外面共にミガキ、色調は外表面が灰色(N4/)、内表面が暗青灰色(5BP3/1)である。

土坑 S K 251(第34図) 94は平瓦片で、凹面に布目、凸面に縄目が残る。色調は、凹面が暗灰色(N3/0)、凸面がにぶい褐色(7.5YR6/4)である。

溝 S D 11(第35図) 96は瓦器椀で、口縁の残存率1/9、調整は不明で、色調は外表面が明褐灰色(7.5YR7/2)、内表面が灰白色(2.5Y7/1)である。97は土師器の皿で、口縁残存率1/2、調整は内外面共にナデ、色調は外表面が灰白色(10YR8/2)、内表面が浅黄橙色(10YR8/3)である。98は白磁椀で、口縁の残存率は1/18である。色調は内外面共に灰白色(5Y7/2)である。

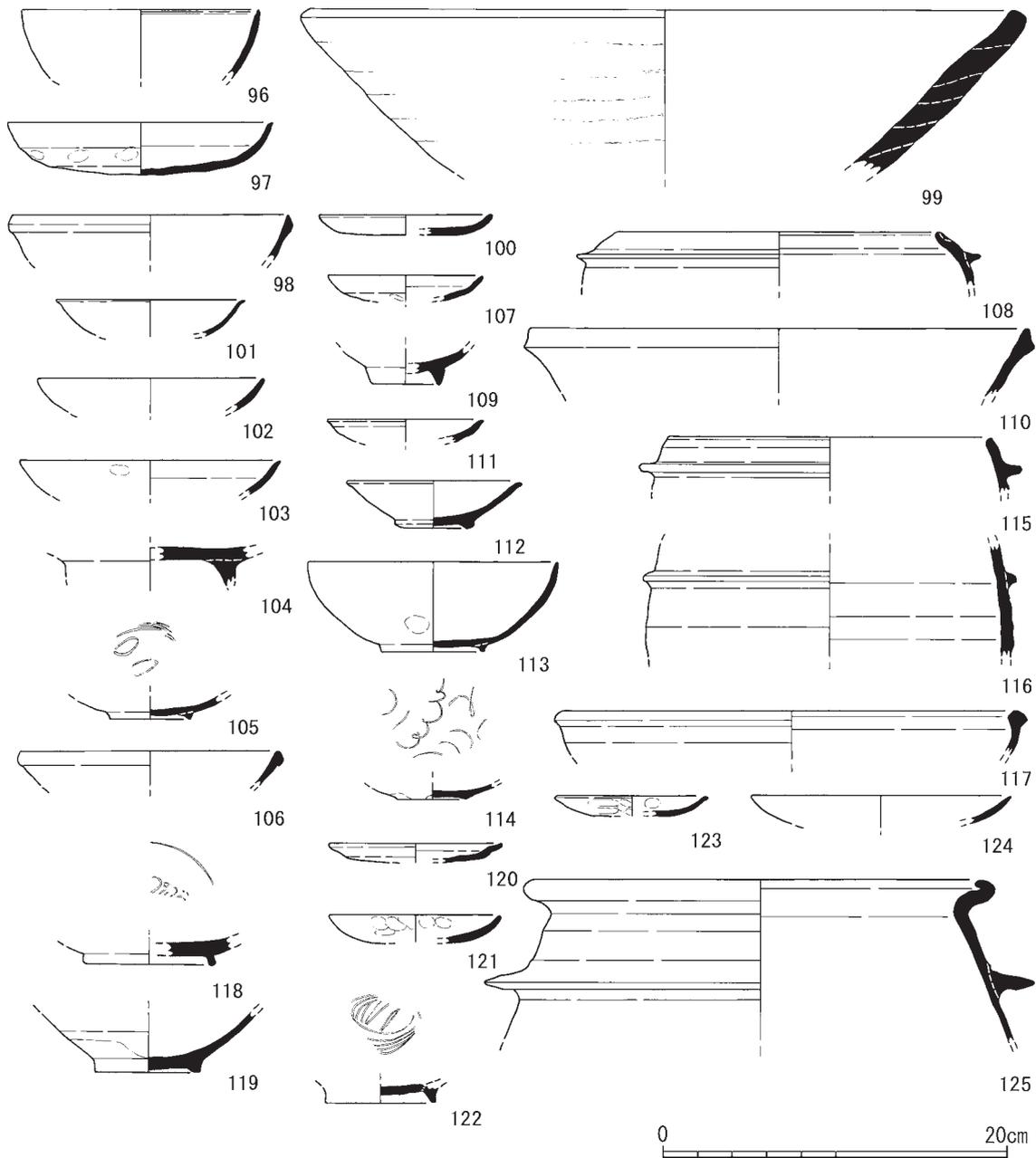
溝 S D 15(第35図) 99は瓦質の鉢で、接合痕が多く残る。口縁部残存率は1/10以下で、調整は内外面共にナデ、色調は外表面が灰白色(2.7Y7/0)、内表面が黒色(N2/0)である。100は土師器皿で、口縁部の残存率は1/4である。

溝 S D 16(第35図) 101は白磁の皿で、口縁部残存率は1/10以下である。色調は外表面が灰白色(2.5Y8/1)、内表面が灰白色(5Y7/2)である。102は土師器の皿で、口縁残存率は1/10以下である。調整は不明で、色調は内外面共に浅黄色(10YR8/3)である。

S D 43(第35図) 103・107は土師器皿で、104は同台付き皿である。口縁残存率は103が1/8、104が1/4で、内外面共にナデ調整である。色調は、103が内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/4)、104は外表面がにぶい橙色(7.5YR7/4)、内表面が灰黄褐色(10YR5/2)、107は外表面灰黄色(2.5Y7/2)、内表面

にぶい黄色(10YR2/1)である。105は瓦器椀で、底部残存率1/2である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は外面灰白色(2.5Y7/0)、内面暗灰色(N3/0)である。106は白磁椀で口縁残存率1/8、色調は外面灰白色(7.5Y7/2)、内面灰白色(7.5Y8/1)である。108は瓦質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は外面暗灰色(N3/0)、内面灰色(N6/0)である。

溝S D80(第35図) 109は青磁椀で、底部残存率は1/8である。色調は外面オリーブ灰色(6GY6/1)、内面明青灰色(5B7/1)である。110は須恵器鉢で、口縁部残存率は1/10以下である。内外面ナデ、色調は外面青灰色(5PB6/1)、内面灰白色(N7/0)である。115は須恵質の羽釜で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰色(N6/0)である。118は緑釉



第35図 調子a1地区出土土器(4) 遺構

陶器底部、残存率1/8で内面に陰刻が施される。色調は内外面共に浅黄色(7.5Y7/3)である。

**溝SD101(第35図)** 111は土師器の皿で、口縁残存率1/8で、調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/6)である。112は灰釉陶器で、口縁残存率1/2である。調整は内外ナデで、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。113は瓦器椀で口縁残存率1/10以下である。調整は内外面不明、色調は外面淡黄色(2.5Y8/3)、内面灰白色(2.5Y8/2)である。114は底部完存の青磁で、調整は外面ケズリ、内面不明、色調は外面灰白色(2.5Y8/1)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。116は須恵器壺体部で、調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/1)、内面灰白色(N7/0)である。

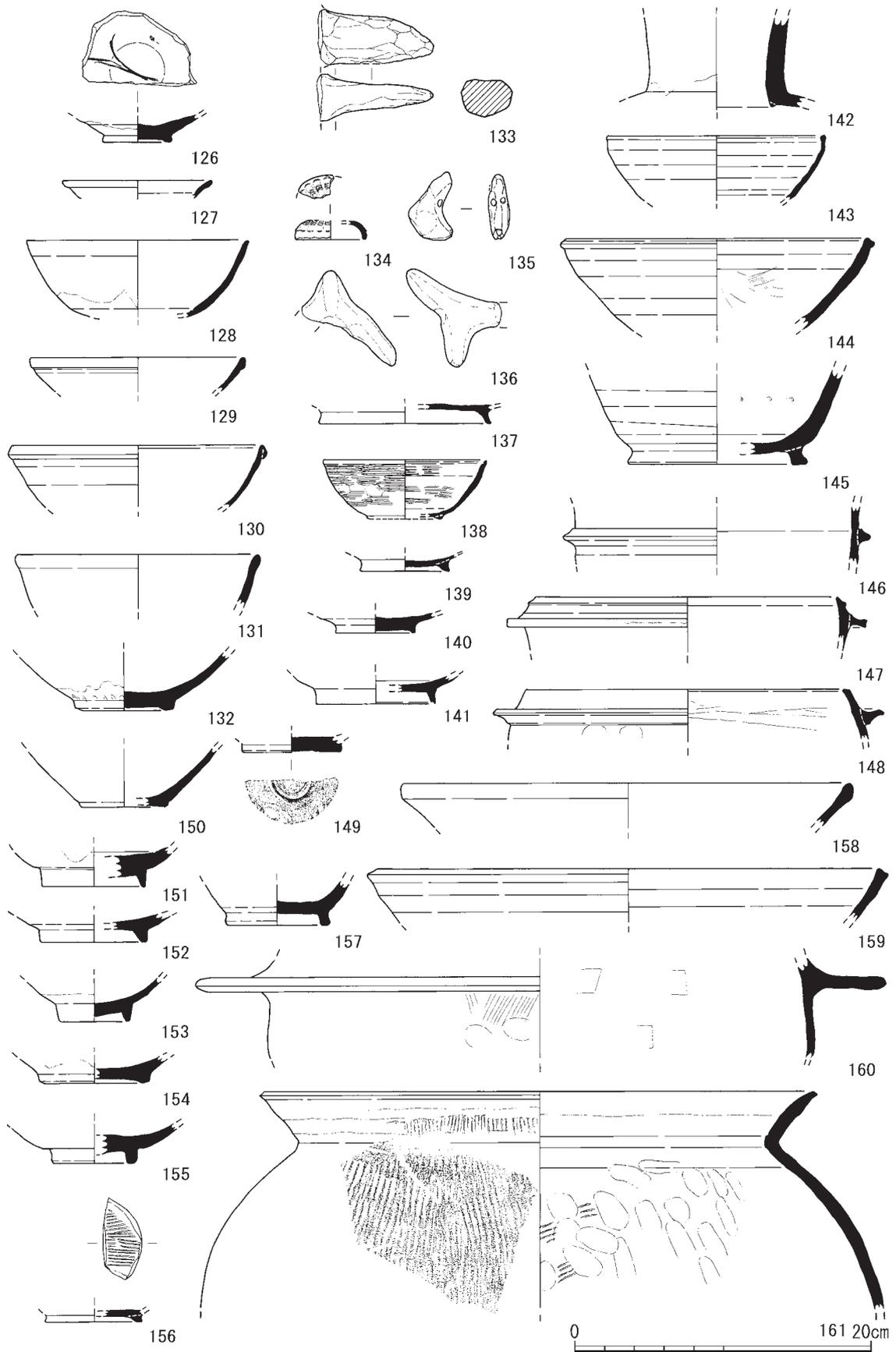
**溝SD173(第35図)** 117は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。120は土師器皿で、口縁残存率1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。

**窪み状遺構SX40(第35図)** 122は瓦器椀で、底部残存率1/5である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面オリーブ黒色(5Y3/1)である。124は土師器皿で、口縁残存率は1/10以下である。内外面共に調整不明、色調は外面灰白色(10YR8/1)、内面(10YR7/1)である。

**窪み状遺構SX155(第35図)** 121・123は土師器皿で、口縁残存率はそれぞれ1/9、1/10以下である。121・123の調整は内外面ナデ、色調は121が内外面灰黄色(2.5Y7/2)、123の外面灰黄色(2.5Y7/2)、内面灰白色(2.5Y7/1)である。

**窪み状遺構SX157(第35図)** 119は白磁椀で、底部残存率1/2である。調整は外面ケズリ、内面ナデ、色調は内外面共に灰白色である。125は土師質の羽釜で、口縁残存率は1/5である。調整は内外面共に不明、色調は外面が灰黄色(2.5Y6/2)、内面が灰黄色(2.5Y7/2)である。

**包含層(第36図)** 126は唐津焼の椀で、底部残存率は1/2である。内面には鉄釉により線が描かれる。外面底部及び台部の一部には釉薬が塗布されていない。127は青磁の皿で、口縁残存率は1/8である。内面には屈曲部に沈線が廻る。色調は内外面共に灰オリーブ色(7.5Y6/2)である。128は白磁椀で、口縁残存率は1/4である。底部付近には施釉されない部分が存在する。釉の部分は灰白色(10Y8/1)、素地の部分は灰白色(7.5Y7/1)である。129・130は白磁椀で、いずれも口縁残存率は1/10以下である。色調は129が内外面灰白色(5Y7/2)、130が内外面共に灰白色(7.5Y8/1)である。131は青磁椀で、口縁残存率は1/10以下である。色調は内外面共にオリーブ灰色(10Y5/2)である。132は白磁椀で、底部残存率は1/2である。高台部には施釉されない。色調は釉の部分が灰白色(5Y7/2)、素地が灰白色(7.5Y8/1)である。133は土師器甌の把手部である。色調はにぶい黄橙色(7.5YR7/4)である。134は青白磁の合子の蓋で、縁部残存率は1/6である。色調は外面明緑灰色(5G7/1)、内面明緑灰色(5G8/1)である。135は土師質の土馬の頭部である。色調は橙色(7.5Y7/6)である。136は土師質の土馬の脚部及び尾の部分である。色調は橙色(7.5Y7/6)である。137は黒色土器椀の底部で、底部残存率は1/6である。調整は外面ナデ、内面不明で、色調は外面がにぶい橙色(7.5YR6/4)、内面黒色(N2/0)である。138は瓦器椀で、口縁残存率1/3である。調整は内外面ミガキ、色調は外面黒色(N2/0)、内面暗灰色(N3/0)である。139は黒色土器椀の底部で、底部の残存率は1/2である。調整は内外面共に不明、色調は外面がにぶい黄橙色(10YR6/4)、



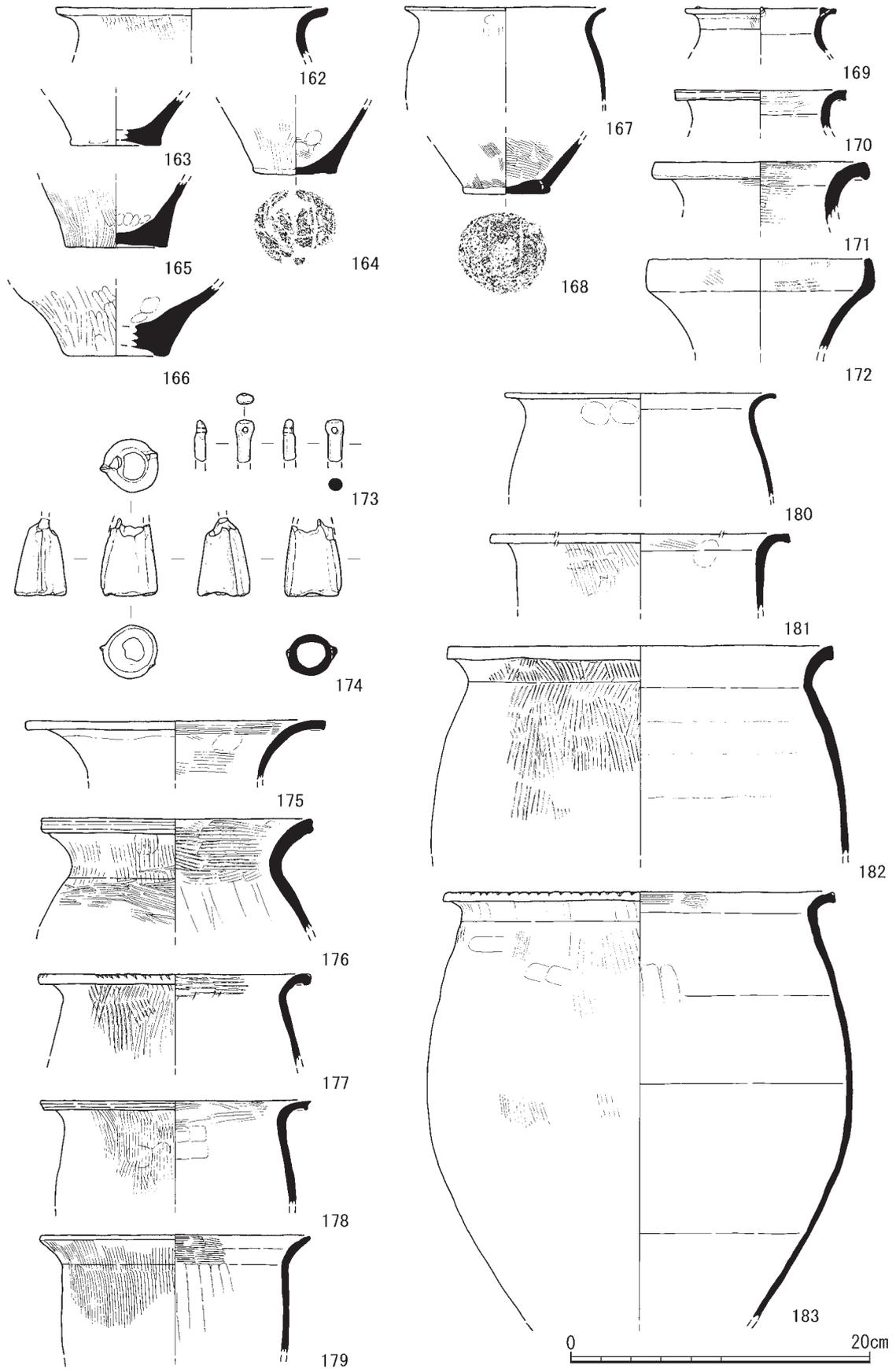
第36図 調子a1地区出土土器(5) 包含層

内面が灰色(N4/0)である。140は緑釉陶器の素地で、底部は完存している。調整は内外面共ケズリ及びナデ、色調は外面が青灰色(5B6/1)、内面が明青灰色(5BP7/1)である。141は緑釉陶器碗である。高台内側を含め全面に施釉されている。高台端内面に段を持っている。内外面共にオリープ灰色(10Y4/2)である。142は灰釉陶器壺の頸部である。調整は内外面ナデで、色調は内外面とも灰白色(2.5Y7/1)である。143は須恵器の碗で口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰色(N5/0)である。144は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は外面灰白色(N7/1)、内面灰白色(N6/1)である。145は須恵器壺の底部で、底部残存率は1/4である。調整は外面ケズリ及びナデ、内面ナデ、色調は外面灰白色(N7/1)、内面灰色(N6/1)である。146は須恵器壺の胴部である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。147・148は瓦質の羽釜である。口縁残存率は147が1/10以下、148が1/6である。調整はいずれも内外面ナデである。色調は147の外面暗灰色(N3/0)、内面灰色(N4/0)で、148の外面灰色(N5/0)、内面灰色(N4/0)である。149は緑釉陶器の碗で、底部残存率は1/2である。調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は灰白色(N7/1)で、釉薬が剥がれ素地の色が全体に認められる。150は青磁碗と考えられる。比熱のため色調が著しく変化している。底部残存率は1/4で、色調は内外面灰白色(7.5Y7/1)である。151～154は白磁の碗底部である。底部残存率は順に1/6、1/7、4/5、1/4である。色調は151が灰白色(5Y8/1)、152が外面灰白色(5Y8/1)、内面灰白色(5Y8/2)、153は内外面共灰白色(5Y8/1)、154は外面灰白色(7.5Y8/1)、内面灰白色(10Y7/1)である。155は青磁碗で底部残存率は1/4、色調は内外面オリープ灰色(2.5GY6/1)である。156は黒色土器底部で、底部の残存率は1/3である。調整は外面がナデ、内面ミガキで、色調は内外面共に黒色(2.5Y2/1)である。157は須恵器壺の底部で、底部残存率1/2である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。158・159は須恵器の鉢で、両者共に口縁残存率が1/10以下で内外面共にナデ調整である。色調は158・159共に内外面灰白色(N7/0)である。160は瓦質の羽釜である。調整は内外面共にハケ及びナデで、色調は内外面暗灰色(N3/1)である。161は須恵器甕で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面タタキ及びナデ、内面は同心円状の当具痕をナデ消す。色調は外面青灰色(5PB6/1)、内面灰色(N6/0)である。

## ②弥生時代

土坑 S K 78(第37図) 162は甕口縁部で、口縁残存率は1/6である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデで、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄橙色(10YR6/3)である。163～165は甕の底部で、底部残存率は順に1/3、4/5、完存である。163の調整は外面ハケ、内面不明で、色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面が灰白色(10YR8/2)である。164の調整は内外面共にハケで、底部には葉脈痕が認められる。色調は外面が灰白色(2.5YR8/2)、内面が灰白色(2.5Y8/1)である。165は、調整が外面ハケ、内面ナデ、色調は外面が黄灰色(2.5Y6/1)、内面が褐灰色(10YR5/1)である。166は壺の底部で、底部残存率は1/2である。調整は外面ミガキ、内面不明で、色調は外面が灰色(2.5Y6/1)、内面が灰黄色(2.5Y6/2)である。

土坑 S K 175(第37図) 167は弥生土器甕で、口縁残存率は1/4である。調整は外面がハケ、内



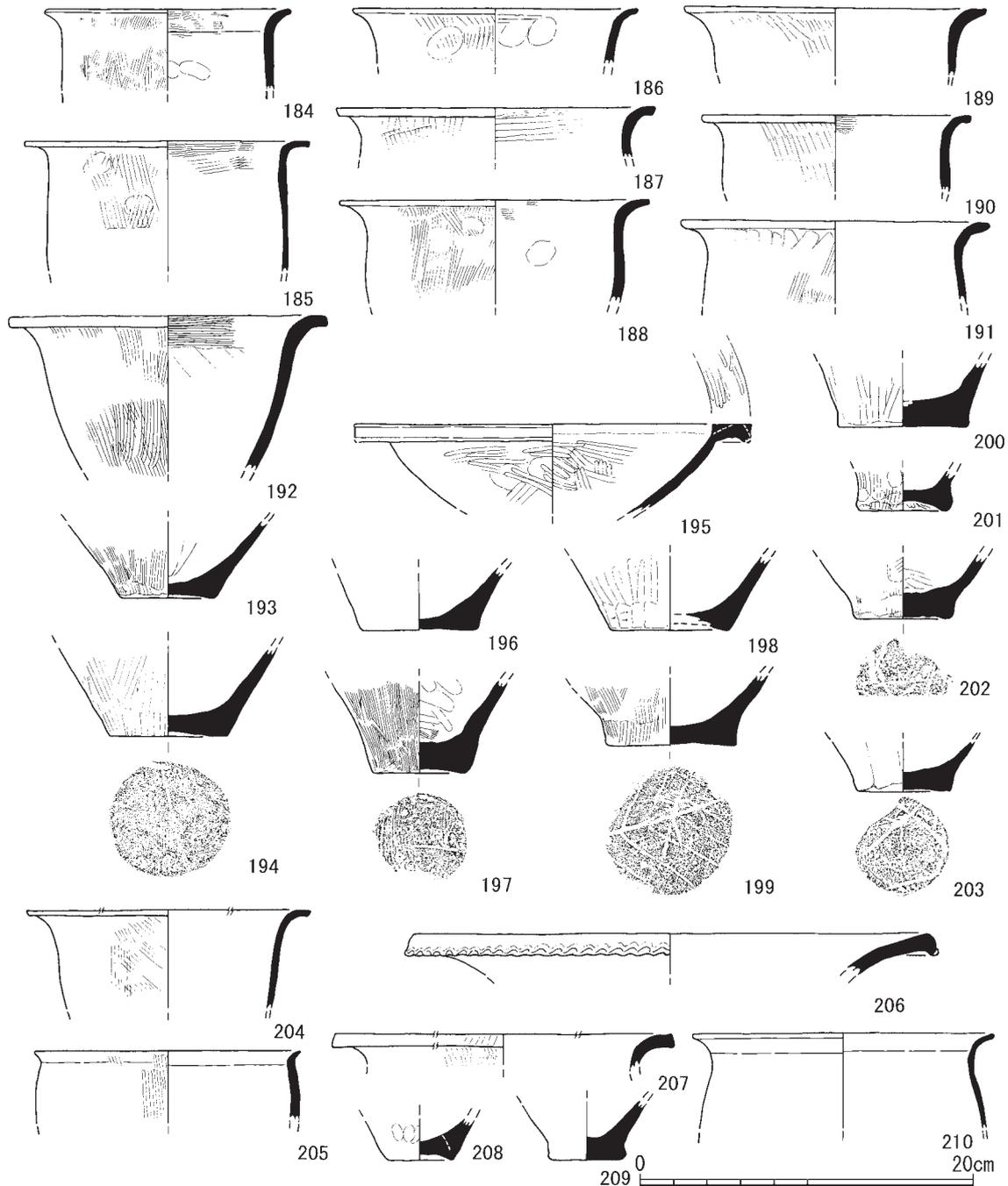
第37図 調子a1地区出土土器(6) 土坑

面は不明である。色調は外面がにぶい橙色(5YR7/4)、内面が浅黄色(2.5YR7/3)である。168は甕底部で、底部は完存している。調整は、内外面共にハケ、底部に葉脈痕が残り、色調は内外面共に暗灰色(N3/0)である。

土坑 S K 181(第37・38図) 169～172は壺口縁部で、口縁部残存率は順に1/2、1/4、1/4、1/4である。169は口縁内面に豆粒状の突起がつけられており、調整は内外面共にハケで、色調は外面が灰白色(2.5YR8/2)、内面が灰白色(7.5YR8/2)である。170の調整は外面がミガキ、内面がハケで、色調は内外面共ににぶい黄褐色(10YR7/3)である。171は調整が外面ハケ、内面不明、色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。172は調整が内外面共にハケ、色調は外面が橙色(7.5YR7/6)、内面が橙色(7.5YR6/6)である。

173は174の銅鐸形土製品の内部から出土した土製の舌である。舌上部は扁平につぶされ、その平坦部に片側から焼成前に穿孔されている。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。174は銅鐸形の土製品である。鈕の部分は発掘時の掘削によって破損している。胴部を形成した後、粘土を貼り付けヒレ部を作り出している。共伴遺物から畿内第Ⅲ様式の年代が与えられる。175・176は壺の口縁部で、口縁残存率は順に1/6、1/4である。175の調整は内外面共にハケ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)である。176の調整は外面がハケ及びミガキ、内面がハケ及びナデ、色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が灰黄色(2.5YR7/2)である。177～179は甕で、口縁残存率は順に1/6、1/8、1/6である。調整はいずれも内外面ハケで、色調は177の外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR6/2)、178は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)、179は内外面共に灰白色(2.5Y8/2)である。180～183は甕で、口縁残存率は順に1/8、1/10、1/4、1/4である。180の調整は内外面不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)内面灰白色(10YR8/1)である。181の調整は内外面ハケ、色調は内外面共に灰黄褐色(10YR6/2)である。182の調整は外面ハケ内面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/2)、内面灰白色(2.5Y8/1)である。183の調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面が橙色(5YR7/6)、内面がにぶい橙色(5YR7/4)である。

184～191は甕の口縁部で、口縁部残存率は順に1/6、1/4、1/8、1/8、1/8、1/10、1/6、1/4である。184～188・190の調整は外面ハケ、内面ハケ及びナデで、189・190は外面ハケ、内面は不明である。色調は184の外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、185は内外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、186は内外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、187は内外面灰白色(10YR8/2)、188は内外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、189は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、190は外面にぶい黄橙色(5YR6/4)、内面褐色(7.5Y5/1)、191は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。192は鉢で口縁残存率1/10以下である。内外面の調整はハケで、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。195は高杯で口縁残存率1/8である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面にぶい橙色(7.5YR7/3)である。193・194・196～203は土器の底部である。底部残存率は193・194・196・199・201が完存で、197は4/5、198が1/6、202が1/2、203が4/5である。194・197・199・202・203は底部に葉脈痕が残る。調整は193・194・199・200～202の外面はハケ、内面はナデである。196の調整は内外面共に不明である。197は外面ハケ、内面ハケ及



第38図 調子a1地区出土土器(7) 土坑・柱穴

びナデ、198は外面ケズリ、内面不明、203は内外面共にナデである。色調は193の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面灰白色(2.5YR8/1)、194の外面橙色(5YR6/6)、内面淡橙色(5YR8/4)、196の外面灰白色(10Y8/2)、内面淡黄橙色(7.5YR8/3)、197の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面浅黄色(2.5Y7/3)、198の内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、199の外面灰白色(2.5Y8/2)、内面灰白色(2.5Y8/1)、200は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面黒(2.5Y3/1)、201は外面灰白色(10Y8/2)、内面灰白色(2.5Y8/2)、202は外面褐灰色(10YR6/1)、内面褐灰色(2.5Y8/2)、203は外面にぶい橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(7.5Y5/1)である。

土坑 S K 192(第38図) 204は甕で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面にぶい橙色(5YR7/4)、内面明褐灰色(5YR7/2)である。

土坑 S K 200(第38図) 206は壺の口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ナデ、内面ハケ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。

柱穴 S P 199(第38図) 205は甕で口縁残存率は1/6である。調整は外面ハケ内面不明、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。207は甕で口縁残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/1)である。

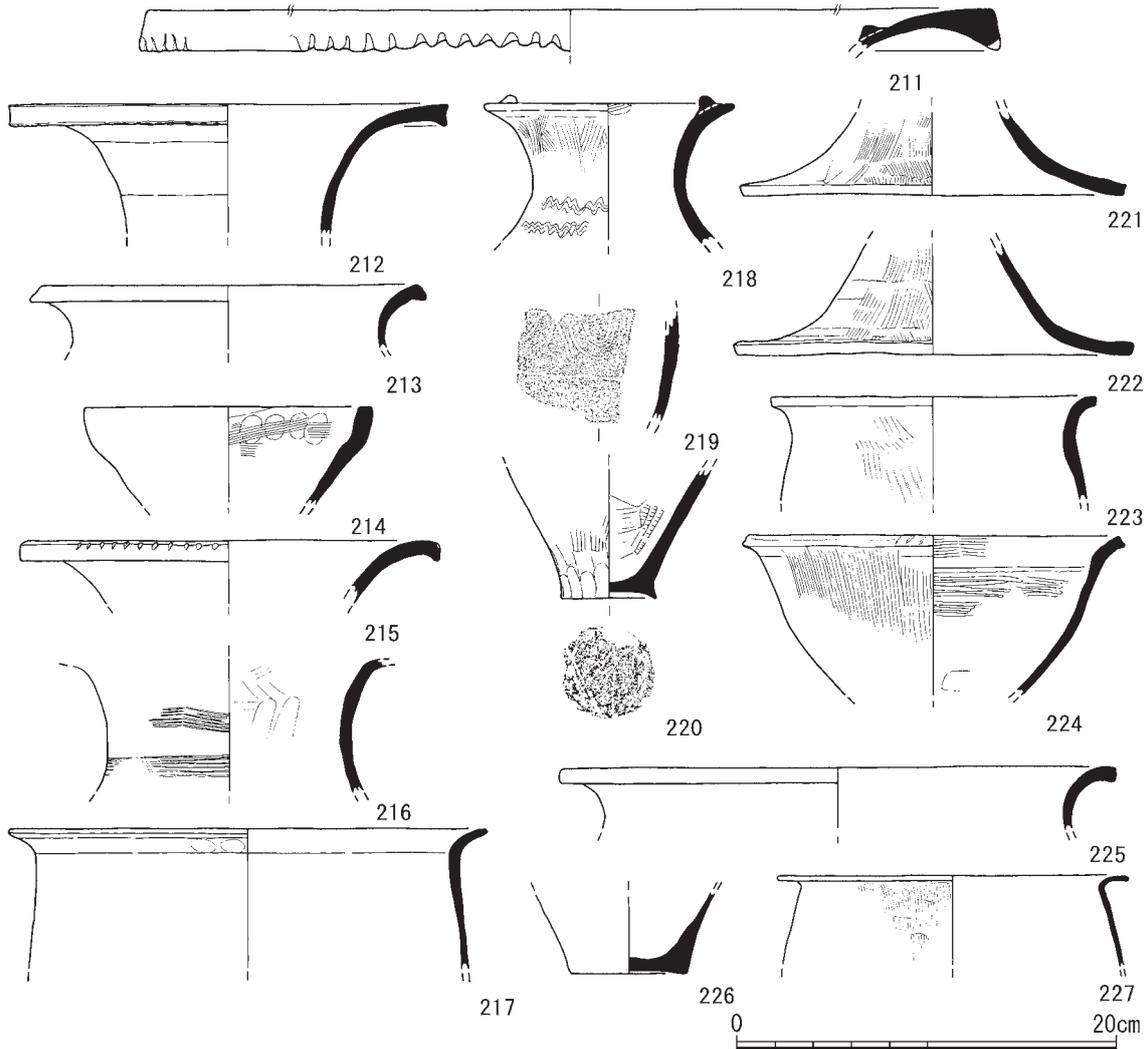
柱穴 S P 284(第38図) 209は完存の底部で、内外の調整は不明である。色調は外面褐灰色(10YR5/1)、内面黒褐色(10YR3/1)である。

柱穴 S P 285(第38図) 210は甕で口縁残存率は1/4である。調整は内外面不明、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面が浅黄橙色(10YR8/2)である。

柱穴 S P 286(第38図) 208は底部で、底部残存率は1/5である。調整は内外面ナデで、色調は外面橙色(2.5YR7/6)、内面灰白色(10YR8/1)である。

溝 S D 85(第39図) 212は壺の口縁で口縁残存率は1/6である。調整は内外面不明で、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。213は甕口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は内外不明、色調は外面橙色(5YR7/6)、内面橙色(7YR7/8)である。

溝 S D 172(第39図) 211は壺の口縁部で口縁残存率は1/6である。口縁部内面には瘤状の突起が作られている。調整は内外面不明、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/4)である。214は壺の口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は内外面灰白色(2.5Y8/2)である。215は壺の口縁部で、口縁残存率1/6である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。216は壺の頸部である。6条を単位とする櫛描直線文が2条施される。調整は内外面ナデ、色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/2)である。217は甕口縁である。残存率は1/4である。調整は内外面不明。218は小型の壺の口縁部で、口縁残存率は1/4である。口縁内面には2か所以上の瘤状の突起が設けられていた。頸部には3条を単位とする櫛描波状文が施される。調整は外面ハケ及びナデ、内面不明、色調外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/2)である。219は壺の体部で、櫛により施文される。調整は内外面ナデ、色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。220は完存の底部で、底部には葉脈痕が残る。調整はハケ及びナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(10YR4/1)である。221・222は蓋で、縁の残存率は順に1/8、1/6である。両者とも調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、221の色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面灰黄色(2.5Y7/2)、222は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面浅黄色(2.5Y7/3)である。223は甕で口縁残存率は1/8である。調整は外面ハケ内面ナデ、内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。224は鉢で、口縁残存率は1/5である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ハケ及びミガキである。225は甕口縁で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。226は甕の底部で、完存している。調整は内外面不明、色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。227は甕で口縁



第39図 調子a1地区出土土器(8) 溝

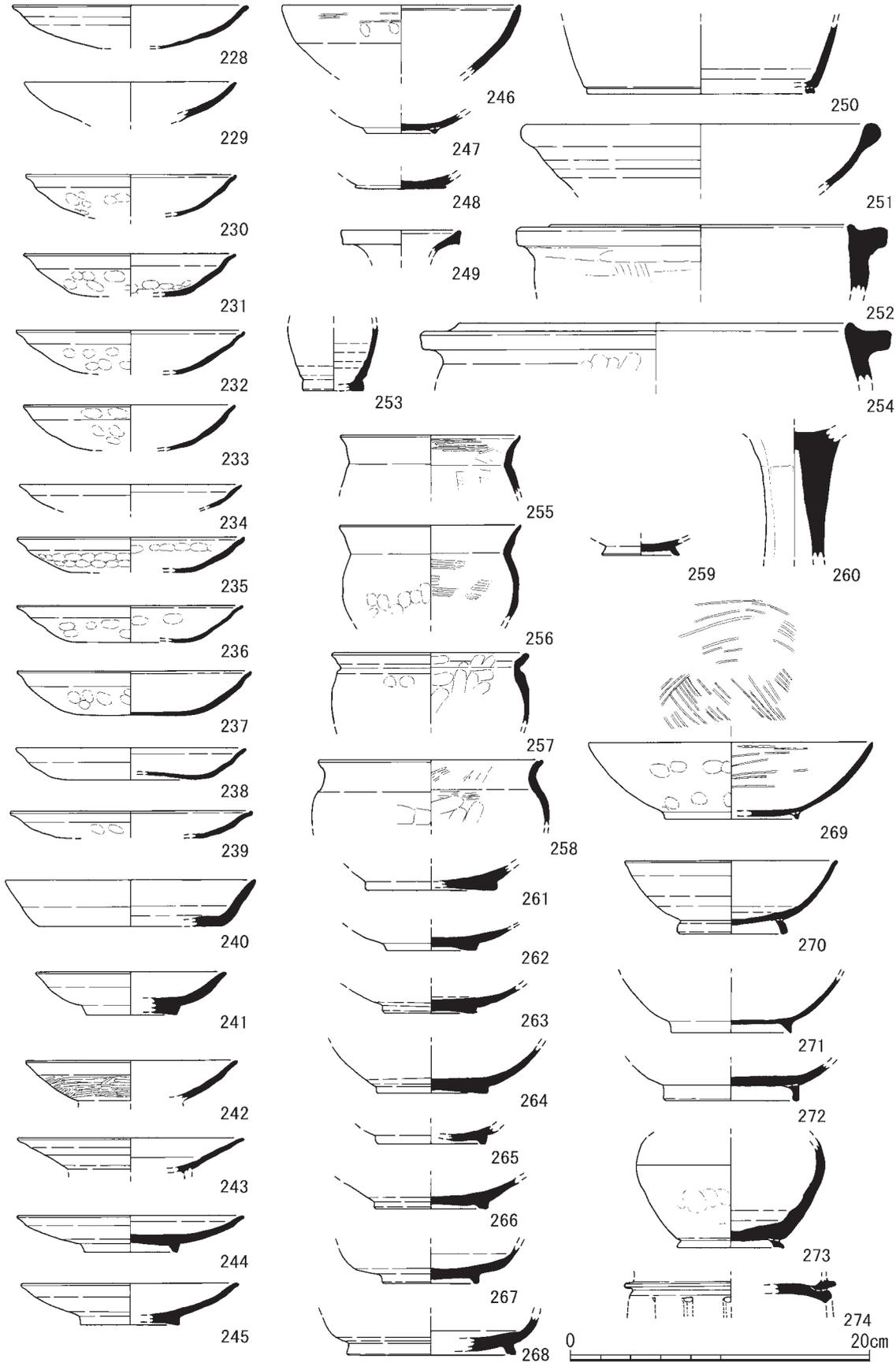
残存率は1/10以下である。調整は外面ハケ内面ナデ、色調は外面灰黄褐色(10YR5/2)、内面黄灰色(2.5Y5/1)である。

(2)長岡京跡右京946次(7ANRHK-7) a2地区

掘立柱建物跡S B01(第40図) 253はP 1から出土した。須恵器の壺で、底部残存率1/4である。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰白色(5Y8/1)である。

土坑S K16 248は須恵器碗の底部で、底部残存率1/3、糸切り痕が残る。調整は内外面ナデで、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。

土坑S K21(第40図) 228・229は土師器の皿である。228は口縁残存率1/3で、調整は内外面不明、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。229の口縁残存率は1/10で、内外面の調整は不明。色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面淡黄色(2.5Y8/4)である。246は瓦器碗で、口縁残存率1/3、調整は外面ミガキ、内面不明、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(2.5Y8/1)である。247は瓦器碗底部で、底部残存率は5/6、調整は内外面不明、色調外面灰色(N5/0)、内面灰白色(N7/0)である。249は須恵器小型壺の口縁部である。口縁残存率1/8、調整は内外面回転ナデ、色調は内外



第40図 調子a2地区出土土器(1) 遺構

面共に灰白色(N7/0)である。

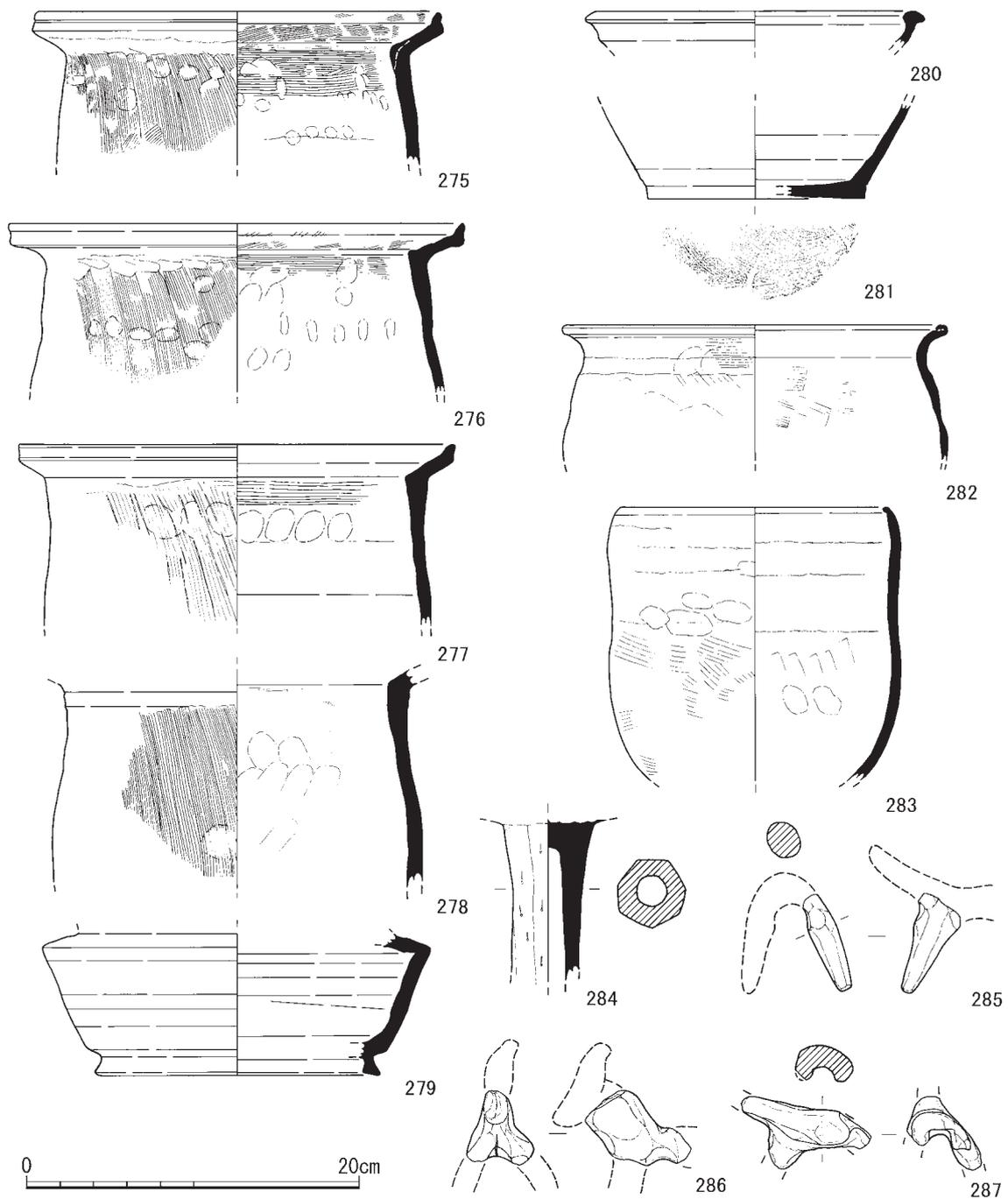
柵列 S A02(第40図) 250はP12から出土した須恵器杯Bで、底部残存率は1/10以下である。色調は内外面共に灰白色(7.5Y7/1)である。259はP17から出土した須恵器底部で、底部残存率1/6、調整は外面ヘラケズリ、内面ミガキ、色調は内外面共に灰白色である。

溝 S D18(第40図) 251は瓦質の鉢で、口縁残存率は1/8で、調整は内外面回転ナデ、色調は外面灰色(5Y4/1)、内面灰白色(10YR8/1)である。252・254は土師質の羽釜である。252の口縁残存率は1/10で、調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面は灰黄褐色(10YR4/2)である。254の口縁残存率は1/10で、内外面ナデ調整、色調は内外面にぶい橙色(7.5YR6/4)である。

溝 S D30(第40～42図) 230～239は土師器である。口縁部残存率はそれぞれ1/8、1/2、1/6、1/4、1/9、1/6、1/6、1/4、1/6、1/8である。内外面の調整は、確認できるものはナデ及び指オサエである。色調は230の外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい黄橙色(7.5YR7/4)、231の外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい橙色(10YR7/4)、232は内外面にぶい橙色(7.5YR5/4)、233は内外面とも橙色(7.5Y7/6)、234は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄褐色(7.5YR8/3)、235は内外面共に橙色(7.5YR7/6)、236は内外面共ににぶい橙色(7.5YR7/4)、237は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい黄褐色(10YR7/3)、238は外面橙色(7.5YR7/6)、内面橙色(5YR7/6)、239は内外面共に橙色(7.5YR7/6)である。240は須恵器の杯Aで、口縁残存率は1/8である。色調は内外面灰白色(N7/0)である。241は無釉陶器の皿で、口縁残存率1/4、調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は外面灰色(N6/0)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。242は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/4である。調整は外面ミガキ内面ナデ、色調は内外面灰色(N6/0)である。243は灰釉陶器皿で、口縁残存率は1/9である。調整は外面ケズリおよびナデ、内面ナデ、色調は内外面共に灰白色(2.5Y8/1)である。244は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/3である。調整は外面ケズリ内面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。245は無釉陶器の皿で、口縁残存率は1/4である。調整は内外面ケズリ、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。255は黒色土器の甕で、口縁残存率1/8、調整は外面ナデ、内面ミガキ及びナデ、色調は外面灰褐色(7.5YR4/2)、内面暗灰色(N3/1)である。256は黒色土器の甕で、口縁残存率1/10以下である。調整は外面ナデ、内面ナデ及びハケ、色調は外面にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面暗灰色(N3/1)である。257は土師器の甕で、口縁残存率1/6である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰褐色(7.5YR5/2)である。258は土師器甕、口縁残存率1/6である。調整は外面ナデ、内面ハケ及びナデ、色調は外面褐灰色(10YR4/1)、内面黒褐色(10YR3/1)である。260は土師器高杯の脚部である。調整は外面ケズリ、内面ナデである。色調は外面にぶい黄褐色(10YR7/4)、内面黒褐色(10YR3/1)で、胎土に雲母を多く含む。

261は軟質の緑釉陶器の底部で、底部残存率1/4である。調整不明で、釉薬の表面は剥落している。色調は内外面とも灰白色(2.5Y8/2)である。262は底部が完存する緑釉陶器で、調整は不明、色調は外面がオリーブ黄色(7.5Y6/3)、内面にぶい黄褐色(10YR7/3)である。263は無釉陶器底部で、残存率は1/3である。内外面調整はナデ、色調は外面灰色(N6/0)、内面青灰色(5PB6/1)で

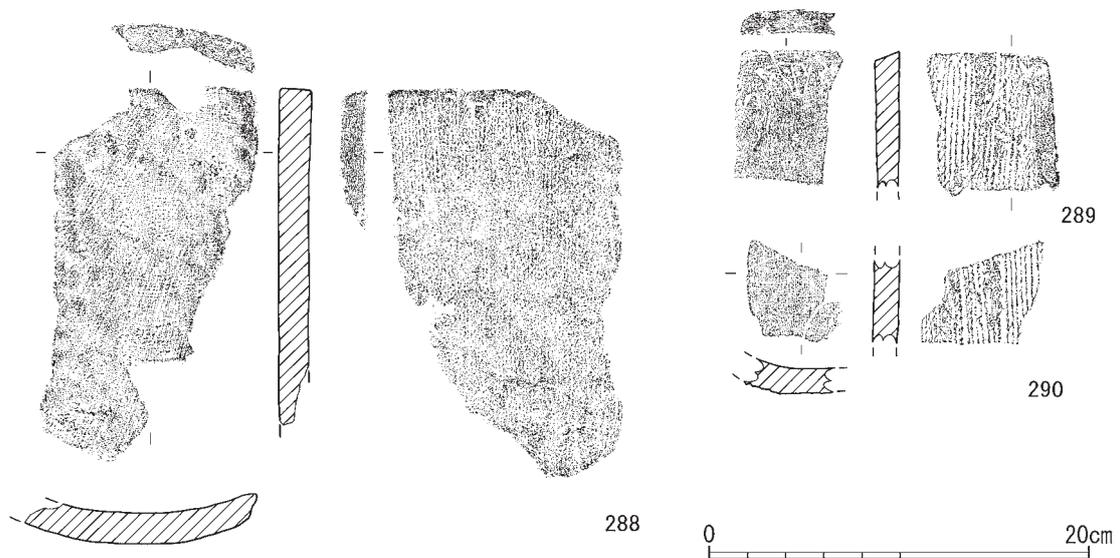
ある。264は底部が完存した無釉陶器である。調整は内外面ケズリ、色調は内面灰白色(2.5Y8/1)、内面灰色(N6/0)である。265は軟質の緑釉陶器で、底部残存率が1/6である。調整は内外面ミガキ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(5Y7/1)である。266は緑釉陶器で、底部残存率が3/4である。調整は外面ケズリ、内面不明、色調は内外面灰白色(2.5Y8/2)である。267は無釉陶器底部で、残存率は3/4である。内外面調整はミガキ、色調は外面灰色(5Y6/1)、内面灰黄色(2.5Y7/2)である。268は須恵器の底部で、残存率は1/4である。調整は外面ナデおよびケズリ、内面ナデ、色調は外面灰色(N6/1)、内面灰色(7.5Y6/1)である。269は黒色土器の椀で、口縁残



第41図 調子a2地区出土土器(2) 溝SD30

存率1/6である。調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は外面黒色(N1.5/0)、内面黒褐色(2.5Y3/1)である。270は灰釉陶器の椀で、口縁残存率2/5である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(2.5Y8/1)である。271は土師器椀で、底部残存率1/4である。調整は内外面ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面は暗灰色(N3/0)である。272は灰釉陶器で、底部残存率1/2である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N7/0)である。273は須恵器の壺で、底部残存率は1/4である。調整は外面ケズリ及びナデ、内面ナデ、色調は外面黄灰色(2.5Y6/1)、内面灰白色(10YR7/1)である。274は須恵器の円面硯である。

275～278は土師器の甕である。275～277の口縁残存率はそれぞれ1/6、1/4、1/3である。内外面の調整はハケ及びナデある。275～277の色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、278は内外面にぶい黄橙色(7.5YR6/6)である。279は灰釉陶器の平瓶で、底部残存率1/6である。調整は外面ナデ及びケズリ、内面ナデ、色調は内外面灰白色(5Y7/1)である。280は須恵器の鉢で、口縁残存率は1/10以下、調整は内外面ともナデ、色調は内外面とも灰白色(N7/0)である。281は須恵器底部で、底部には糸切痕が残る。底部残存率1/3、調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(N8/0)である。282は土師器甕で、口縁残存率1/3である。調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。283は土師質の土器で、口縁残存率は1/4である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。284は土師器の高杯脚部である。調整は外面ケズリ、内面ナデ、色調は外面橙色(7.5YR7/6)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。285～287は土馬である。285は右後ろ足の破片で色調は橙色(7.5YR6/6)である。286は頸部と前足付け根部分で、色調は橙色(7.5YR7/6)である。287は後ろ足付け根及び尾の部分で、色調は浅黄橙色(10YR8/3)である。288～290は平瓦である。凹面には布目、凸面には縄目が認められ、端部はヘラで調整される。色調は288の凹面は褐灰色(7.5YR6/1)、凸面は灰色(N5/0)、289は両面共に灰白色(2.5Y7/1)、290は両面共に灰黄色(2.5Y7/2)

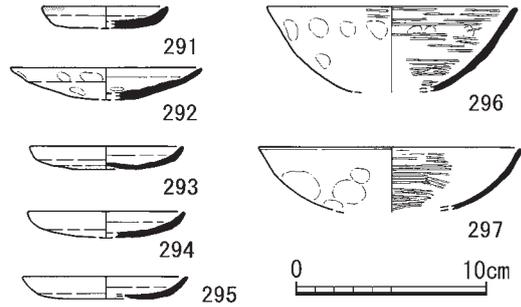


第42図 調子a2地区出土瓦 溝S D 30

である。

(3)長岡京跡右京第946次(7ANRHK-7) a3  
地区

井戸 S E 01 (第43図) 291は土師器皿で残存率1/3、口縁端部にススが付着する。調整は内外面ナデ、色調は内外面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。



第43図 調子a3地区出土土器

溝 S D 02 (第43図) 292～294は土師器皿で

ある。292の口縁残存率は1/3、調整は外面ナデ及び指オサエ、内面はナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。293は口縁残存率1/6、調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR6/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。294は口縁残存率1/4、調整は内外面ナデ、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面は浅黄橙色(7.5YR8/4)である。296・297は瓦器碗である。296は口縁残存率1/5、調整は内外面ミガキ、色調は外面灰色(N5/0)、内面灰色(N4/0)である。297は口縁残存率1/10以下、調整は外面ナデ、内面ミガキ、色調は内外面共に灰色(N4/1)である。

溝 S D 03 (第43図) 295は土師器皿で、口縁残存率1/2、調整は外面不明、内面ナデ、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

(4)長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8) a4-1地区

①中世(第44図)

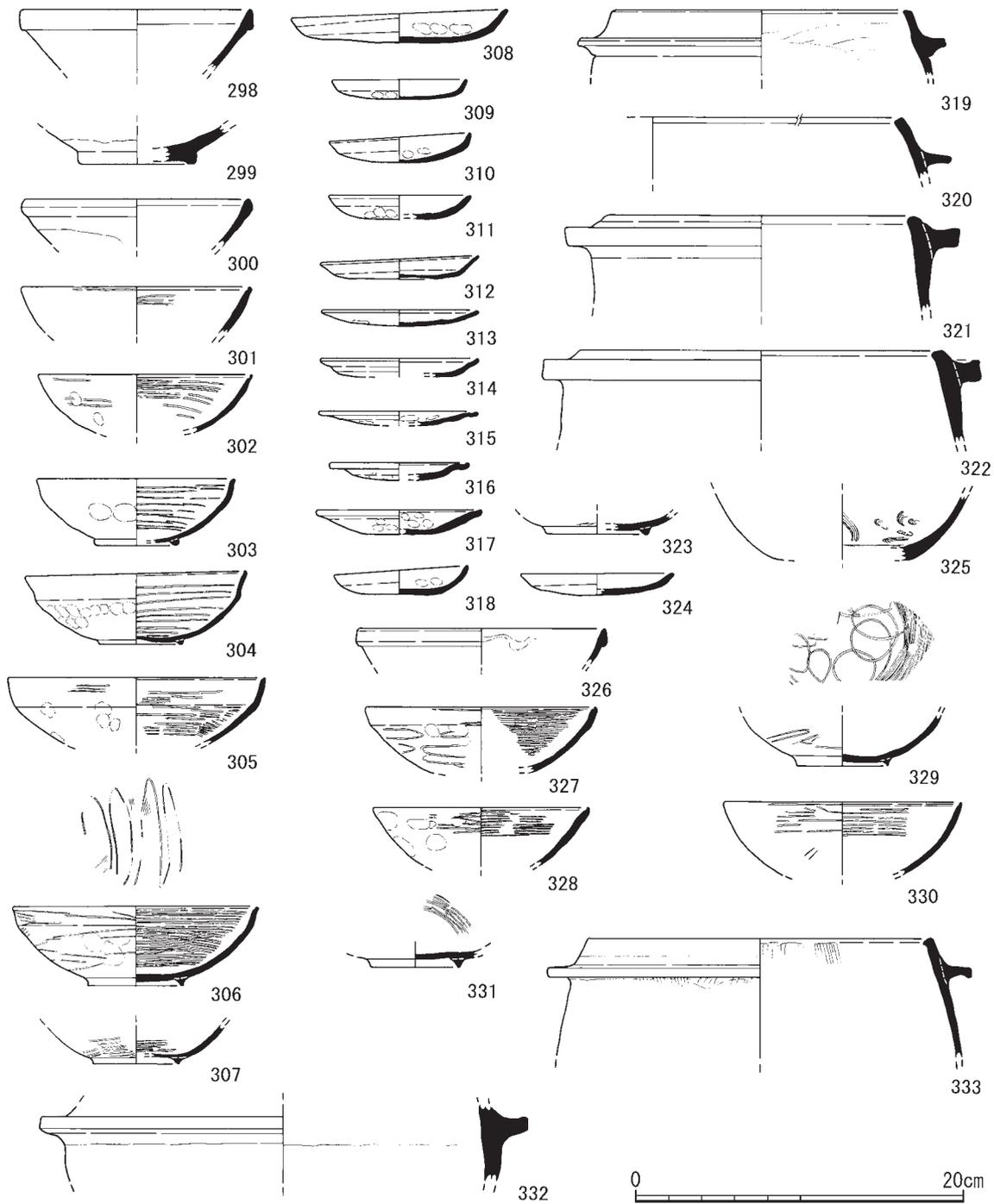
井戸 S E 553 298は白磁碗口縁部で、口縁残存率は1/8である。299は白磁碗底部で、底部残存率は1/3である。

土坑 S K 356 300は玉縁口縁を持つ白磁碗で、口縁残存率は1/10以下である。305～307は瓦器碗である。口縁残存率は305が1/6、306が1/4、底部残存率は306が1/3、307が9/10である。305と307については接点がないが同一個体の可能性がある。333は土師質の羽釜で、口縁残存率1/10以下で、調整は内外面ともハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰白色(10YR8/3)である。

土坑 S K 357 327は瓦器碗で、口縁残存率は1/6である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面暗灰色(N3/0)である。329は瓦器碗で、底部の残存率は1/3である。調整は内外面ミガキ、色調は内外面灰色(N4/0)である。332は土師質の羽釜である。内外面ナデ調整で、外面の色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)、内面は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

土坑 S K 358 324は土師器の皿である。口縁残存率は1/4で、内外面共にナデ調整であるが、底部にはヘラ状の工具痕が残る。表面の色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)～褐色(10YR5/1)、内面は黒色(10YR2/1)～褐色(10YR4/1)を呈する。

土坑 S K 359 318は土師器皿である。口縁残存率は3/4で、調整は外面ナデ、内面ナデ及び指オサエである。色調は内外面共ににぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。328～331は瓦器碗で、328・330の口縁残存率は1/4、1/8である。調整は両者とも内外面ミガキ、色調は両者とも灰色(N4/0)である。329・331の底部残存率は1/4、1/10以下で、調整はミガキ、色調は329が内外面



第44図 調子a4-1地区出土土器(1) 遺構

とも暗灰色(N3/0)、331が外面灰色(N4/0)である。

柱穴 S P 417 308は土師器皿で、口縁残存率4/5で、調整は内外面ナデ、色調は外面がにぶい橙色(7.5Y7/4)、内面がにぶい橙色(7.5Y7/3)である。

柱穴 S P 352 309・310は土師器皿で、口縁残存率は両者とも9/10で、内外面の色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)である。

柱穴 S P 425 301は瓦器碗口縁部で口縁残存率は1/10以下である。調整は外面不明、内面ミ

ガキ、色調は暗灰色(N3/1)である。

柱穴 S P 420 311は土師器皿で1/4の口縁が残存し、色調は内外面共に浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。

柱穴 S P 458 323は黒色土器碗の底部で、外面にはミガキ調整が残る。内外面の色調は黒褐色(2.5YR2/1)を呈する。底部残存率は1/4である。

柱穴 S P 467 303は瓦器碗で、残存率1/2、内外面共に暗灰色(N3/1)を呈する。315は土師器皿で、口縁部残存率は4/5で、内面はにぶい橙色(7.5YR5/3)、外面はにぶい橙色(7.5YR5/2)である。

柱穴 S P 437 320は土師器の羽釜片である。口縁残存率は1/10以下で径が復元できない。色調は内外面共ににぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。

柱穴 S P 496 325は青磁碗体部である。色調は灰オリーブ色(7.5Y5/2)を呈する。

柱穴 S P 499 316は土師器皿で、残存率は1/4、内外面は灰白色(10YR8/2)を呈する。胎土には赤色斑粒石が含まれる。317は土師器皿で、残存率1/5、内外面は灰白色(10YR8/2)を呈する。

柱穴 S P 469 304は瓦器碗で残存率9/10である。

柱穴 S P 487 312～315は土師器皿である。312の残存率は1/3、内外面は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。313の残存率は1/10以下、内外面は灰白色(7.5YR8/3)を呈する。314の残存率は1/3、内外面は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。315の残存率は1/4、内外面は灰白色(10YR8/2)である。

柱穴 S P 644 302は瓦器碗で、口縁残存率が1/7、調整は内外面ミガキ、色調は内外面共に灰色(N4/1)を呈する。

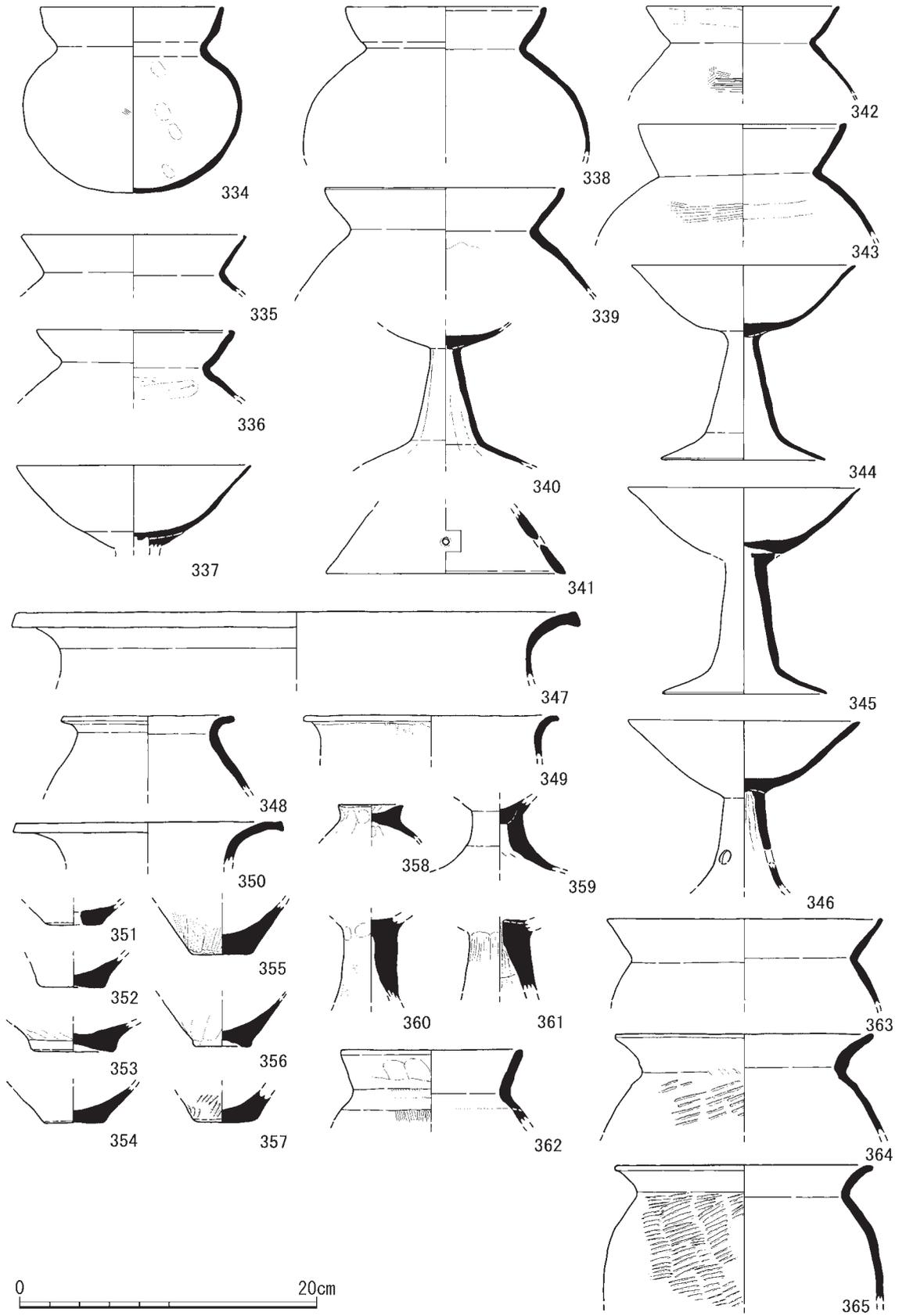
柱穴 S P 686 321は土師質の羽釜である。残存率は1/10以下、調整は内外面不明、色調は外面がにぶい赤褐色(5YR5/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。

柱穴 S P 691 322は土師質の羽釜である。残存率は1/10以下、内外面共にナデ調整、外面はにぶい褐色(7.5YR5/4)、内面はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。

溝 S D 554 319は瓦質の羽釜である。口縁残存率は1/6で、内外面共にナデ調整、色調は外面灰色(7.5Y4/1)、内面灰色(N4/1)を呈する。

## ②古墳・弥生時代

竪穴式住居跡 S H 561(第45図) 334は小型の土師器壺で、口縁残存率は1/4、調整は外面ハケ及びナデ、内面は指オサエ、ナデである。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)及び黒褐色(2.5Y2/1)、内面は黄灰色(2.5Y5/1)及びにぶい黄灰色(10YR6/4)を呈している。335は土師器の甕口縁部で、口縁残存率は1/4、内外面の調整は表面剝落のため不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。336は土師器甕口縁部で、口縁残存率3/4、調整は外面ナデ、内面ケズリである。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)及び褐灰色(10YR6/1)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/2)及び黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。337は土師器高杯の杯部で、口縁は完存し、内外面共にナデ調整である。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面は浅黄橙色(10TR2/1)である。338は土師器の甕である。口縁部残存率は1/3で、調整は口縁内外面はナデ、体部は不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面は灰白色(10YR8/1)である。339は土



第45図 調子a4-1地区出土土器(2) 竪穴式住居跡

師器の甕で、口縁残存率1/8で調整は不明である。色調は外面灰白色(2.5Y5/1)、内面黄灰色(2.5Y4/1)である。340は土師器高杯である。調整は不明、色調は内外面灰白色である。341は土師器器台の脚部で、脚端部残存率が1/10以下である。穿孔が施されており、内外面の調整は不明である。色調は外面黄灰色(2.5Y5/1)、内面黄灰色(2.5Y4/1)である。342は土師器甕で、口縁部の残存率3/4である。調整は外面ナデ及びハケ、内面は不明である。色調は、内外面浅黄橙(10YR8/3)である。343は土師器の甕で、口縁残存率は1/2である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ケズリ及びナデで、色調は内外面褐灰色(10YR6/1)である。344～346は土師器高杯である。344は杯部口縁の残存率は1/4である。調整は内外面共に不明で、色調は外面淡黄橙色(10YR8/3)、内面は灰白色(2.5Y8/1)である。345は杯部口縁の残存率は4/5である。調整は内外面共にナデで、色調は外面にぶい赤橙色(10YR6/3)、内面はにぶい黄橙色(10Y7/2)である。346は杯部口縁の残存率は3/4である。調整は内外面共に不明で、色調は内外面淡黄橙色(10YR7/2)である。

竪穴式住居跡 S H562(第45図) 349は弥生土器甕口縁部で、口縁残存率1/10以下である。調整は外面ハケ、内面は不明である。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面黄灰色(2.5Y6/1)である。350は弥生土器壺口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。調整は内外面共にナデ、色調は外面黒色(N2/0)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。358は蓋形土器である。調整は内外面ナデ、色調は外面灰色(N4/1)、内面にぶい橙色(7.5YR7/4)である。359は高杯脚部である。調整は内外面とも不明で、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面灰色(7.5YR6/1)である。351は穿孔のある底部で、底部残存率は3/5である。調整は内外面不明で、色調は外面灰白色(2.5Y8/2)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。352～357は甕の底部である。352は底部残存率5/6、調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。353は底部の残存率5/6で、調整は内外面不明、色調は内外面灰白色(2.5Y8/1)である。354は底部の残存率1/2、内外面の調整不明、色調は内外面灰白色(2.5Y7/1)である。355の底部残存率は1/2、調整は外面ハケ、内面不明である。色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面灰色(N5/)である。356の底部は完存で、調整は外部ケズリ、内面不明である。色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。357は底部完存で、調整は外部タタキ後ナデ、内部ナデで、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面褐灰色(10YR4/1)である。360は高杯脚部である。調整は外面ハケ後ナデ、内面はナデ、色調は外面浅黄色(2.5Y7/3)、内面橙色(5YR6/6)である。362は S H562床面で検出した柱穴 S P 362で出土した土師器甕である。他の遺物と比べ新しいことから住居跡に共伴する可能性は低いと考えられる。口縁残存率は1/6で、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は内外面明赤褐色(5YR5/5)である。363～365は甕の口縁部から体部にかけての破片である。363の残存率は1/2、調整は外面ナデ、内面不明、色調は外面にぶい黄橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、胎土に含まれる砂粒は微細である。364の口縁残存率は1/4で、調整は外面タタキ、内面ナデ、色調は内外面共にぶい橙色(7.5YR7/3)である。365は口縁残存率1/6で、調整は外面ナデ及びタタキ、内面はハケ後ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄褐色(10YR5/4)である。

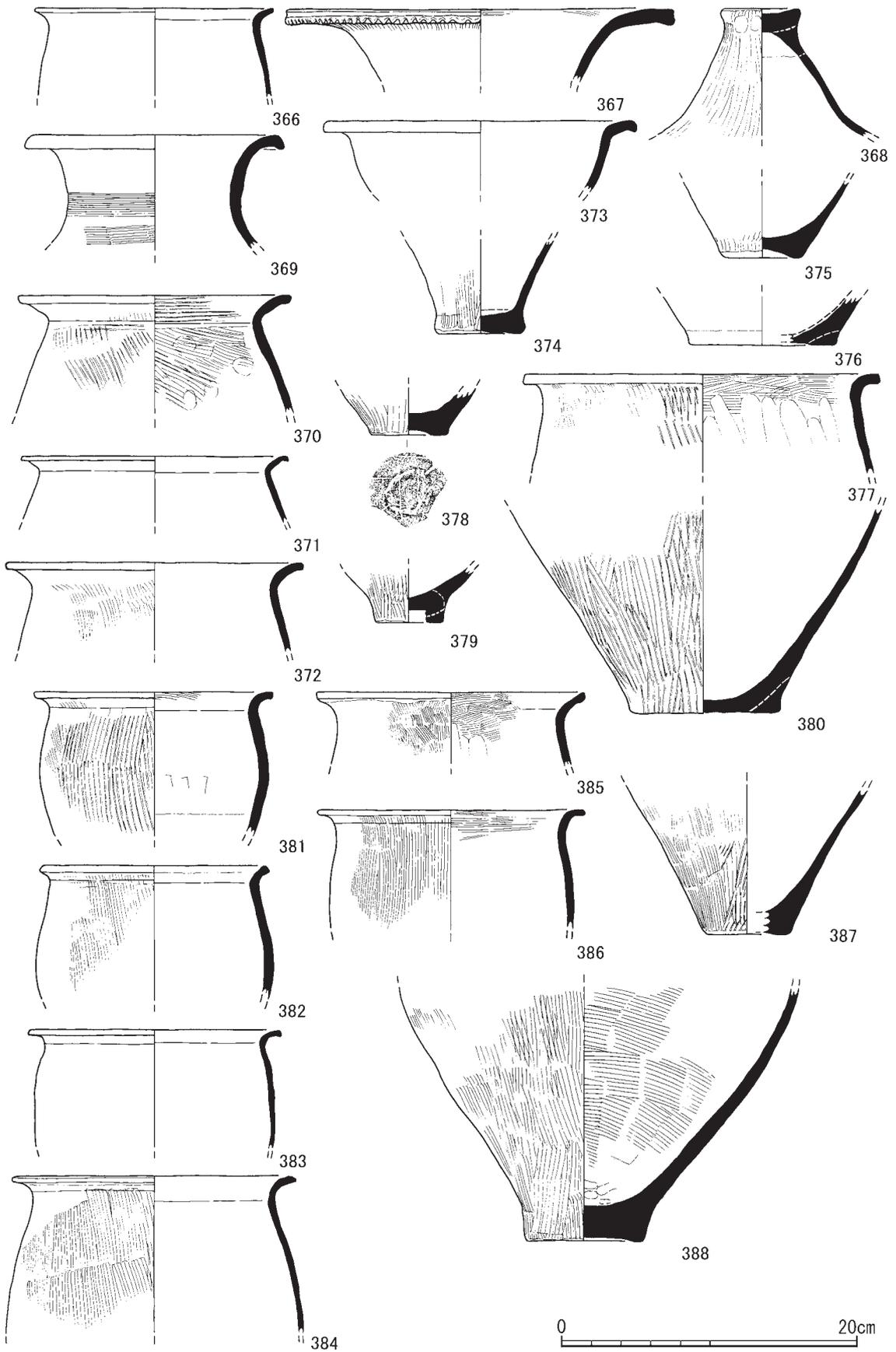
竪穴式住居跡 S H568(第45図) 347は弥生土器甕口縁部で、口縁残存率は1/10以下である。

調整は内外面不明で、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)、胎土には石英・長石・チャート・赤色斑粒が含まれる。348は甕で、口縁部残存率は1/8である。内外面の調整は不明で、色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面黄灰色(2.5Y5/1)、胎土には石英・長石が含まれる。361は土師器高杯脚である。上面で検出した竪穴式住居跡のものが混入したと考えられる。調整は不明で、色調は内外面共に灰白色(10YR8/2)、胎土に3mmの石英・長石・チャートを含む。

土坑 S K 556(第46図) 367は弥生土器壺口縁部で、口縁残存率1/4である。調整は内外面共にハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。368は蓋形土器である。調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデ、色調は内外面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。383は甕で口縁部残存率は1/6、調整は内外面共に不明、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑 S K 565(第46図) 366・370～372・374～377は弥生土器甕である。366の口縁残存率は1/4、調整は内外面共に不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面褐灰色(10YR4/1)である。370は残存率1/8、調整は内外面ハケ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面浅黄色(2.5Y7/3)である。371の口縁残存率は1/8、内外面の調整は不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。372は口縁残存率1/4、調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面灰白色(10YR8/1)である。374は甕の底部で、底部は完存である。調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面にぶい橙色(7.5YR7/3)である。375の底部は完存し、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(10YR4/3)である。376は底部残存率1/3で、調整は内外共に不明、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面褐灰色(10YR5/1)である。377は口縁残存率1/4、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)、胎土には石英・長石・赤色斑粒が含まれる。369は壺で口縁残存率1/6、頸部に2単位の櫛描直線紋が施される。調整は内外面共にハケ後ナデ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR5/4)、内面にぶい橙色(10YR7/3)である。調整は内外面共にナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面灰黄褐色(10YR4/2)である。

土坑 S K 566(第46図) 378～380・387は弥生土器底部である。378は底面に葉脈の圧痕が認められる。底部の残存率1/2、調整は外面ハケ内面不明、色調は外面黒色(10YR2/1)、内面灰白色(10YR7/1)である。379は底部がくぼみ高台状を呈する。底部の残存率は1/2、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面黒色(2.5Y2/1)、内面灰白色(2.5Y8/2)である。380はS K 565内出土破片と接合関係が認められる。底部の残存率4/5、調整は外面ハケ、内面ナデ、色調は外面浅黄色(2.5Y7/3)、内面浅黄橙色(10YR8/3)、である。381・382・384～386は甕である。381は底部残存率1/4、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面にぶい橙色(7.5YR6/3)である。381は口縁残存率1/6、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面浅黄橙色(10YR8/2)である。382は口縁残存率1/10以下、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面浅灰色(5Y4/1)である。384は口縁残存率1/6、調整は外面共にハケ、内面不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/3)である。385は口縁残存率1/8、調整は内外面共にハケ及びナデ、色調は外面にぶい



第46図 調子a4-1地区出土土器(3) 土坑

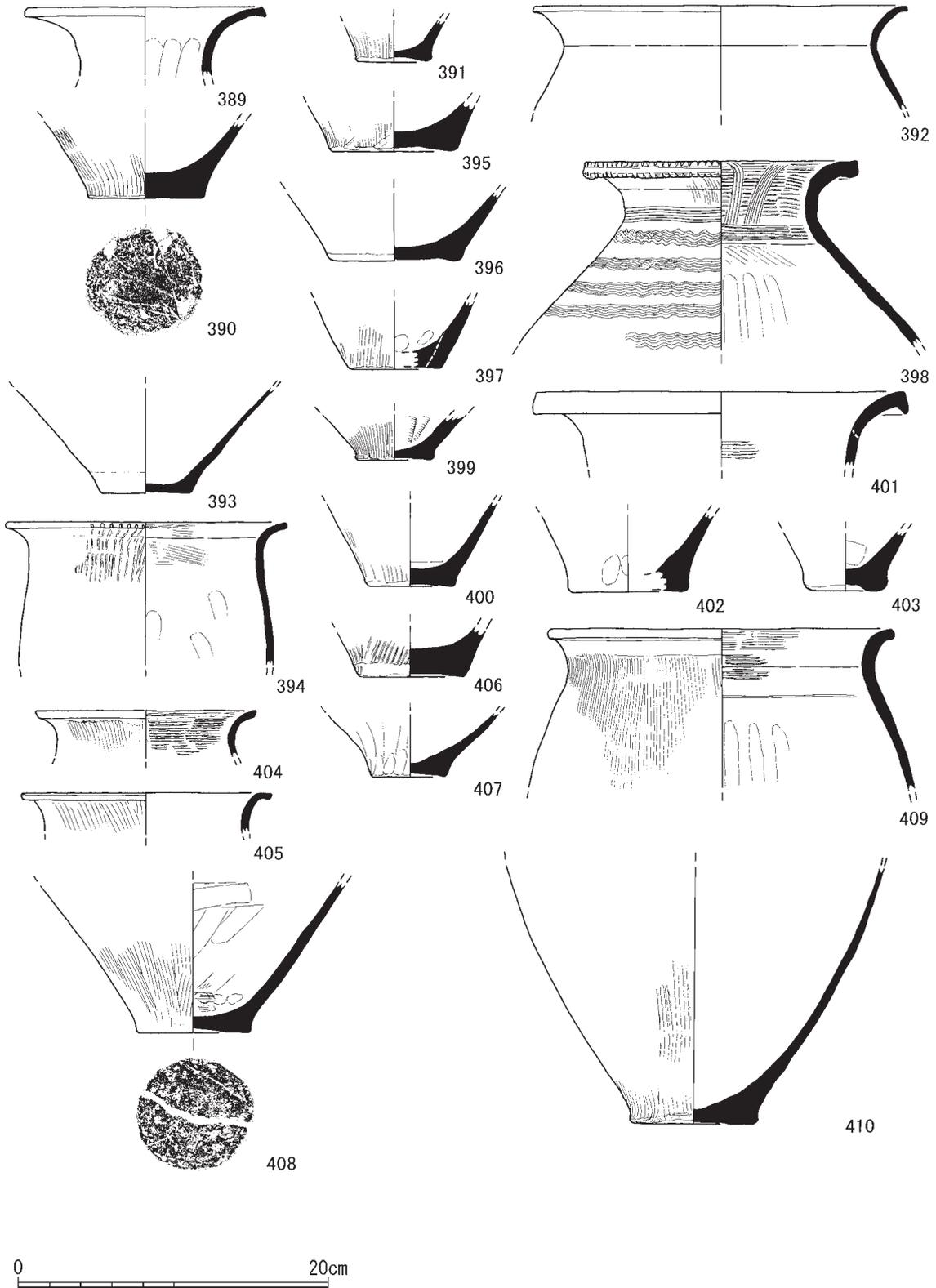
黄橙色(10YR6/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。386は口縁残存率1/8、調整は外面ハケ内面ハケ及びナデ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。

土坑 S K 567(第47図) 388・390・391は弥生土器底部である。388は底部が完存し、内外面の調整はハケ及びナデである。色調は外面が黄灰色(2.5Y4/1)、外面が灰黄色(2.5Y7/2)である。390は底面に葉脈圧痕が残されており、底部は完存している。調整は内外面ハケ、色調は内外面共にぶい黄橙色(10YR7/3)である。391は底部が完存し、外面内面共にハケ調整、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面暗灰色(N3/0)である。389は壺の口縁で、口縁残存率は3/4である。調整は内外面ナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR7/3)である。392は甕の口縁部で、口縁残存率は1/4である。調整は内外面不明、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。

土坑 S K 640(第47図) 393・395～397は弥生土器の底部である。393は底部残存率1/2、調整不明、色調は外面灰白色(10YR8/1)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。395は底部完存、内外面の調整は不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面灰白色(10YR8/1)である。396は底部完存、内外面の調整は不明、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。397は底部残存率1/2、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面にぶい橙(7.5Y7/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。394は甕の口縁部で、口縁の残存率は1/10以下、調整は内外面ハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。398は壺の口縁から体部にかけてで、口縁残存率5/6、調整はハケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色(7.5Y8/4)、内面褐灰色(7.5Y6/1)である。

土坑 S K 641(第47図) 399・400・402・403は弥生土器の底部である。399の底部残存率は1/4、調整は内外面共にハケ、色調は外面灰白色(10YR8/2)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。400の底部は完存で、調整は外面ハケ、内面は不明である。色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(10YR8/3)である。402は口縁残存率1/4、調整は内外面共に不明、色調は内外面浅黄橙色(10YR8/3)である。403は底部残存率1/2、調整は外面ナデ、内面不明で、色調は外面橙色(2.5YR7/6)、内面灰色(N4/0)である。401は壺で、口縁残存率1/6である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面灰白色(10YR8/2)である。404は甕の口縁で、残存率は1/4である。調整は内外面共にハケ、色調は外面灰黄褐色(10YR6/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/2)である。405は甕の口縁で、口縁残存率1/11、調整は外面ハケ及びナデ、内面ナデである。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が灰白色(10YR8/1)である。

土器埋納遺構 S X 614(第47図) 406～408・410は弥生土器の底部である。406は底部が完存し、調整は外面ナデ、内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/3)、浅黄橙色(10YR8/3)である。407は底部が完存し、調整は外面ナデ、内面不明、色調は浅黄橙色(10YR8/2)、内面褐灰色(7.5Y4/1)である。408は底部が完存し、葉脈圧痕が残る。調整は内外面ハケ、色調は外面橙色(2.5Y6/6)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)である。410は底部が完存し、調整は外面ハケ、内面不明、色調は外面橙色(5YR6/6)、内面灰白色(10YR8/1)である。409は甕で口縁は完存する。調整は内外面ハ



第47図 調子a4-1地区出土土器(4) 遺構

ケ及びナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。409は甕の口縁部で、口縁は完存、調整は内外面共ハケ及びナデ、色調は外面が浅黄橙色(10YR8/3)、内面灰白色(10YR8/2)である。

(5)長岡京跡右京第969次(7ANRHK-8) a4-2地区

①平安時代・中世(第48図)

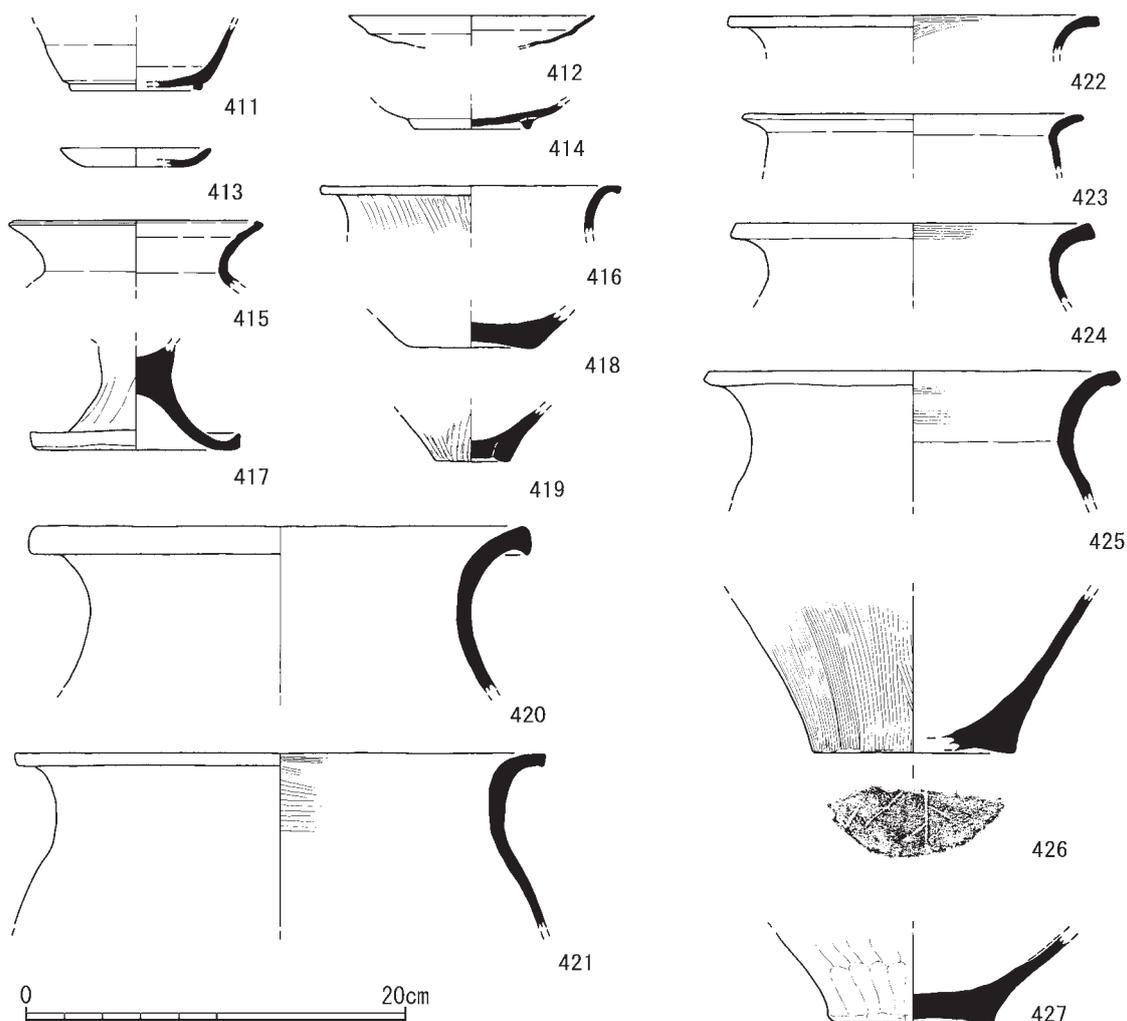
土坑S K 720 414は黒色土器の椀底部で底部完存率は7/8である。内外面の色調は暗灰色(N3/)である。415は須恵器甕の口縁部で、口縁残存率1/10以下である。調整は内外面共に回転ナデで、色調は外面灰色(N6/0)、内面灰白色(N7/0)である。

柱穴S P 714 413は瓦器の皿で、口縁残存率1/8である。内外面共に不明、色調は外面灰白色(10YR7/1)、内面暗灰色(N3/0)である。

包含層 411は須恵器の杯Bの底部である。底部残存率は1/3で調整は回転ナデ、色調は外面暗青灰色(5PB4/1)、内面灰色(N6/0)である。412は土師器皿で、口縁残存率1/4である。調整は内外面ナデ、色調は内外面灰白色(10YR8/2)である。

②弥生時代(第48図)

土坑S K 640 423は甕の口縁で、口縁残存率が1/6である。調整は不明、色調は外面が浅黄橙色(7.5YR8/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR7/3)である。424は口縁部で口縁残存率1/3で、調整



第48図 調子a4-2地区出土土器

は外面不明、内面ハケ、色調は外面浅黄橙色(7.5YR8/3)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。426は底部残存率1/3で底部に葉脈圧痕が残る。調整は外面ハケ内面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)である。427は底部が完存し、調整は内外面共にナデ、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面褐灰色(10YR6/1)である。

土坑 S K 724 425は甕の口縁で、口縁残存率は1/3である。調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面灰白色(2.5Y8/1)内面にぶい橙色(5YR7/4)である。

土坑 S K 727 419は完存の底部で、調整は外面ハケ、内面はナデ、色調は外面黒褐色(10YR3/1)、浅黄橙色(10YR8/4)である。

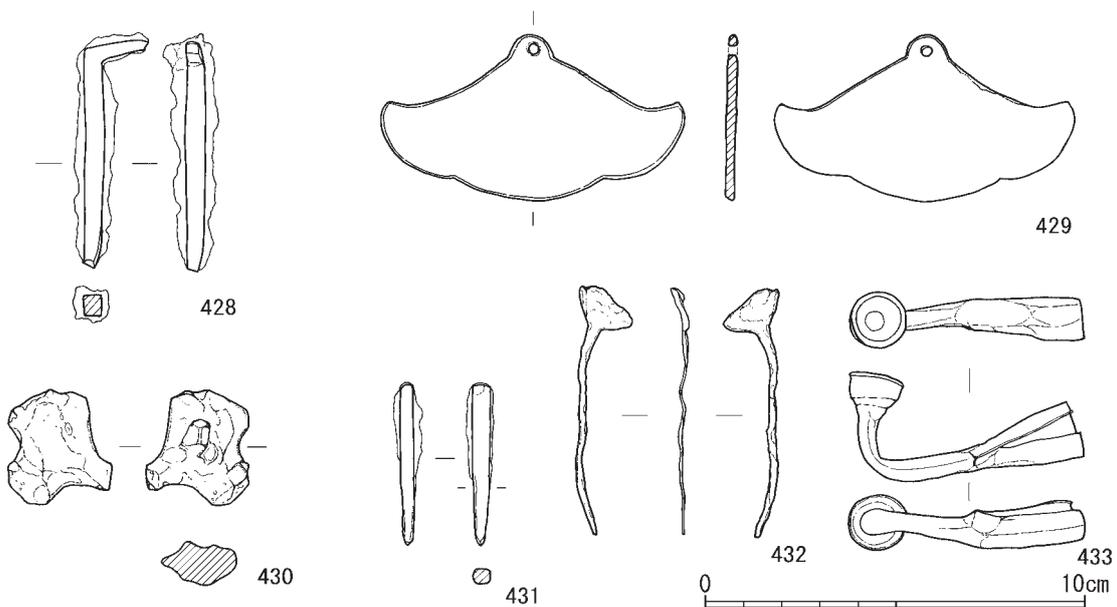
土坑 S K 735 420は壺口縁部で、残存率は1/4で調整は内外面不明、色調は外面にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。

S K 737 416は甕口縁で、残存率は1/6である。調整は外面ハケ、内面不明、色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)、灰白色(10YR8/1)である。418は完存の底部で、調整は内外面不明、色調は外面(10YR8/2)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)である。

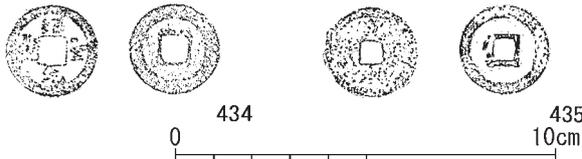
包含層 417は脚部で脚部端は完存している。調整は外面・内面共にナデ、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)、内面浅黄色(2.5Y7/4)である。421は甕口縁部で、残存率は1/10以下、調整は外面不明、内面ハケ、色調は外面灰白色(10YR7/2)、内面は褐色(10YR6/1)である。422は甕口縁部で残存率は1/10以下、調整は外面不明、内面ハケ、色調は内外面共に浅黄橙色(10YR8/4)である。

## 2) 金属製品(第49・50図)

428はa1地区 S P 106から出土した鉄釘である。断面は正方形で頂部を折り曲げることによって作り出している。431はa1地区 S T 201で出土した鉄釘である。墓壙内から出土していることから棺に用いられた可能性もあるが、この1点のみの出土であることと、棺が木を組み合わせで作られていることから構造的には釘を必要としないが棺蓋を止めていた可能性は否定できない。



第49図 調子地区出土金属製品



第50図 調子地区出土銭貨

429はa2地区東部包含層中から出土した青銅製の傘型を呈した板状の製品である。本来の遺構からは出土していないが、寺院の堂塔や、厨子につけられた風鐸に吊り下げられた風招と考えられる。432はa1地区西半部重機掘削で

出土した青銅製の薄板を茸状に切った製品である。429の風招と考え合わせると、仏像や寺院内の装飾品の一部として用いられていた可能性もある。

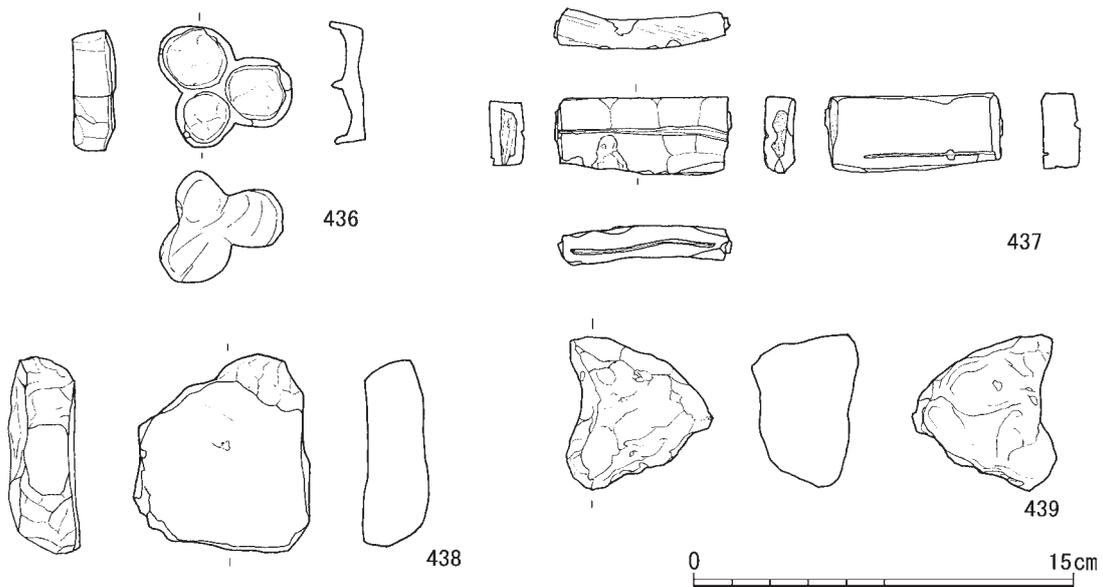
433はa4-2地区の包含層から出土した銅製のキセルの雁首である。形状から江戸時代前半のものと考えられる。430はa1地区S P 218出土の金属を溶解したときに生じる滓である。

434はa1地区包含層から出土した紹元聖寶である。435はa1地区重機掘削中に出土した寛永通宝である。

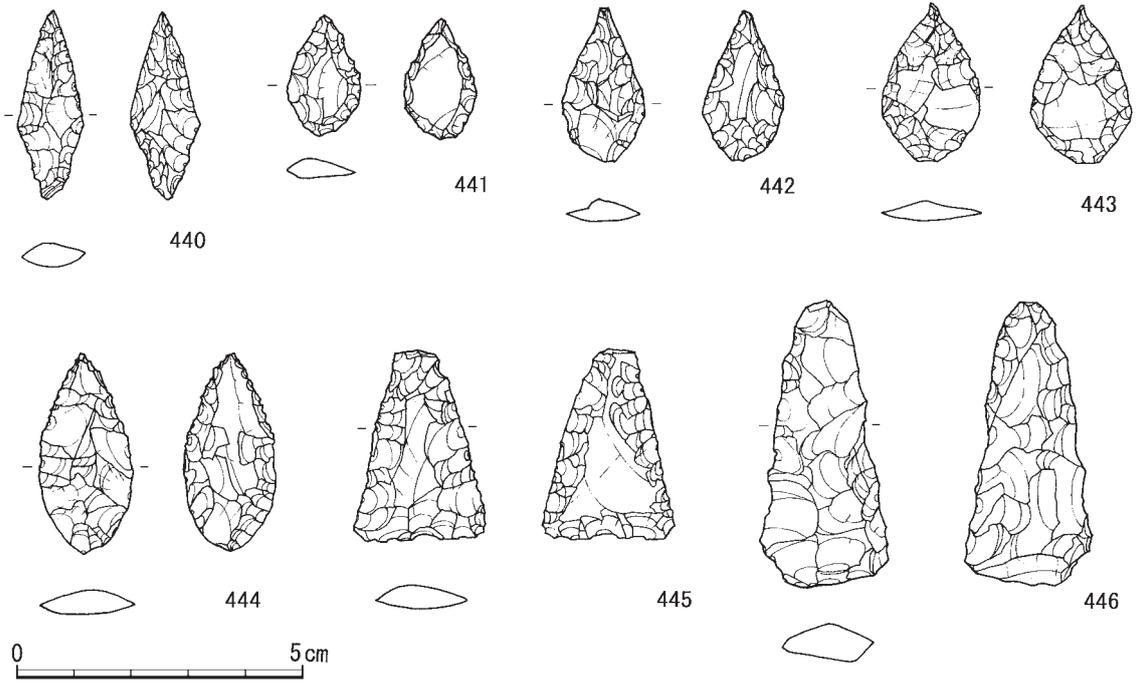
3) 石器・石製品(第51～53図)

436はa1地区S P 27出土の滑石製の紅皿である。1つの素材から作られているがちょうど3つの容器が接合したような形状を示す。素材の滑石は紅皿底部では全体が内彎しており、器のすわりがよいように、3つの角部が平らに加工されている。本来の形状を類推すると、石鍋の滑石が転用されたものと考えられる。437はa1地区包含層出土の滑石製品である。外湾した面には鑿跡が残り、煤も認められる。器表面には分割するためと考えられる線刻が残る。石鍋を転用した温石と考えられる。438はa4-1地区S P 354から出土した砂岩製の砥石である。439はa2地区S D 30から出土した凝灰岩の破片である。凝灰岩は長岡京跡京第968次調査でも発見されている。金属製品において寺院関連の遺物が出土していることから、堂塔の基壇の化粧石として用いられていたと考えられる。

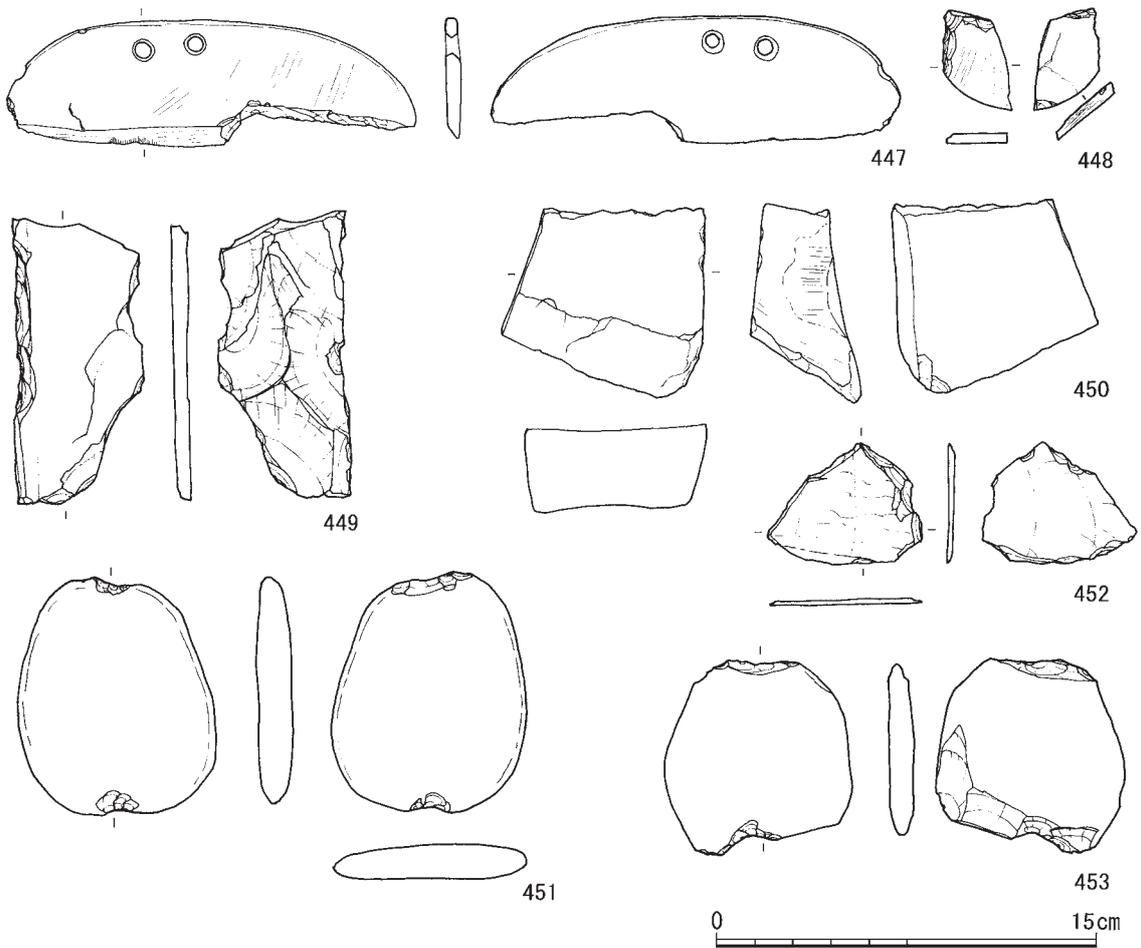
440～445はサヌカイト製の石鏃である。440・442はa4-1地区S K 565、441はa4-1地区S P



第51図 調子地区出土石製品(1)



第52図 調子地区石製品(2)



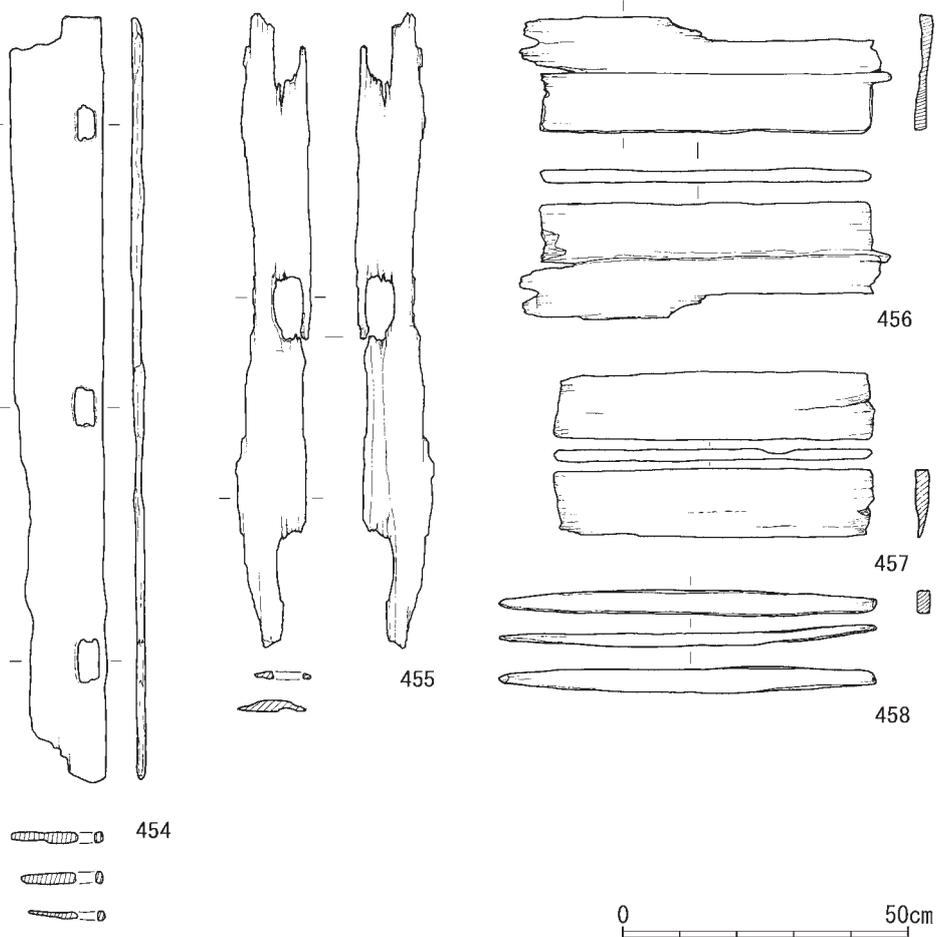
第53図 調子地区出土石製品(3)

618、443はa4-1地区 S P118、444はa4-2地区 S K724、445はa4-1地区 S K566から出土している。446はa4-1地区包含層から出土した。基部側には折れ面があり折れ面からの加工が認められる。石槍や石剣からの再利用の可能性や石鏃の未成品であると考えられる。

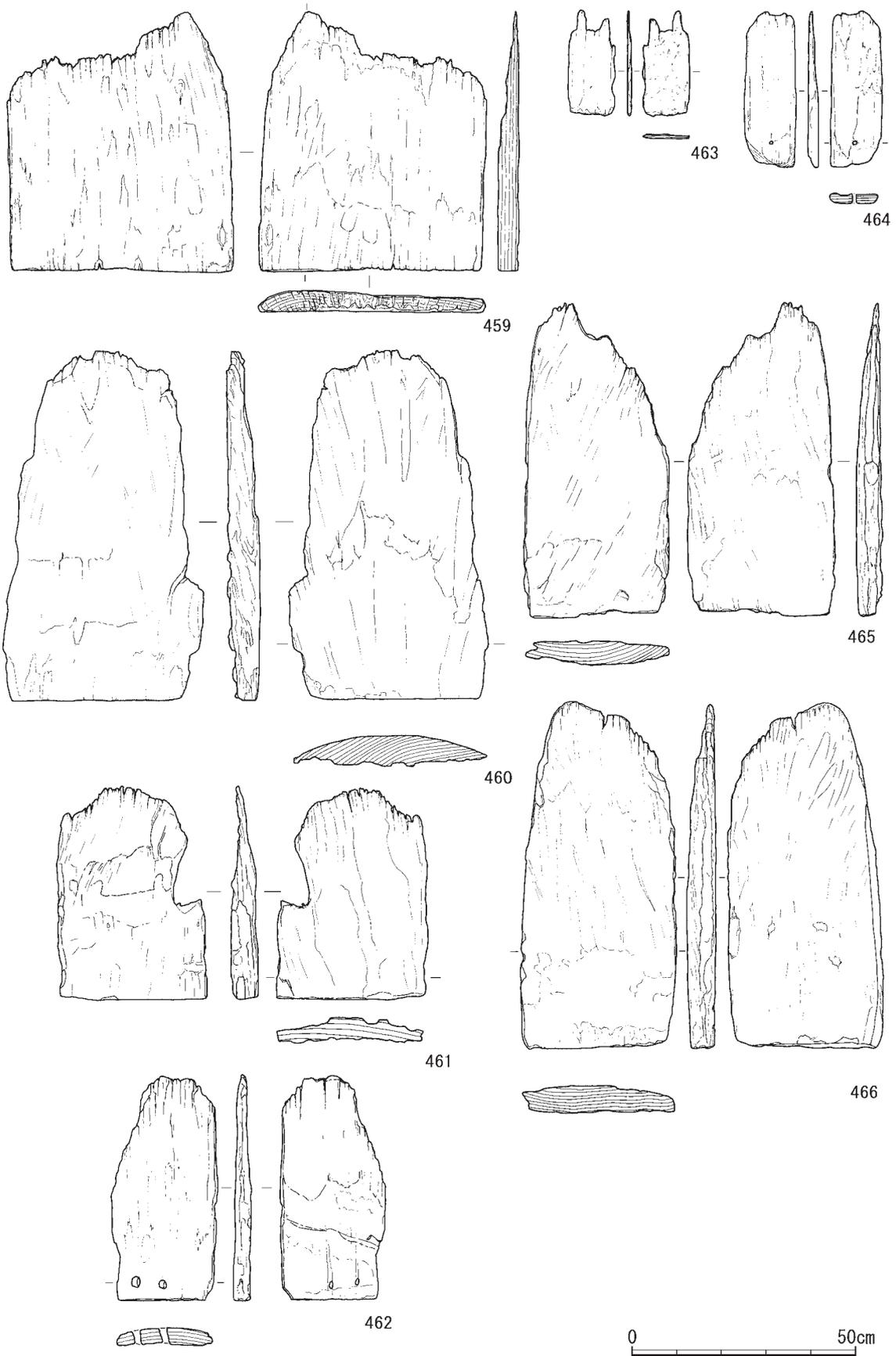
447はa4-1地区出土の粘板岩製石庖丁である。紐穴は2か所で、両面から穿孔されている。刃部側は破損しているが縁辺が摩滅しているため破損後も一定期間使用されたものと考えられる。刃部には使用による痕跡が認められる。448はa4-2地区包含層出土の研磨痕のある粘板岩製剥片である。図面左側の平面と側面に研磨痕が残る。449・452はa1地区 S K181出土の粘板岩製剥片である。450はa4-1地区 S K565から出土した砂岩製の砥石である。451・453はa4-1地区 S K640出土の円礫を利用した石錘である。

#### 4) 木製品

**木棺墓 S T 201 (第54図)** 454は木棺東側板である。底板を支えた棧が差し込まれた柄穴が3か所認められる。上部が腐食のため棺の高さは復元できない。455は木棺西側板である。腐食が著しいが3か所の柄穴が確認できる。456は木棺北側小口板である。457は南側小口板である。458は底板を補強するための棧である。柄穴のうち中央に位置する場所に対応する形で検出できた。他の棧及び底板は痕跡のみが確認でき、取り上げることができなかった。

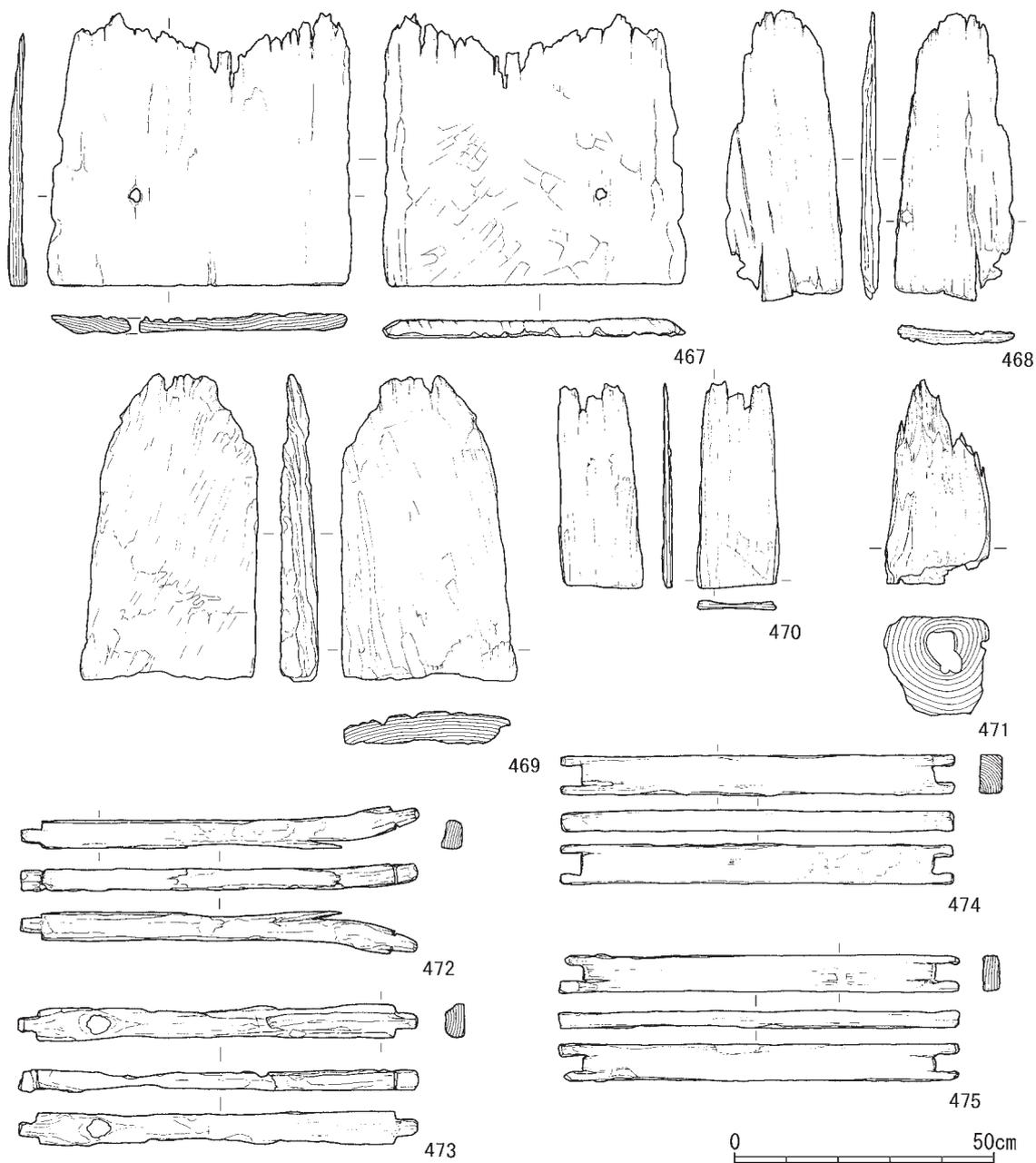


第54図 調子a1地区出土木製品(1) 木棺墓 S T 201木棺材



第55図 調子a1地区出土木製品(2) 井戸SE244部材

井戸 S E 244 (第55・56図) 459は井戸枠北面西側の板材である。465は井戸枠北面東側の板材である。460は井戸枠東面南側の板材である。461は井戸枠東面北側の板材である。462は井戸枠西面中央の板材である。463は井戸枠東面東側の板の裏込め側で出土した板材である。464は井戸枠西面北側の板である。466は井戸枠南面東側の板である。467は井戸枠南面西側の板材である。468は井戸枠西壁南側の板材である。469は井戸枠西壁北側の板材である。470は井戸枠東壁北側の板材と裏込めの間から出土した。472は南側の横棧である。473は北側の横棧である。474は東側の横棧である。475は西側の横棧である。471は井戸枠南側の掘形内から出土した両端に刳り込みのある棒状の木製品である。



第56図 調子a1地区出土木製品(3) 井戸 S E 244部材ほか

## 5. まとめ

今回の調子a地区では弥生時代中期から近世までの遺構を検出することができた。時代を追って遺構の特徴をまとめて行きたい。

**弥生時代** 調子a地区の南東部分に安定した遺構面が存在した。この地域の北西側は古墳時代後期以後に流路があったと考えられる。調子のb地区(未報告)の状況と考え合わせると本来は北東方向にも弥生時代以前に形成された地層が存在していたものと考えられる。調子地区一帯は、地形分類上自然堤防とされている。その自然堤防の形成時期は弥生時代中期以前と位置でづけることができる。

竪穴式住居跡 S H702・568を2基検出しているが、b地区含め他に検出はできなかった。また、一見方形周溝墓の溝の残欠であると考えられる平面形を持つ溝状の遺構が存在するが、掘削の結果土坑状の遺構が連なっていることがわかり方形周溝墓である確証は存在しない。

土坑 S K181は弥生時代中期中葉の土坑であるが、この遺物中から銅鐸形土製品が出土した。これは粘土紐によって両側に鱗が付けられている外縁付鈕式である。共伴遺物から畿内第Ⅲ様式の時期であることがわかり、時期を特定できる希少な資料である。その内部から舌が出土しており、音は異なっただであろうが音を出すと言う役割も果たしたものと想定できる。銅鐸形土製品は全国から180例以上出土しているが、鐸身と舌が共伴した例は本例以外にはない。なお、調査地の南には中期中葉の方形周溝墓を検出した下植野南遺跡があり、今回の調査地との関係が問われるところである。

**古墳時代** 調子a地区の北東部の遺構検出面下層の礫層から古墳時代後期の須恵器片が出土している。この地域では古墳時代の遺構をまったく検出できなかった。南東部分で検出できた遺構は庄内期と古墳時代前期の竪穴式住居跡である。乙訓地域は元稲荷古墳・寺戸大塚古墳といった古墳時代初頭～前期の首長墓が多く残っている地域である。調子地区に隣接して鳥居前古墳(福永ほか1990)、境野1号墳(古閑ほか2007)の前期古墳がある。これらの古墳に対応する集落遺跡が発見されていなかった。この地域で河川に削り残された地域で存在することは、本来川に近い部分に古墳時代の前期の集落が広がっており、その後の河道の変更によって居住地が削られてしまったと仮定することもできる。

**長岡京期** 長岡京条坊復原によると、今回の調査地は右京九条一・二町に当たる。調子a地区の北東部は後述するように、平安時代に徐々に地形面が安定し、中世に遺構が営まれるようになった。よってこの地域には長岡京期の遺構が仮に存在していたとしても、その後の改変によって残っていないことになる。南西部の地域では遺構が存在していたならば残っているはずであるが、検出することができなかった。遺物の中には長岡京期としてもおかしくないものも存在する。

**平安時代・中世** a2地区ではS D30から平安時代前期から中期の遺物が多く出土した。この溝は長岡京跡右京第968次調査(森島2011)で検出されたS D36と同じものである。右京第968次調査では溝の中から三重圏文軒丸瓦、平城宮式6663E式軒平瓦や凝灰岩片が出土している。今回の調査でも瓦片、凝灰岩、風招などが出土している。これら溝の遺物は、現在の集落が存在する西側

の地形が高くなった部分から捨てられていることから、未知の古代寺院が調査地西側に存在していたことが窺われる。その古代寺院は瓦が平城宮に使われているものであることから、長岡京期の寺院修理の可能性があり、長岡京期にも存在していた可能性も指摘できる。

古墳時代以後で、遺構が多く確認できる時期は11世紀から12世紀にかけてである。土地が安定し、離水した後集落が広がったものと考えられる。遺跡内ではa1地区のS B 01、a4-1地区のS B 01、a4-2のS B 705の3棟の掘立柱建物跡を検出することができた。また同時期の井戸S E 244のほか多数の柱穴、土坑を検出することができた。また12世紀には木棺墓S T 201が作られた。

12世紀以後、この地域では耕作溝や野井戸といった耕作関係の遺構があるのみで、居住域としての役割を果たしていなかったものと考えられる。

#### 参考文献

- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 岡崎研一ほか「京都第二外環状道路関連遺跡平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 古関正浩ほか『境野1号墳』大山崎町教育委員会 2007
- 中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(長岡京跡右京第927次)・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 福永伸哉ほか『鳥居前古墳-総括編-』大阪大学文学部考古学研究室 1990
- 増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 森島康雄「長岡京跡右京第968次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第141冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2011
- 肥後弘幸「長岡京市調子2丁目出土の銅鐸形土製品について」(『京都府埋蔵文化財情報』第111号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010

# 圖 版



(1) 銅鐸形土製品



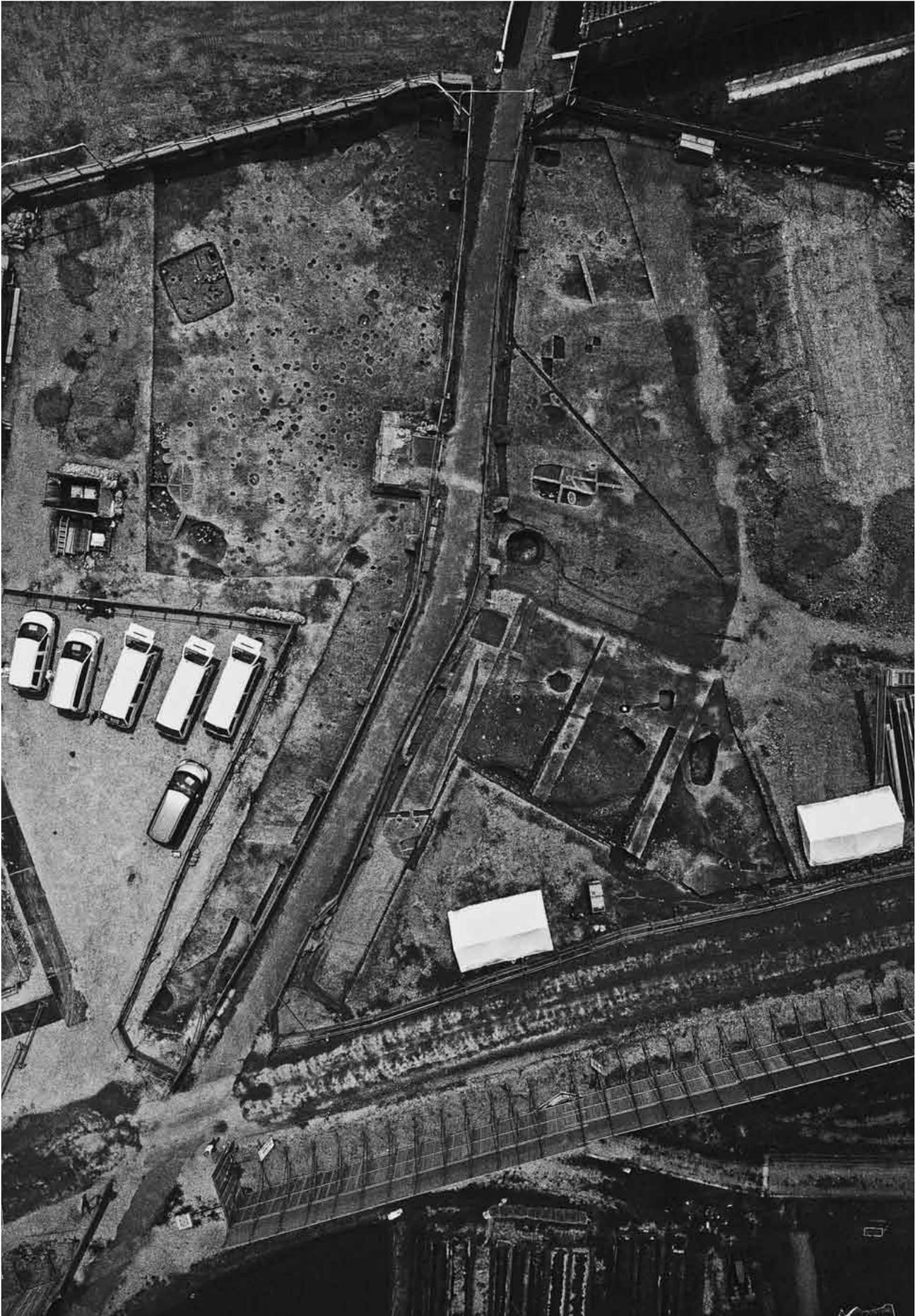
(2) 風招



調子a1・3地区全景(上が北)



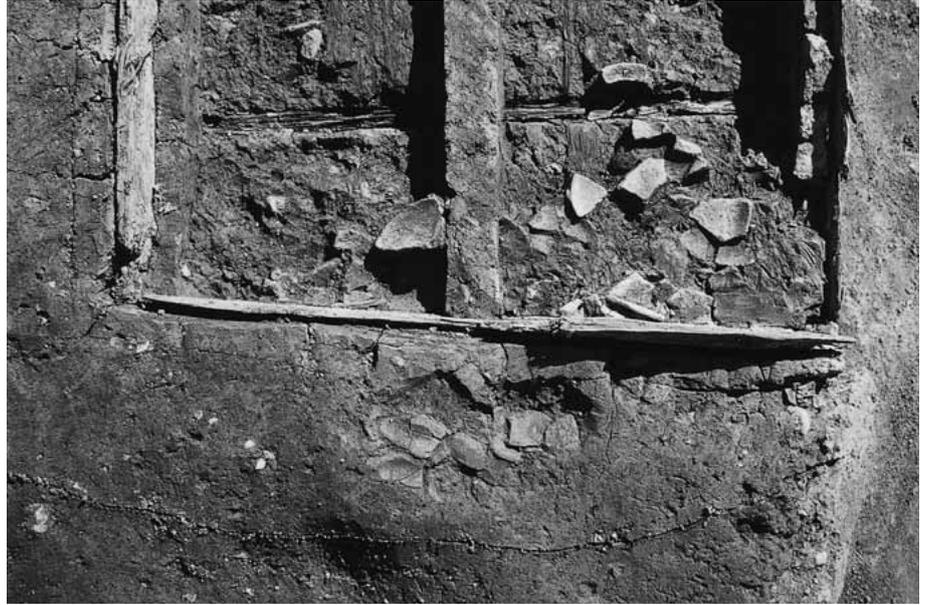
調子a2地区全景(上が北)



調子a4-1地区全景(上が東)



調子a4-2地区全景(上が北)



(1) 調子a1地区木棺墓 S T201  
遺物出土状況(上が南)



(2) 調子a1地区木棺墓 S T201全景  
(南から)



(3) 調子a1地区木棺墓 S T201全景  
(東から)



(1) 調子a1地区木棺墓 S T201  
完掘状況(東から)



(2) 調子a1地区井戸 S E244全景  
(東から)



(3) 調子a1地区井戸 S E244  
断ち割り(東から)



(1) 調子a1地区井戸 S E 244  
井戸組西面(東から)



(2) 調子a1地区井戸 S E 244  
井戸組東面(西から)



(3) 調子a1地区井戸 S E 244  
井戸組南面(北から)



(1) 調子a1地区井戸 S E 244  
井戸組北面(南から)



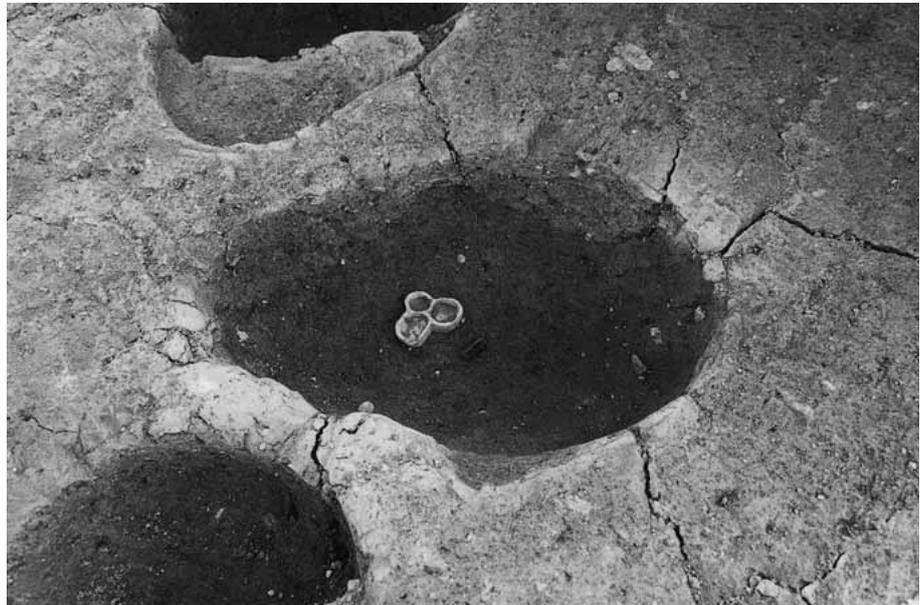
(2) 調子a1地区掘立柱建物跡 S B 01  
(西から)



(3) 調子a1地区掘立柱建物跡  
S B 01柱穴 S P 45(南から)



(1) 調子a1地区掘立柱建物跡  
S B01柱穴S P 247(東から)



(2) 調子a1地区柱穴S P 27  
遺物出土状況(北東から)



(3) 調子a1地区柱穴S P 84  
遺物出土状況(南東から)



(1) 調子a1地区柱穴 S P 44  
遺物出土状況(南から)



(2) 調子a1地区柱穴 S P 111  
遺物出土状況(南から)



(3) 調子a1地区柱穴 S P 222  
遺物出土状況(南から)



(1) 調子a1地区土坑 S K 200 全景  
(東から)



(2) 調子a1地区土坑 S K 200  
遺物出土状況(北から)



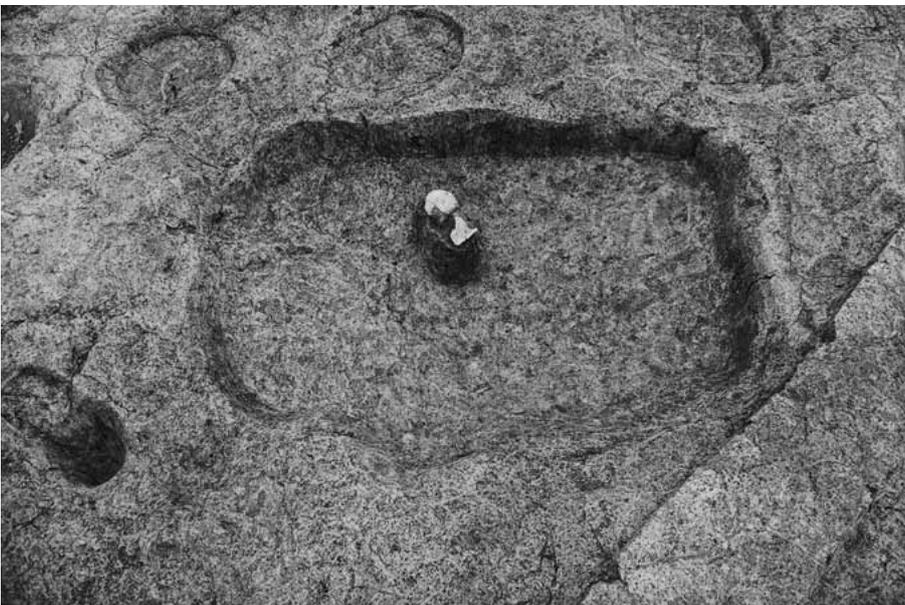
(3) 調子a1地区土坑 S K 30  
遺物出土状況(南から)



(1) 調子a1地区土坑 S K 41  
遺物出土状況(東から)



(2) 調子a1地区土坑 S K 78  
遺物出土状況(西から)



(3) 調子a1地区土坑 S K 175  
遺物出土状況(南から)



(1) 調子a1地区土坑 S K 181  
遺物出土状況(東から)



(2) 調子a1地区土坑 S K 181  
完掘状況(西から)



(3) 調子a1地区溝 S D172全景  
(西から)



(1) 調子a2地区全景(南から)



(2) 調子a2地区上層溝群(南東から)



(3) 調子a2地区掘立柱建物跡 S B01  
(北西から)

(1) 調子a2地区掘立柱建物跡  
S B01柱穴P 1 (南から)



(2) 調子a2地区掘立柱建物跡  
S B01柱穴P 3 (南から)

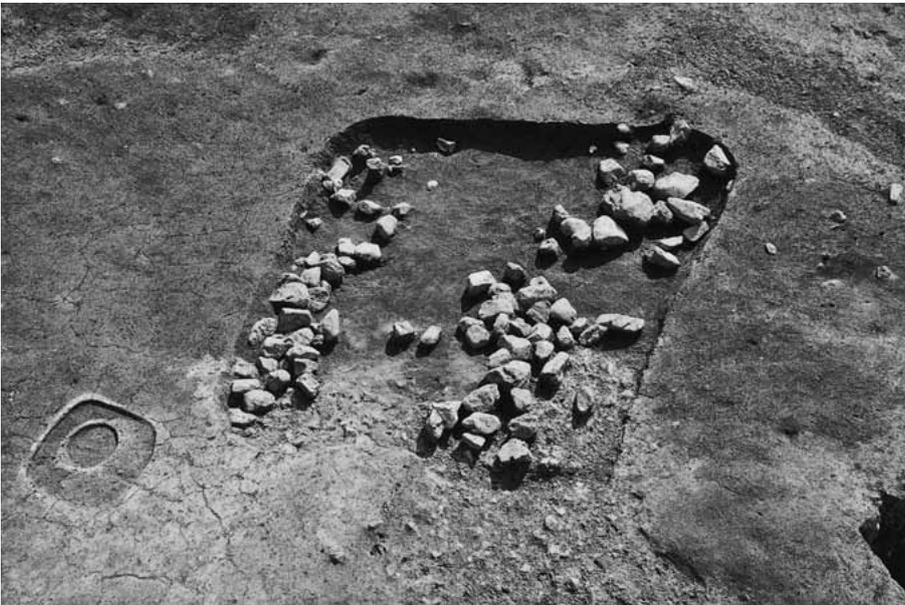


(3) 調子a2地区掘立柱建物跡  
S B01柱穴P 6 (南から)





(1) 調子a2地区土坑 S K 21  
(南から)



(2) 調子a2地区集石土坑 S X 31  
(北から)



(3) 調子a2地区溝 S D 30(南から)



(1) 調子a2地区溝 S D30断面  
(南から)



(2) 調子a3地区全景(北から)



(3) 調子a3地区井戸 S E01  
(北東から)



(1) 調子a4-1地区西部(東から)



(2) 調子a4-1地区溝 S D554  
(東から)



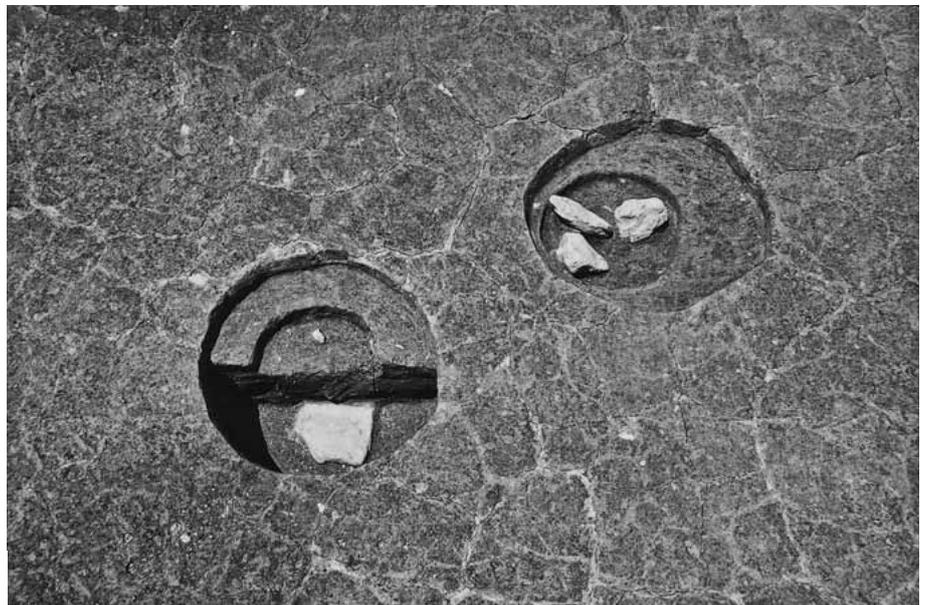
(3) 調子a4-1地区土坑 S K356 ~  
358全景(南から)



(1) 調子a4-1地区柱穴 S P 351  
(東から)



(2) 調子a4-1地区柱穴 S P 352  
(東から)



(3) 調子a4-1地区柱穴 S P 353・355  
(東から)



(1) 調子a4-1地区柱穴 S P 354  
(東から)



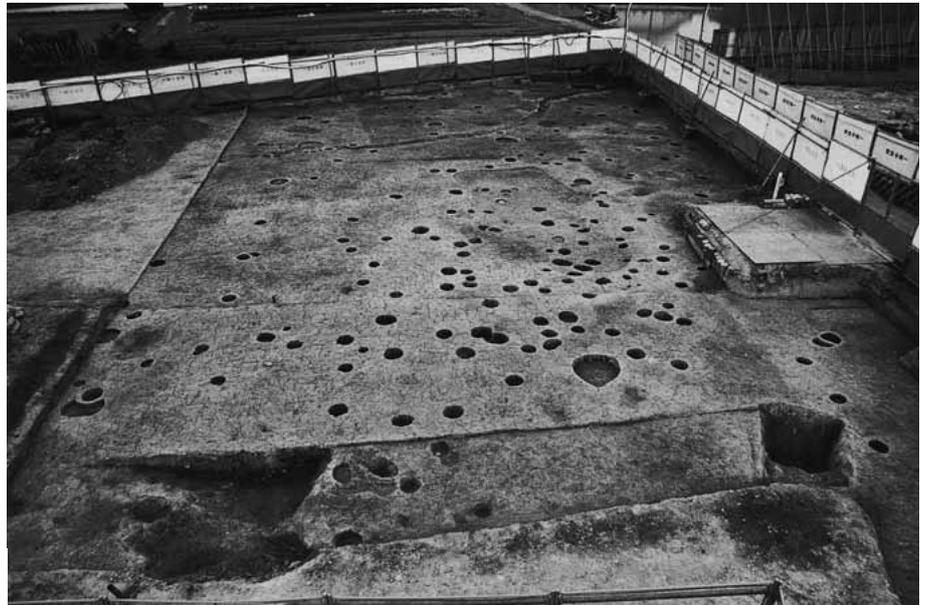
(2) 調子a4-1地区柱穴 S P 360  
(東から)



(3) 調子a4-1地区柱穴 S P 467  
(東から)



(1) 調子a4-1地区柱穴 S P 469  
(東から)



(2) 調子a4-1地区掘立柱建物跡  
S B01(西から)



(3) 調子a4-1地区掘立柱建物跡  
S B01(北から)



(1) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H562(南東から)



(2) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H562・568(南東から)



(3) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H561遺物出土状況(南から)



(1) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H561(北西から)



(2) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H561東隅部(北西から)



(3) 調子a4-1地区竪穴式住居跡  
S H702(北から)



(1) 調子a4-1地区土坑 S K565・  
566・640(西から)



(2) 調子a4-1地区土坑 S K567  
(北から)



(3) 調子a4-1地区土器埋納遺構  
S X614(北から)



(1) 調子a4-2地区南部(西から)



(2) 調子a4-2地区北部(南から)



(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705(西から)



(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 1 (東から)



(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 2 (南から)



(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 3 (東から)



(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 5 (東から)



(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 7 (東から)



(3) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P 8 (東から)



(1) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P9(東から)



(2) 調子a4-2地区掘立柱建物跡  
S B705柱穴P11(南西から)



(3) 調子a4-2地区土坑S K709  
(北から)



(1) 調子a4-2地区土坑 S K 640  
(南から)



(2) 調子a4-2地区土坑 S K 765  
(北から)



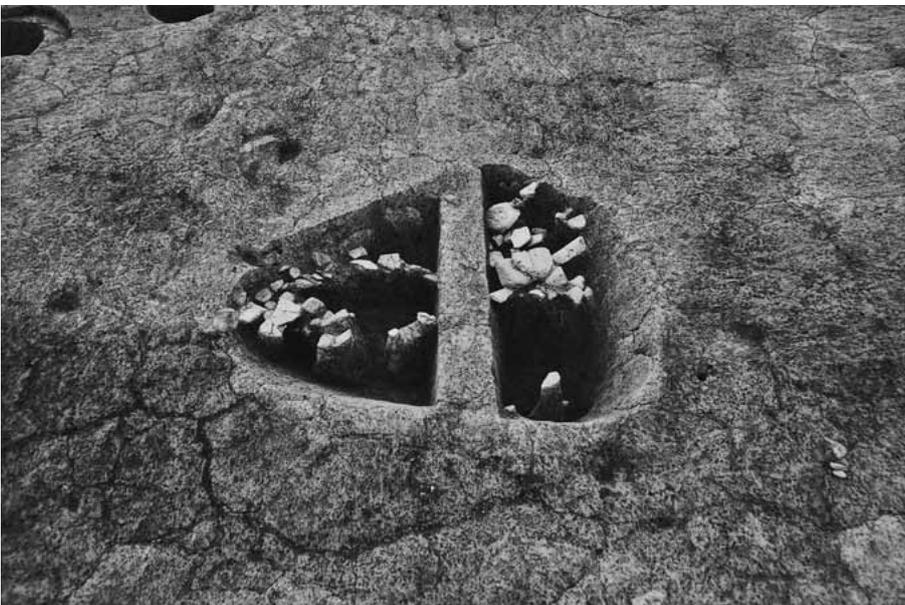
(3) 調子a4-2地区土坑 S K 724  
(東から)



(1) 調子a4-2地区土坑 S K727  
(東から)



(2) 調子a4-2地区土坑 S K735  
(東から)



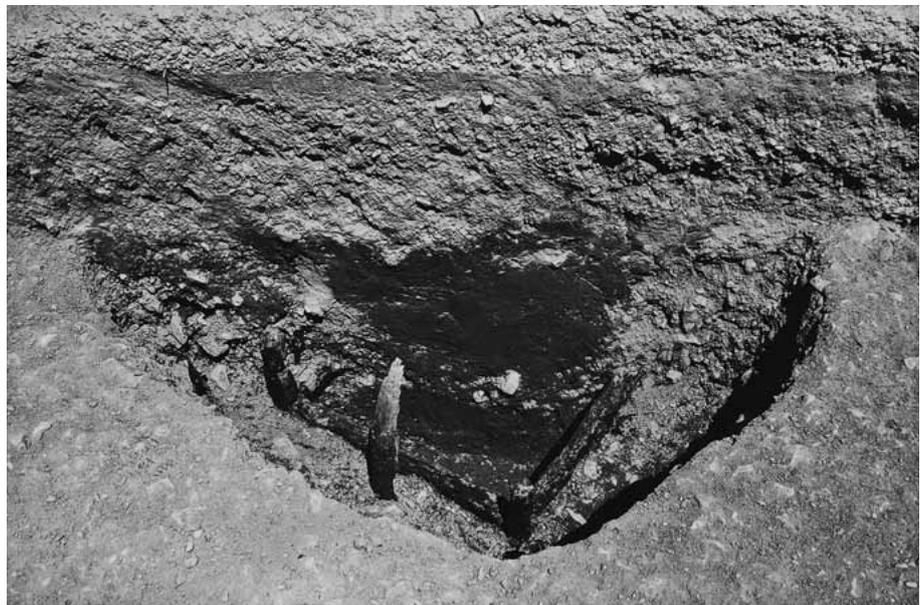
(3) 調子a4-2地区土坑 S K737  
(東から)



(1) 調子a5地区全景(北から)



(2) 調子a5地区全景(南から)



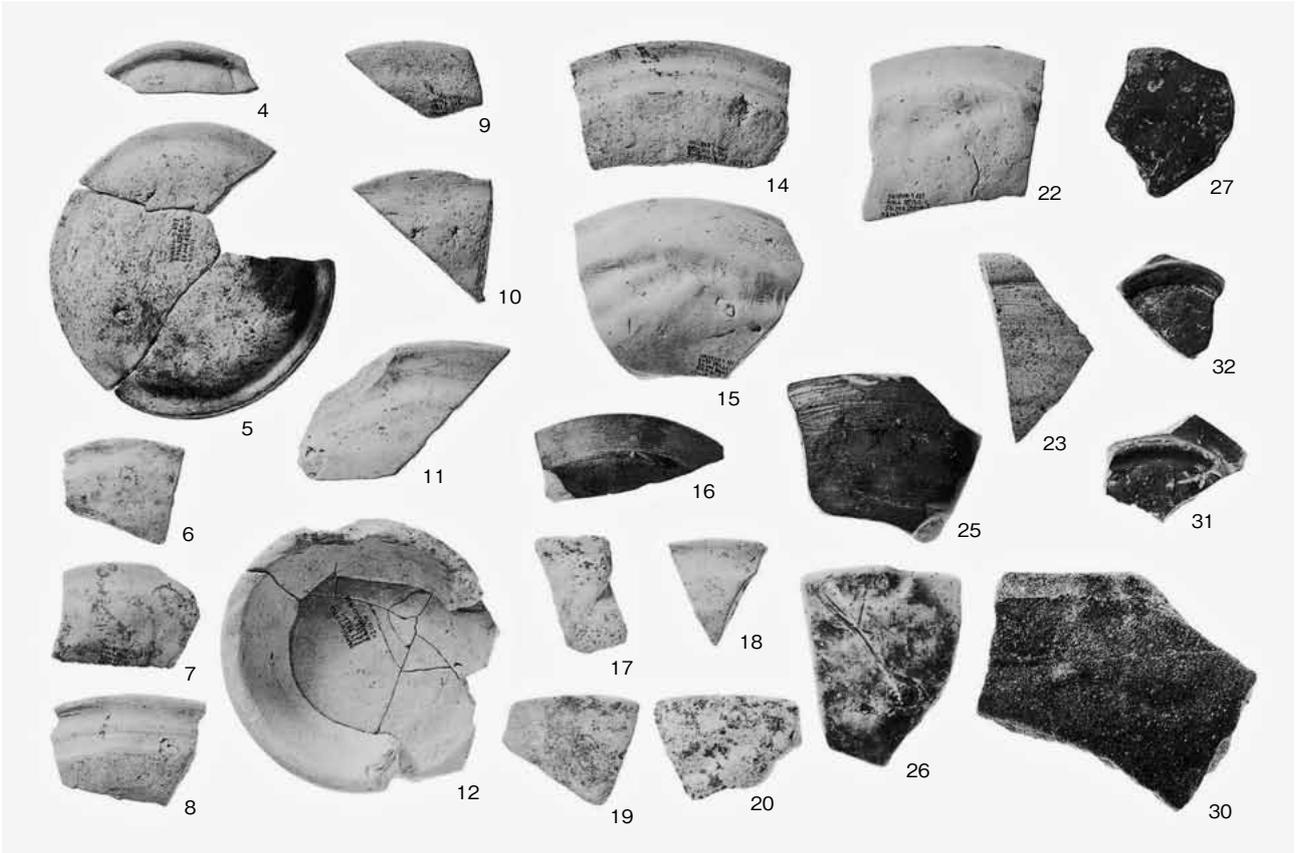
(3) 調子a5地区井戸 S E 01  
(南から)



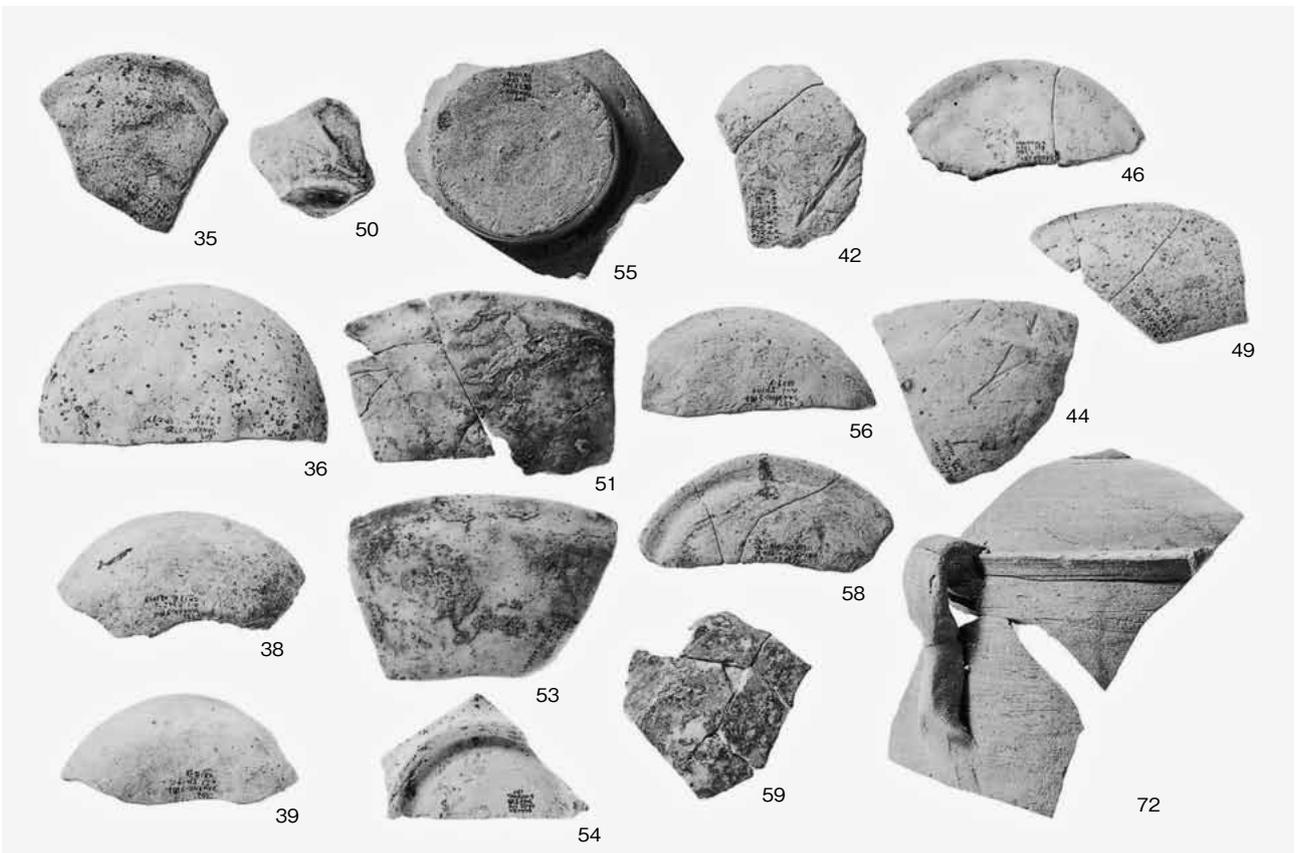




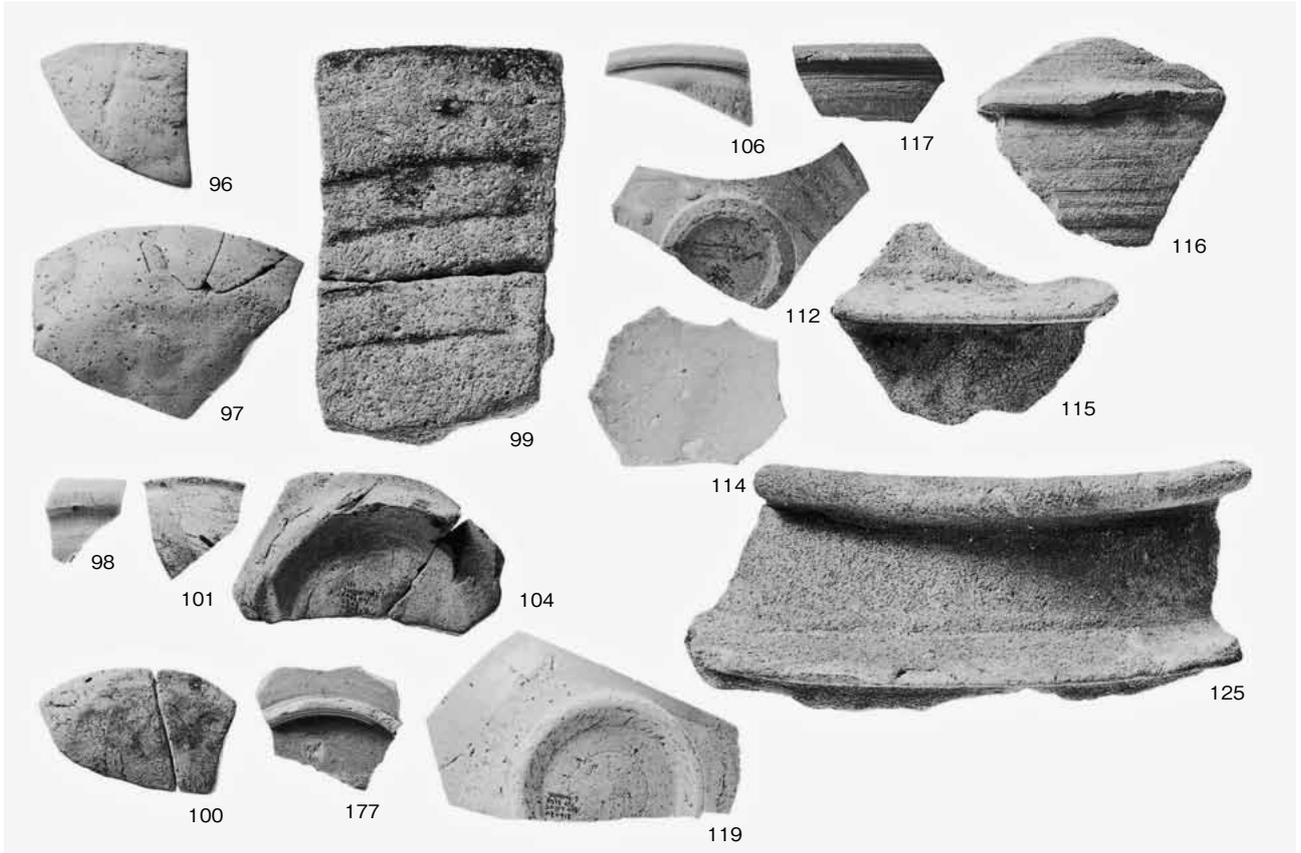




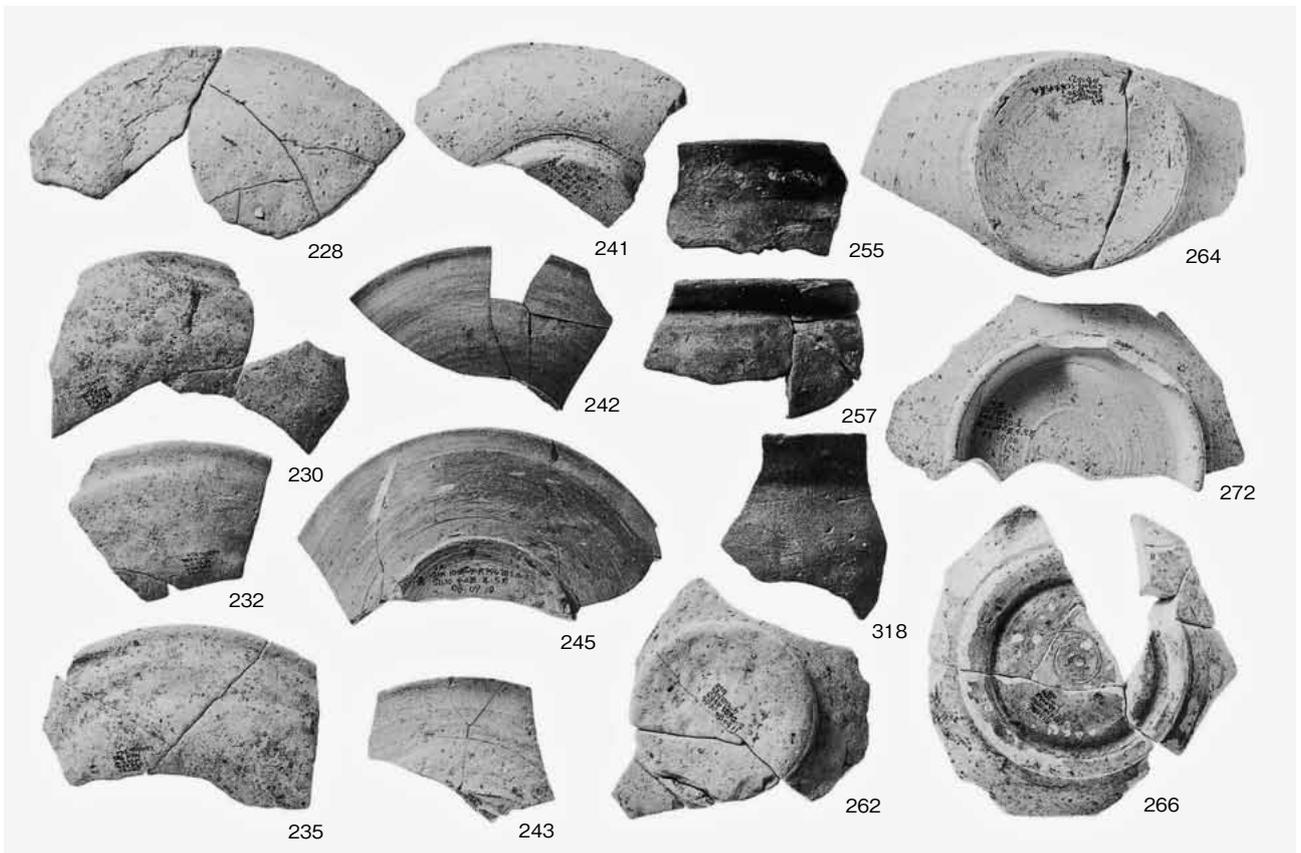
(1) 出土遺物 5



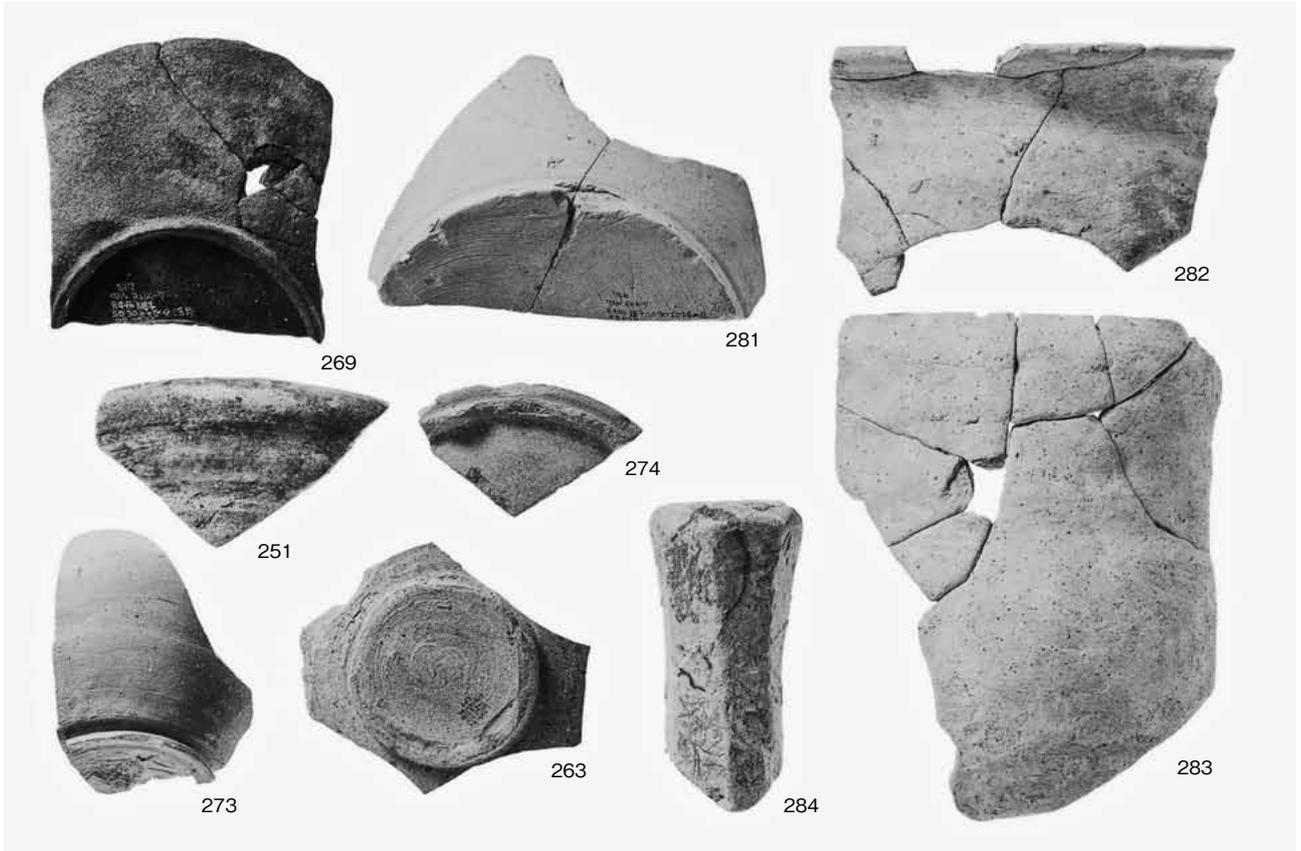
(2) 出土遺物 6



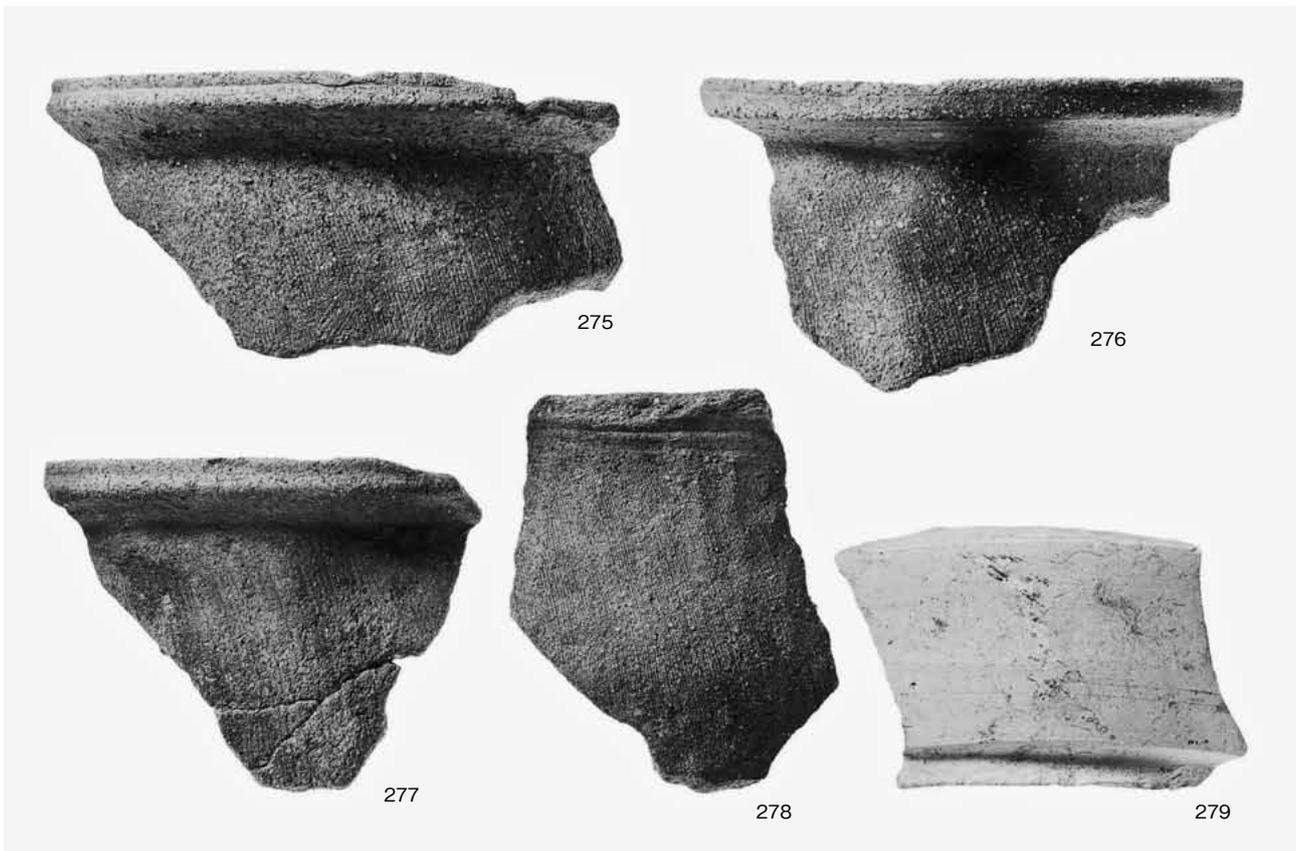
(1) 出土遺物 7



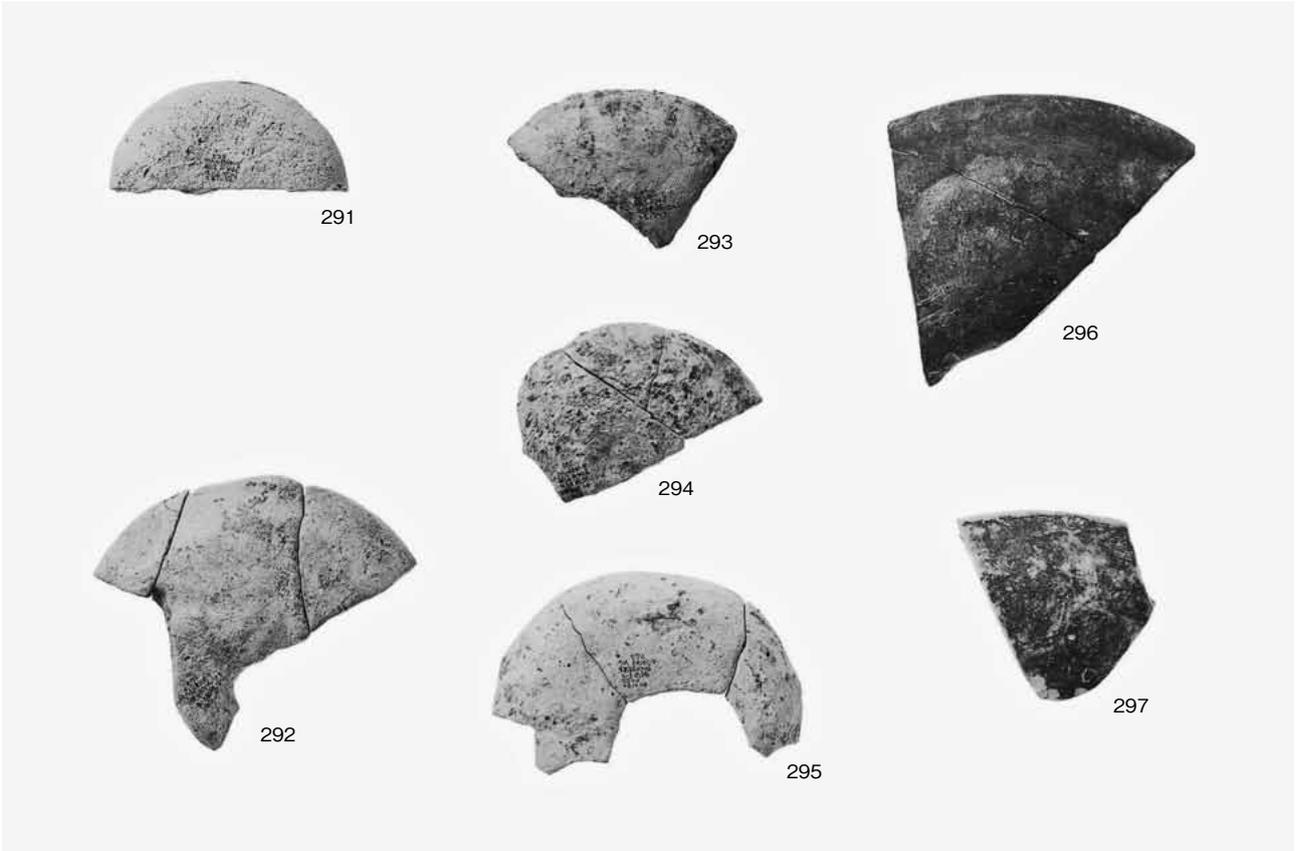
(2) 出土遺物 8



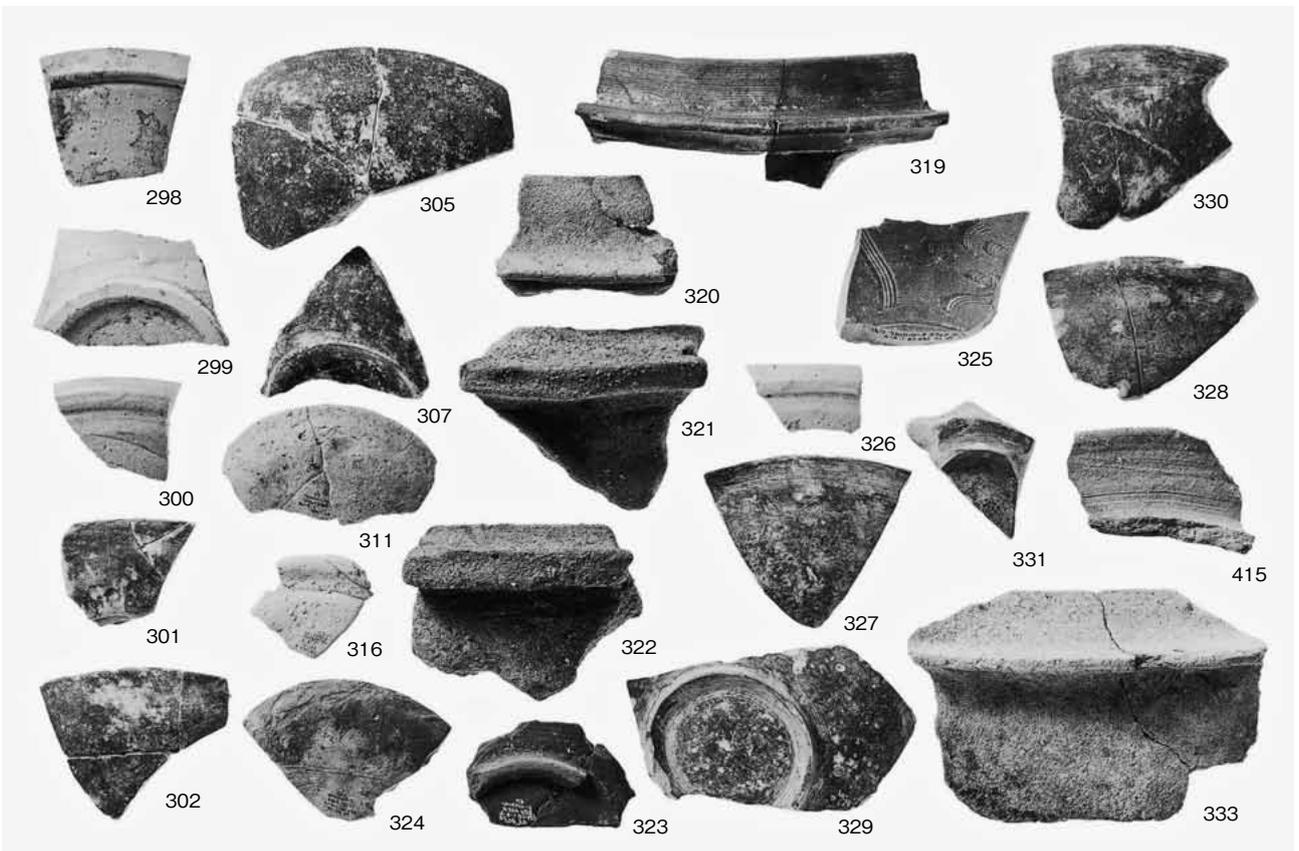
(1) 出土遺物 9



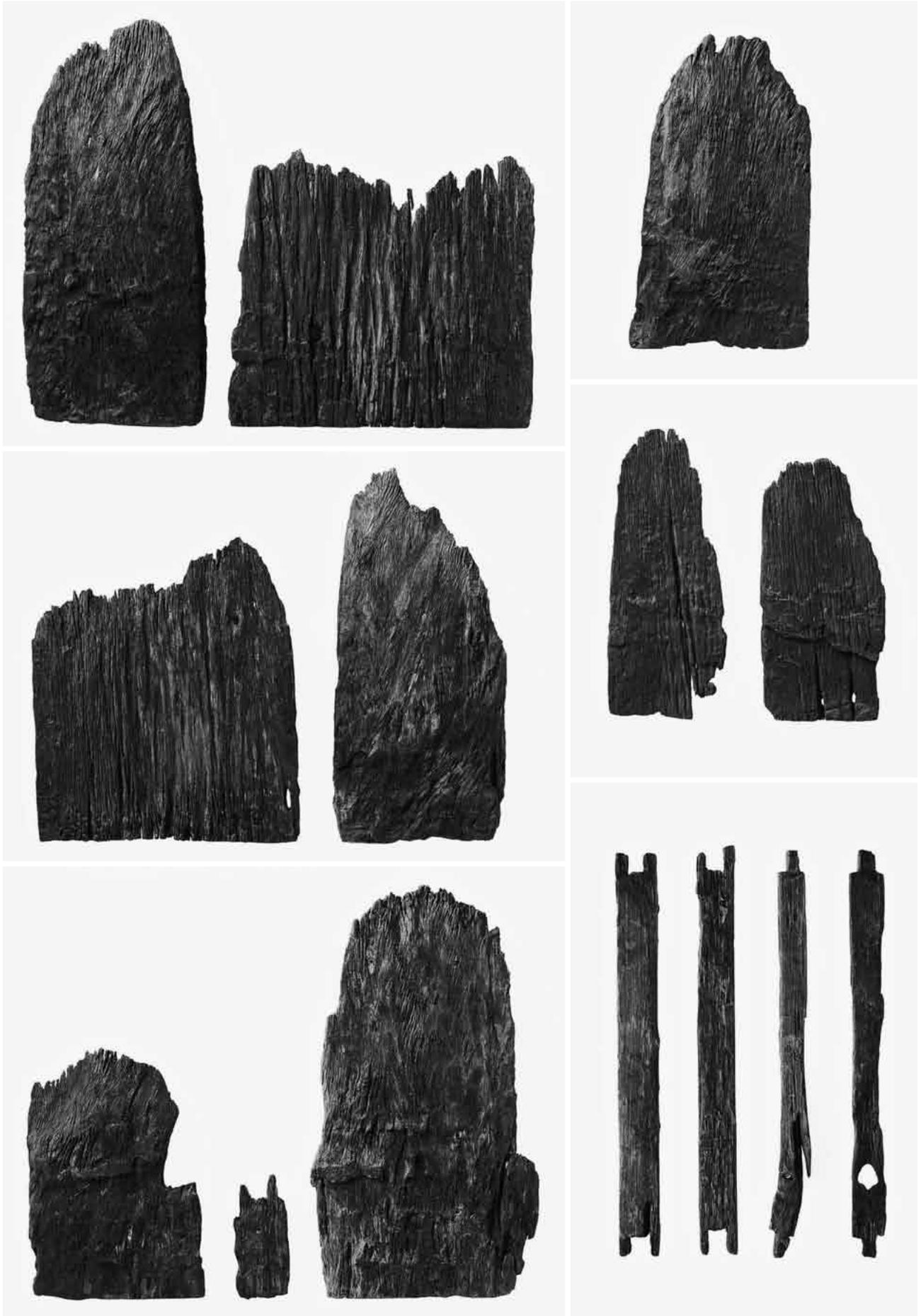
(2) 出土遺物 10



(1) 出土遺物11



(2) 出土遺物12



井戸 S E 244部材